

上野原遺跡
智光寺遺跡
切附遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1987. 3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

上野原遺跡
智光寺遺跡
切附遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

1987. 3

山梨県教育委員会
関東農政局笛吹川農業水利事業所

序

本報告書は、1984・85年度に実施した笛吹川農業水利事業国営管水路の幹線及び副幹線敷設工事に伴う事前発掘調査の結果をまとめたもので、対象遺跡は上野原遺跡、智光寺遺跡、切附遺跡の3遺跡であります。

これらの遺跡は山梨県東八代郡境川村・中道町に所在し、いずれも甲府盆地南東辺に横たわる曾根丘陵に位置しております。曾根丘陵は八ヶ岳山麓地域と並んで県内でも有数の遺跡の密集する地域として知られ、特に縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺跡が濃厚に分布しております。

1984年に調査された中道町の上野原遺跡は、縄文時代前期から中期に至る集落跡で、住居址16軒、土塹95基などを含む多数の遺構が発見され、各時期の土器や石器などが出土いたしました。この遺跡は、1971年にも甲府一精進湖有料道路建設に伴って発掘調査された経緯があり、前後2度にわたる調査によって集落の規模と時代的位置づけを明らかにすることができました。

一方、境川村に位置する智光寺遺跡ではこれまで確認されていなかった古墳の存在が明らかとなり、隣接する切附遺跡からも古墳時代の須恵器や鐵器が出土しており、この付近に後期古墳群が展開していたことを推定する資料が得られました。本報告書が、多くの方々の研究にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜わった関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

うえ の はら
上 野 原 遺 跡

例　　言

1. 本報告書は、昭和59年度の笛吹川農業水利事業国営幹線管水路敷設工事に伴って発掘調査された山梨県東八代郡中道町上野原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、山梨県教育委員会が農林水産省関東農政局の委託と文化庁の国庫補助金を受けて実施した。
3. 発掘調査及び出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターで行った。発掘は同機関文化財主事中山誠二、出土品整理は長沢宏昌、および中山が担当した。
4. 本報告書は中山が編集を行い、執筆はⅣ章第1節を河西学（現在山梨文化財研究所第4室長）、その他については中山が行った。
5. 写真撮影は、遺構・遺物ともに中山が行った。土器展開写真は小川忠博氏による。
6. 遺構及び遺物のトレースは、新津重子、日向千恵が行った。
7. 本報告書にかかる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 出土品整理参加者
長田久美子、桜井里子、佐野生子、五味信子、宮川治子、中橋由美、石原はつ子、加藤綾子、田中正江、田中弘子、長田純子、梶本宏、小池和仁、遠藤映子、石田文次郎、山本治代、渡辺薰、高野俊彦、羽中田恵子、丸山孝子、広瀬千江美、坂本穂波
9. 発掘調査にあたって文化庁文部技官岡本東三氏にご指導を賜わった。

凡　　例

1. 本書の遺構・遺物の挿図縮尺は原則として次の通りである。

調査区域位置図1/5000、調査区域図1/1500、遺構配置図1/500、住居址1/60、炉址1/30、土塙1/40、土塙微細図1/20、竪穴状遺構1/60、集石1/20、単独埋甕土塙1/20、溝1/60又は1/90、縄文土器実測図1/6、拓本1/3、土偶1/2、土製円盤1/3、石鑑2/3打製・磨製石斧1/3、石匙1/2、磨石・凹石1/3、石皿・多孔石1/6

2. 遺構挿図内の水系レベルは海拔高を示す。

3. 表の記述について

- (1) 遺構の計測値は長軸方向と短軸方向の最長部分の距離である。
- (2) 遺構・遺物の法量で（　）内の数値は推定値を表わす。

目 次

序 例 凡 例		
第 I 章	調査状況	1
	第1節 調査に至る経過	1
	第2節 調査組織	1
第 II 章	遺跡概況	2
	第1節 遺跡の位置と周辺の環境	2
	第2節 調査区域の設定と調査方法	4
	第3節 基本層序	7
第 III 章	遺構と遺物	8
	第1節 B区の遺構と遺物	8
	1. 住居址と出土遺物	8
	2. 土塙と出土遺物	37
	3. 単独埋甕	59
	4. 集石遺構	64
	5. 坚穴状遺構	64
	6. 溝状遺構	66
	第2節 C区の遺構と遺物	68
	1. 住居址と出土遺物	68
	2. 土塙と出土遺物	71
	3. 坚穴状遺構	73
	第3節 E区の遺構と遺物	73
	1. 土塙と出土遺物	73
	2. 配石遺構	74
	第4節 その他の遺物	76
	1. 遺構外出土土器	76
	2. 土製品	77
	3. 石器	79
第 IV 章	各 説	95
	第1節 上野原遺跡の火山灰層	95
	第2節 桶文時代の集落とその問題点	99

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第34図 10号住居址出土土器	26
第2図 上野原遺跡調査区域位置図	4	第35図 11号住居址	27
第3図 調査区域図	5~6	第36図 11号住居址炉	28
第4図 基本構造	7	第37図 11号住居址出土土器(1)	29
第5図 3号住居址炉	8	第38図 11号住居址出土土器(2)	30
第6図 B区・C区遺構配置図	9~10	第39図 12号住居址	31
第7図 3号・4号・6号住居址	11	第40図 12号住居址炉	31
第8図 3号住居址出土土器(1)	12	第41図 12号住居址出土土器	32
第9図 3号住居址出土土器(2)	12	第42図 13号・15号住居址	33
第10図 4号住居址遺物出土状況	13	第43図 13号住居址炉	33
第11図 4号住居址出土土器(1)	14	第44図 13号住居址炉体土器	33
第12図 4号住居址出土土器(2)	14	第45図 13号住居址出土土器	34
第13図 6号住居址炉	15	第46図 15号住居址出土土器	35
第14図 6号住居址炉体土器	15	第47図 14号住居址・31号土塙	35
第15図 5号住居址炉	15	第48図 14号住居址出土土器	35
第16図 5号・9号住居址	16	第49図 16号住居址	36
第17図 5号住居址出土土器(1)	17	第50図 16号住居址炉	36
第18図 5号住居址出土土器(2)	18	第51図 16号住居址出土土器	36
第19図 9号住居址炉	19	第52図 18号・19号土塙	37
第20図 9号住居址出土土器(1)	19	第53図 23号土塙	38
第21図 9号住居址出土土器(2)	19	第54図 35~38号土塙	39
第22図 7号住居址	20	第55図 35号土塙	40
第23図 7号住居址炉	21	第56図 36号・37号土塙	40
第24図 7号住居址出土土器(1)	21	第57図 39号土塙	41
第25図 7号住居址出土土器(2)	21	第58図 40号土塙	42
第26図 8号住居址	22	第59図 44号土塙	43
第27図 8号住居址炉	23	第60図 58号土塙	43
第28図 8号住居址埋甕	23	第61図 82号・83号土塙	44
第29図 8号住居址出土土器(1)	23	第62図 93号土塙	45
第30図 8号住居址出土土器(2)	24	第63図 16号・17号土塙	48
第31図 10号住居址	25	第64図 34号・41号~43号・85号土塙	48
第32図 10号住居址炉	25	第65図 20号・45号~48号・50号	49
第33図 10号住居址出土土器(1)	26	57号土塙	49

第 66 図	44号・49号・51号～56号土塙	50	第101 図	E区全体図	74
第 67 図	59号～64号土塙	51～52	第102 図	10号土塙	74
第 68 図	68号～76号・87号土塙	51～52	第103 図	1号配石出土土器	74
第 69 図	1号集石、65号～67号土塙	53	第104 図	1号配石	75
第 70 図	77号～81号土塙	53	第105 図	グリッド出土土器	76
第 71 図	94号・95号土塙	54	第106 図	土製品	77
第 72 図	土塙出土土器(1)	55	第107 図	土製円盤	78
第 73 図	土塙出土土器(2)	56	第108 図	打製石斧(1)	80
第 74 図	土塙出土土器(3)	57	第109 図	打製石斧(2)	81
第 75 図	土塙出土土器(4)	58	第110 図	磨製石斧	83
第 76 図	土塙出土土器(5)	59	第111 図	石鏃	83
第 77 図	埋甕位置図	59	第112 図	石錘	84
第 78 図	1号埋甕	60	第113 図	石匙	84
第 79 図	1号埋甕土器	60	第114 図	磨石・凹石(1)	86
第 80 図	2号埋甕	61	第115 図	磨石・凹石(2)	87
第 81 図	2号埋甕土器	61	第116 図	磨石・凹石(3)	88
第 82 図	3号埋甕	61	第117 図	磨石・凹石(4)	89
第 83 図	3号埋甕土器	62	第118 図	磨石・凹石(5)	90
第 84 図	4号埋甕	62	第119 図	石皿・多孔石	91
第 85 図	4号埋甕土器	63	第120 図	上野原遺跡B地区試料 1/4～1/16mm粒砂分中の 重鉱物量(H/S)、重・軽 鉱物組成	97～98
第 86 図	5号埋甕	63	第121 図	1971年調査時遺構配置図	99
第 87 図	5号埋甕土器	64	第122 図	縄文時代中期集落の推定範囲	100
第 88 図	1号集石	64			
第 89 図	2号竪穴・13号・18号・19号 ・21号・24号土塙	65			
第 90 図	2号竪穴出土土器	65			
第 91 図	1号溝	66			
第 92 図	2号溝	67			
第 93 図	3号溝	68	表1.	B区土塙一覧	45～47
第 94 図	1住居址	69	表2.	C区土塙一覧	71
第 95 図	1住居址炉	69	表3.	打製石斧一覧	81～82
第 96 図	1号住居出土土器	70	表4.	磨製石斧一覧	92
第 97 図	2号住居址	70	表5.	石匙一覧	92
第 98 図	1号～9号土塙	72	表6.	石鏃一覧	92
第 99 図	1号竪穴	73	表7.	磨石・凹石一覧	93～94
第100図	1号竪穴出土土器	73	表8.	石皿・多孔石一覧	94

表 目 次

第 93 図	3号溝	68	表1.	B区土塙一覧	45～47
第 94 図	1住居址	69	表2.	C区土塙一覧	71
第 95 図	1住居址炉	69	表3.	打製石斧一覧	81～82
第 96 図	1号住居出土土器	70	表4.	磨製石斧一覧	92
第 97 図	2号住居址	70	表5.	石匙一覧	92
第 98 図	1号～9号土塙	72	表6.	石鏃一覧	92
第 99 図	1号竪穴	73	表7.	磨石・凹石一覧	93～94
第100図	1号竪穴出土土器	73	表8.	石皿・多孔石一覧	94

図版目次

- 図版 1 上野原遺跡全景航空写真
- 図版 2 A区全景、B区作業風景、C区全景
- 図版 3 1号住居址と同址炉址、2号住居址と同址板状礫出土状況
3号・4号・6号住居址と3号住炉址
- 図版 4 5号・7号～9号住居址、7号住居址、8号住居址と同址炉址
9号住居址と同址炉址
- 図版 5 11号住居址と同址炉址、12号住居址と同址炉址、
13号・15号・16号住居址と13号住炉址
- 図版 6 1号溝、2号溝、3号溝
- 図版 7 B区土塙検出状況、18号土塙、35号土塙
- 図版 8 36号・37号土塙、40号土塙、39号土塙
- 図版 9 5号埋甕、1号集石、1号配石
- 図版10 4号住居址出土土器、5号住居址出土土器、5号住居址出土土器、
6号住居址炉体土器、7号住居址出土土器
- 図版11 8号住居址出土土器、11号住居址出土土器
- 図版12 13号住居址埋甕炉土器、18号土塙出土土器、19号土塙出土土器
23号土塙出土土器、30号土塙出土土器
- 図版13 35号土塙出土土器、36号土塙出土土器、37号土塙出土土器
39号土塙出土土器、40号土塙出土土器
- 図版14 85号土塙出土土器、1号単独埋甕土器、3号単独埋甕土器
4号単独埋甕土器、5号単独埋甕土器
- 図版15 土製円盤、石鎌
- 図版16 打製石斧
- 図版17 磨石・凹石
- 図版18 磨製石斧・石匙、熔岩
- 図版19 18号土塙出土土器展開写真、35号土塙出土土器展開写真

第Ⅰ章 調査状況

第1節 調査に至る経過

昭和59年10月1日 文化庁に発掘通知を提出する。

昭和59年10月8日 発掘調査を開始する。

昭和59年12月27日 発掘調査を終了する。

昭和60年2月7日 甲府市南警察署へ発見通知を提出する。

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者 中山誠二（文化財主事）

調査員 塚原明生、新津重子、日向千恵

作業員 田中治江、望月太千代、小林澄子、五味京子、五味当子、田中つき代
柿島伸世、柿島つねじ、渡辺喜の女、渡辺かつ子、土橋敦子、五味信子、
池谷ひでじ、池谷多称子、池谷百代、池谷太吉、池谷はつ江、池谷たつ子、
池谷松子、小林あさ子、池谷くめ子、河野まさ子、長田久美子、
渡辺礼子、桜井里子、中込秀夫、中柄みな子、佐野生子、宮川治子、
平川恵三、丸山孝子、羽中田恵子、坂本穂波、廣瀬千江美、齊藤つね子、
山下政司、渡辺澄雄、木ノ瀬いつ子、田中正江、田中弘子
中込敬子、土橋ナミエ、駿田黎子、齊藤多喜子、池谷美恵子

（順不同）

調査協力機関 中道町教育委員会

第II章 遺跡概況

第1節 遺跡の位置と周辺の環境

上野原遺跡は、山梨県東八代郡中道町右左口地内に所在する。甲府盆地南縁に東西方向に横たわる曾根丘陵の中でも最上部に位置し、標高350m前後を測る。遺跡の南側には御坂山塊に連なる日蔭山、滝戸山などが迫り東方に西川、西方に七覚川が甲府盆地にむけて北流している。このため付近は御坂山塊から北西方向になだらかに傾斜する北斜面となるが、日照条件に恵まれた台地状地形の上に遺跡は存在する。

本遺跡の所在する中道町は、曾根丘陵とその北側を西流する笛吹川の氾濫原に地形的に2分されるが、この丘陵地帯には数多くの遺跡の存在が知られている。本遺跡をのせる西川一滝戸川左岸の丘陵上だけをみても、丘陵先端部から御坂山塊へ向けて米倉山A・B遺跡、女沢遺跡、金沢天神遺跡、下向山遺跡、向山遺跡など先土器時代から古墳時代前期にかけての遺跡群が連なり、さらに小平沢古墳、天神山古墳などの前期古墳が存在する。一方、本遺跡周辺の丘陵最上部においても城越遺跡、村上遺跡、後呂遺跡など縄文時代中期から後期を中心とした集落跡が認められ、後背地にある御坂山塊と前面に広がる丘陵上の豊富な動植物資源を基盤とした縄文人の営みが看取できる。また、付近には後期古墳も幾つか点在する他、奈良・平安時代の遺跡が本遺跡東方の村上遺跡、心経寺清水遺跡、心経寺上之原遺跡などで知られている。

遺跡の所在する周辺の地域は、駿河湾沿岸と甲府盆地を結ぶ古くからの道、中道往還が存在している。この古道が文献などに登場し特に重要視されてくるのは戦国期以後のことであるが、江戸期にはこの右左口は宿場としても繁栄をみせている。しかし、一方では歴史時代以前の段階でこの古道が重要な役割をすでに担っていたことは、土器文化の流れや出現期の古墳の存在からも想像することができよう。

以上の様な歴史的環境の中に位置する本遺跡は、1971年有料道路甲府・精進湖線建設工事に伴って発掘調査されている。この時に発見された遺構は縄文時代前期末～中期にかけての住居址22軒の他、配石遺構、埋甕、土塙などを多数含む。今回の調査対象地域の一部は、その地点から10m程南側を平行して走っており、該期集落の様相と規模を再確認する上でも重要な地域である。

参考文献

中道町史編纂委員会『中道町史』上 1975

山梨県教育委員会『昭和52年度（笛吹川沿岸土地改良事業地内）埋蔵文化財分布調査報告書』1978

磯貝正義ほか『角川日本地名大辞典19 山梨県』1984 角川書店



第1図 遺跡位置図

第2節 調査区域の設定と調査方法

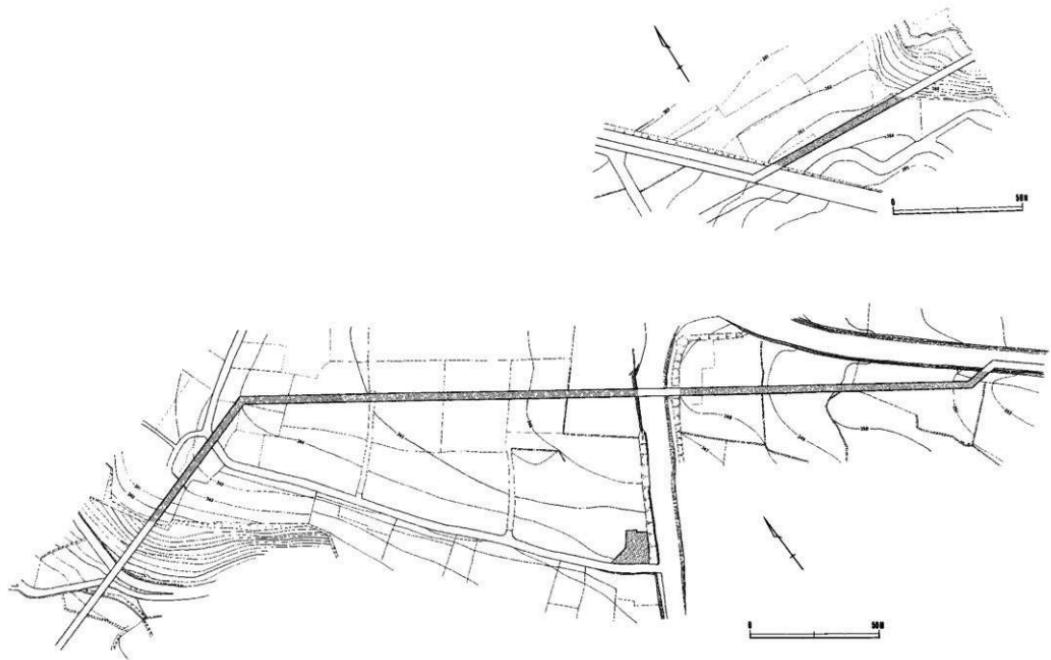
本遺跡の調査範囲は、約4.5m幅で全長380mにもおよぶため道路などによって分断される地点で便宜的に区分けを行った（第2図）。A区は西川左岸の段丘上に位置し、B区はかつて精進湖線有料道路建設に伴って調査された地域に平行した長さ120m程の区間をいう。C区は国道358号線によって分断されるがB区の西側延長線上約150mの区間を当てる。D区は、C区から南西方へ屈折し、谷部へ向って下るまでの60mの区間とする。E区はC区から南方へ50m程離れた飛地で、面積100m²ほどの狭い地区である。

調査は対象地域全域の表土を削除し、遺構確認のための精査を行った後、遺構の検出されたB区、C区についてグリッド方式による調査を実施した。グリッドは各区東端を基点とし、南北の軸をアルファベット（A・B・C）、東西の軸を算用数字（1・2…）を用いて表記した。

A区からは縄文時代中期の土器片数点が検出されたものの、遺構は全く確認されなかった。B区およびC区の東側には、縄文時代中期を主体とする住居址、土塙群が検出され、1971年に調査された同一の集落跡と考えられる。これよりやや離れたC区西端では、縄文時代前期後葉の住居址1軒が確認されているが、これと近いD区では遺構、遺物の発見がない。E区では、



第2図 上野原遺跡調査区域位置図 (1/5000)



第3図 調査区域内 (1/1500)

縄文時代中期後葉の配石遺構などが検出されている。したがって、第Ⅲ章は、遺構、遺物の発見されたB区、C区、E区について詳述する。

第3節 基本層序

上野原遺跡全体における基本層序を明らかにしておきたい。

遺跡は、北西方向へゆるやかな傾斜をなすが、調査対象地域内では基本層序に大きな変化は認められずほぼ安定している。基本層序は以下のとおり第Ⅰ層よりⅥ層に分けられる。

第Ⅰ層：表土。黒色を呈し、粒子の粗い耕作土。

第Ⅱ層：暗褐色土。遺物包含層。

第Ⅲ層：暗褐色土。Ⅴ層下のローム層に比べやや軟弱で
色調は赤味をおびる。

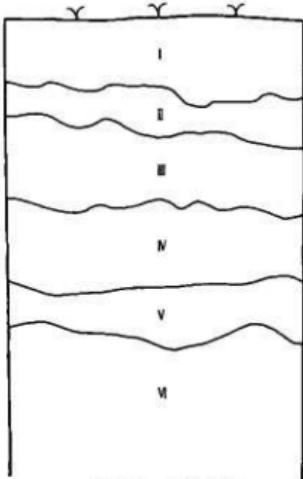
第Ⅳ層：黒褐色土。1mm大の白色粒子を含む。

第Ⅴ層：黄褐色ローム層。ブロック状に剥離するやや軟
弱なローム層。

第Ⅵ層：黄褐色ローム層。赤色スコリアを多く含む硬質
のローム層。

本遺跡の主体となる縄文時代中期の遺構はⅢ層中から掘
り込まれ、深い遺構はⅣ層上面まで至る。Ⅱ層では遺物は
包含されるものの遺構プランを確認することは困難である。

この遺跡を含めた曾根丘陵は、第四紀に基盤が形成され、
上面が風化火山灰層に覆われている。これらの火山灰層の
分析は第Ⅳ章第1節で詳しく述べることにする。



第4図 基本層序

第III章 遺構と遺物

第1節 B区の遺構と遺物

B区の遺構は、縄文時代の住居址、土塙、単独埋甕、竪穴状遺構、時期不明の溝状遺構によって構成される。遺構の分布は同区中央部より西側に集中し、東側によるほど薄くなる傾向を示す。住居址が集中する地域は同区のほぼ中央部のB-17～B-27グリッドで、5号住、7号住～13号住、15号住、16号住が重複しながら存在する。12号住より西側にやや間を開けてB区西端には3号住、4号住、6号住居址が存在する。一方、11号住居址より東側の地点では、土塙、集石、埋甕が散在するが住居址は認められない。溝状遺構は、1号溝がB-1～B-4グリッド、2号溝がB-4～B-6グリッドおよびA-6グリッド、3号溝がB-18グリッド、4号溝がB-28グリッドに各々存在する。

縄文時代の遺構調査後、B-28、B-29、B-30グリッドにおいて先土器時代文化層までの掘り下げ、該期遺構、遺物の確認調査を行ったが検出されなかった。

1. 住居址と出土遺物

(1) 3号住居址 (第5・7～9図、図版3)

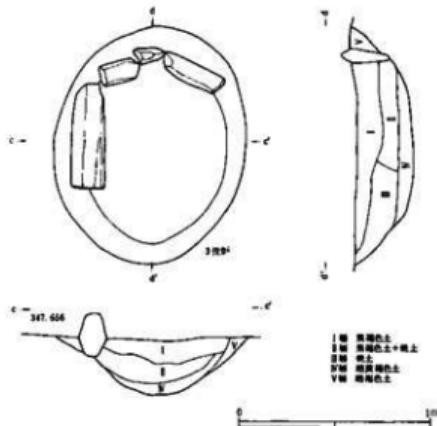
(位置) B-31～B-32グリッドに位置する。4号住、6号住と重複する。

(形状・規模) 東西に長い椭円形プランと推定される。住居址北側は調査区外へのびるため規模は明らかではないが、東西約6mを測る。

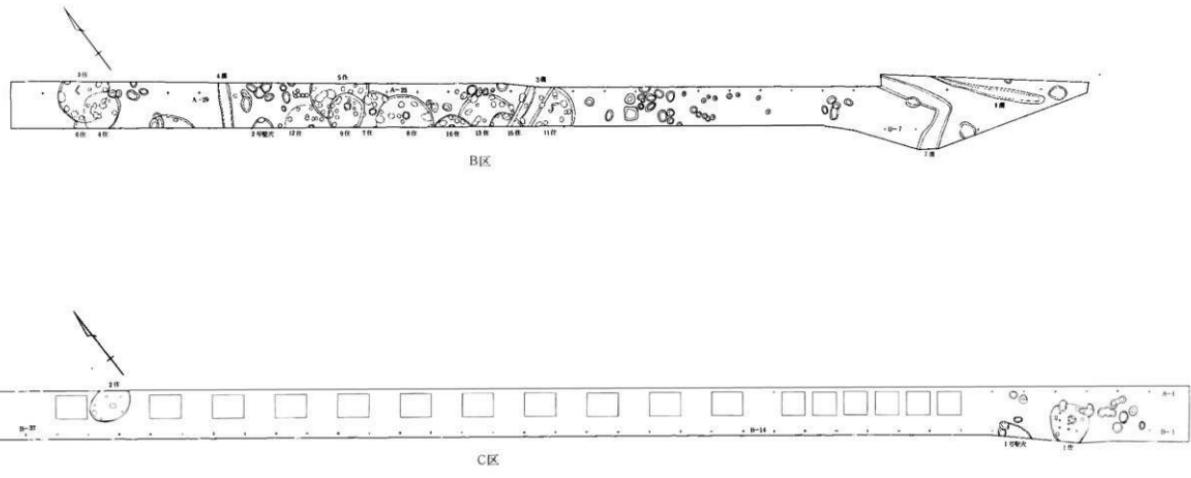
(床面・壁) 東壁は4号住居址、南壁は6号住居址との重複によって確認されなかった。残存する西壁と東壁の1部は、壁高約40cmを測る。床面は全体的に平坦で、周溝は認められない。

(炉) 住居址中央部よりやや北西に偏して存在する石囲い炉である。炉石は、北側および西側で確認されたが、南・東の2辺では検出されなかった。西側の炉石は50cm×20cm×20cm程の柱状の石を横に倒して使用しているが、北側ではこれより小さい石を3個配している。焼土は炉の中心より南側で認められた。

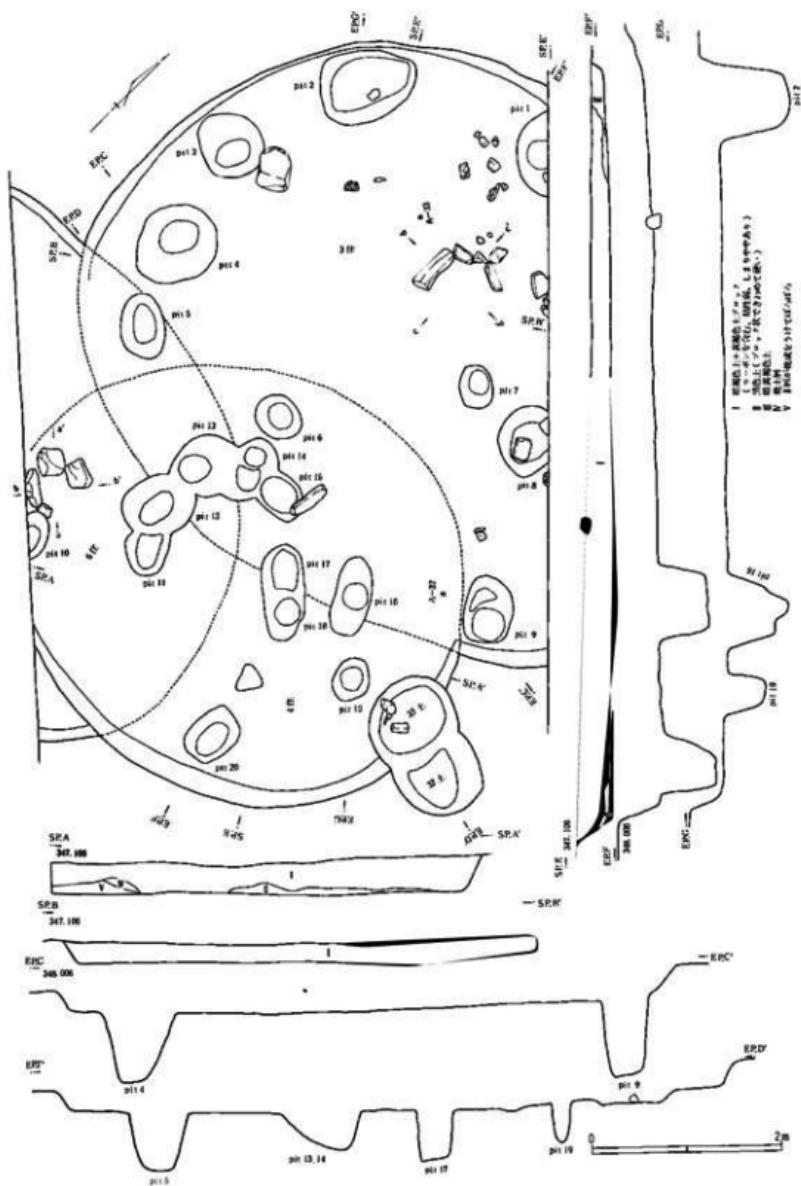
(その他の施設) 本住居址に確實に伴うと思われるピットは7つであるが、南壁よりも1～2本の存在が想定される。これらの内、壁際に存在するものが柱穴と考えられ、最小で40cm×70cm、最大で70cm×110cmの椭円形プランを呈し、深さは床面より50cm～80cmを測る。



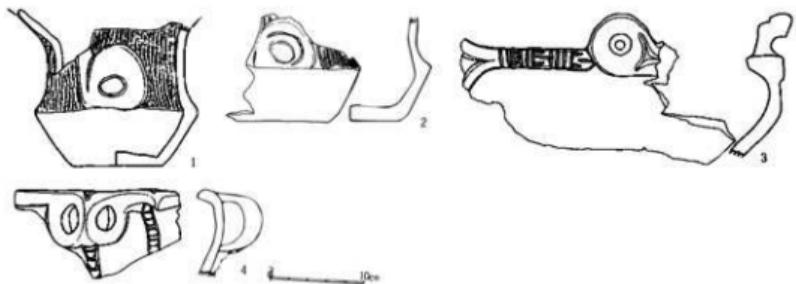
第5図 3号住居址炉



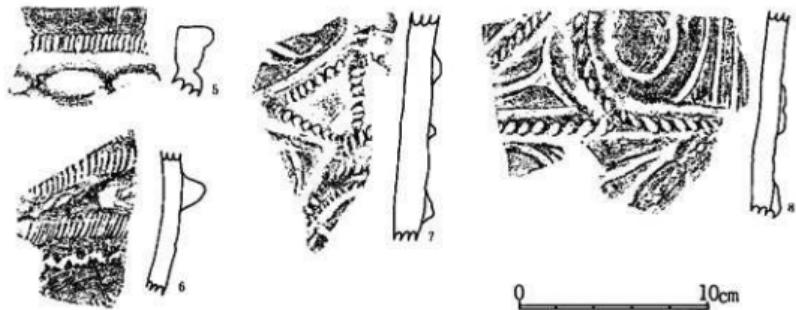
第6図 B区・C区遺構配置図



第7図 3号・4号・6号住居址



第8図 3号住居址出土土器 (1)

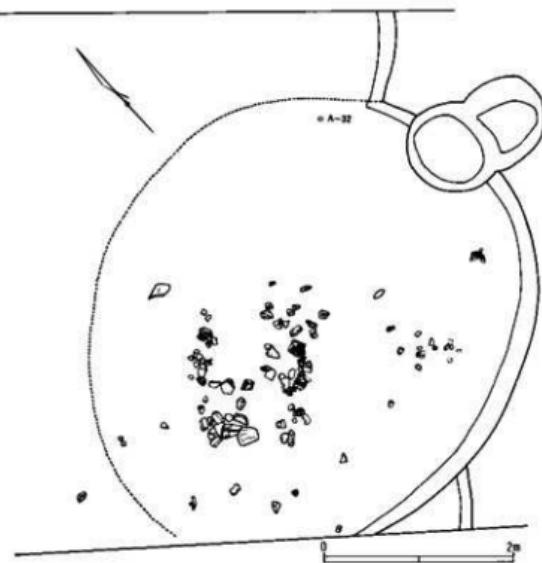


第9図 3号住居址出土土器 (2)

(出土遺物) 第8～9図が出土土器である。

- 覆土中出土。屈折底を有する深鉢形土器。上半部を欠損するが、底部径9cm、屈折部径17cmを測る。胴部に低隆帯による円形の区画を施し、その他の部分をRL縞文が覆う。色調は茶褐色、焼成良好。胎土中に長石、金雲母を含む。
- 覆土中出土。1と同様屈折底を有する深鉢形土器。胴部施文方法も1と類似する。色調は暗褐色、胎土中にやや粗い長石を多く含む。
- 覆土中出土。深鉢形土器口縁部。円板状の把手をもち、口縁直下と把手部に沈線による文様帶を有する。色調は把手部が黒褐色、その他が淡褐色を呈する。
- 覆土中出土。深鉢口縁部。口縁直下にみみづく状把手を付加し、有刻の隆帯が胴部に向って垂下する。色調は淡褐色。胎土に石英・長石粒を含む。
- ～8も覆土中出土土器であるが、5が浅い鉢形土器口縁部、6～8が深鉢形土器胴部である。以上の土器の内、6は藤内式土器、その他は井戸尻式土器に比定される。

土器以外では、土製円盤1点（第107図1）、凹石3点（第114～115図7～10）、打製石斧1点（第108図2）が出土している。



第10図 4号住居址遺物出土状況

(2) 4号住居址 (第7・10~12)

図、図版3・10)

(位置) B-31~32グリッドに位置し、3号住、6号住と重複する。

(形状・規模) 残存する東壁から推定すると直径5m程の円形乃至楕円形を呈すると考えられるが、詳細は不明である。

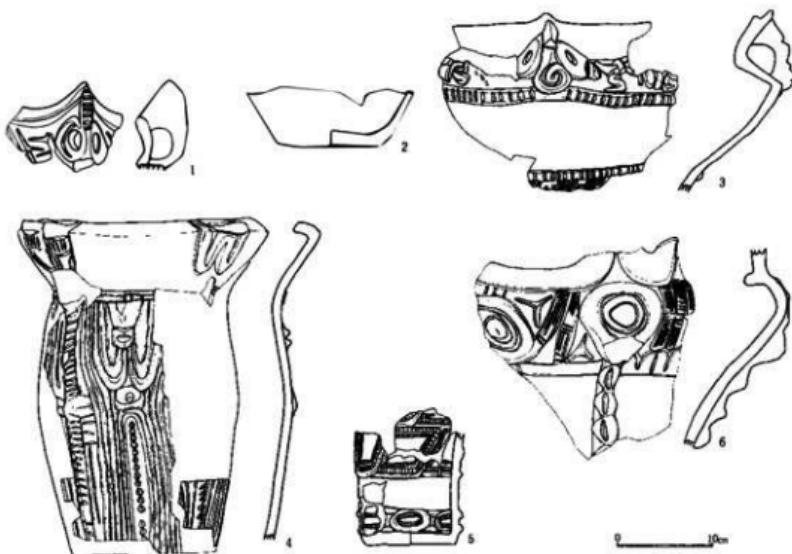
(床面・壁) 床面はほぼ平坦で、3号住とほぼ同一レベルである。壁は北半分が3号住、6号住との切り合いで確認できなかった。残存する東壁の壁高は、確認面より40~50cmを測る。

(炉) 炉址と判断できる施設は確認されなかった。

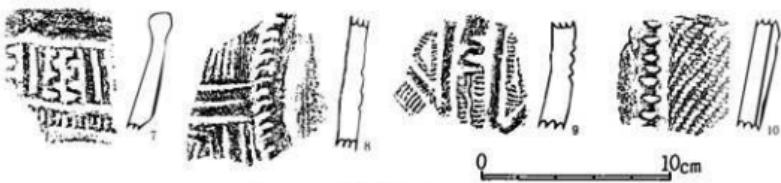
(その他の施設) 同住居址に伴うピット数は、3号住、6号住との重複のため明らかにし得ないが、ピット6、10~16、19、20が考えられる。直径50cm前後の円形ピットが多く、重複のために連続したものも存在する。深さは床面より約50cmである。

(出土遺物) 出土遺物は、住居址南側に集中し、床面より20cm程浮いた状態で検出されたものが多い。第11・12図は、本住居址の伴出土器である。

1. 深鉢形土器口縁部。山形突起の下にみみづく状把手を有する。色調は暗褐色、胎土に長石粒を多く含む。
2. 深鉢底部。底部径は10cmを測る。色調は茶褐色で胎土中に長石粒を含む。
3. 深鉢口縁部。口縁部断面形がS字状に大きく屈曲する。最上部のくびれ部にみみづく状把手を有する。口縁部に隆帶貼付による文様帯をもち、頸部隆帶下にR L繩文を施す。色調は暗褐色、胎土に長石粒を含む。外面に若干の煤が付着し、2次焼成による細かいひびが表面に認められる。
4. 深鉢形土器。口縁部が内屈し、頸部がややくびれ、胴部が樽状に膨らむ。口縁部文様は4単位と考えられ、その下方に断面三角形の有刻隆帶が垂下する。胴部には隆帶による曲線的な文様が施される。口縁部径20cm、胴部最大径21cm、現存高35cmを測る。色調は暗褐色、胎土中に長石粒を含む。
5. 33号土塙付近より出土。深鉢形土器胴部下半部。胴部中央に平行四辺形の区画帯、胴下半部に楕円区画を施し、内部に半截竹管による押し引き文を施す。
6. 深鉢形土器口縁部。口縁が内彎し、胴下半に向てゆるやかにくびれる。口縁部に隆帶と沈線による文様帯をもつ。以上の内、5が新道式、9が藤内式、その他は井戸尻式に比定される。



第11図 4号住居址出土土器 (1)



第12図 4号住居址出土土器 (2)

(3) 6号住居址 (第7・13・14図、図版3・10)

(位置) B-32グリッドに位置する。3号住、4号住居址によって切られる。

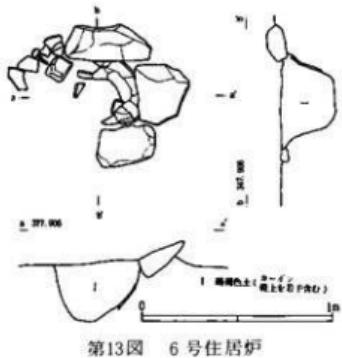
(形状・規模) 他の住居址との重複と西半分が調査区外にあるため形状・規模は不明である。

(床面・壁) 床面は3号住、4号住の床面より若干高い。壁は北西、南東壁がわずかに検出されたのみで、壁高は約20cmを測る。

(炉) 石堀い埋甕炉。東側の炉石はぬきとられている。炉石は長さ30~40cm、幅15~30cmほどの扁平な石を配している。

(その他の施設) ピットは4号住との切り合いのため確実に本住居址に伴うものは明らかにし難い。

(出土遺物) 第14図が本住居址炉体土器である。深鉢形土器上半部で口縁部を欠くが全体



第13図 6号住居址



第14図 6号住居址炉体土器

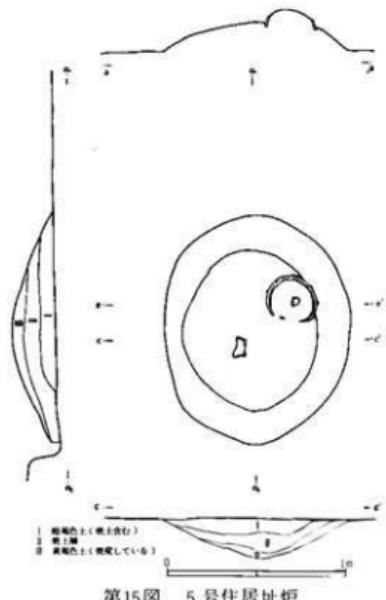
の器形は内凹する口縁と屈折底部を有するものと考えられる。文様構成などから繩文中期中葉井戸尻式に比定される。現在高17cm、最大径部44cmを測る。

(4) 5号住居址 (第15~18図、図版4・10)

(位置) A~B-23~25グリッドに位置する。7号住、9号住によって切られる。

(形状・規模) 北半分が調査区外へのび南側が7号、9号住によって破壊されるため確実な形状および規模は不明である。残存する壁から推定すると直径7.5m程の円形乃至椭円形プランを呈すると考えられる。

(床面・壁) 床面は、西側にわずかに傾斜するがほぼ平坦を示す。壁高は、確認面より20~30cm程である。



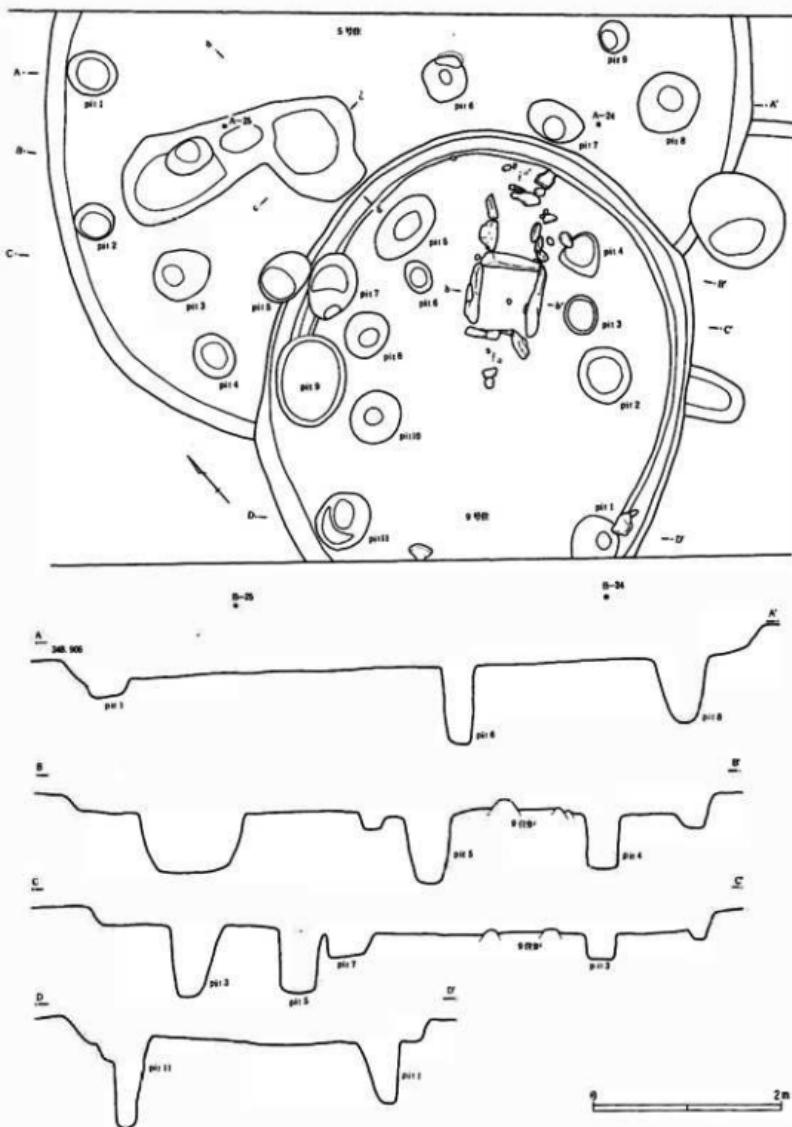
第15図 5号住居址

(炉) 住居址の中央部よりやや西に偏して存在する。形態は埋蔵炉で、炉の掘り込みは長軸130cm、短軸100cmの椭円形を呈し、25cmの深さを測る。埋蔵炉はこの掘り込みの最下部に位置し、焼土層がこれより上層に堆積することから、土器は後に炉体土器としての役割を失い、地床炉として使用されたものと思われる。

(その他の施設) 本住居址に伴うピットは11個存在するが、9号住居址内ピット3、8も5号住居に含まれる可能性がある。50~70cmの円形を呈するものが主体を占め、深さ70~90cmを測る。

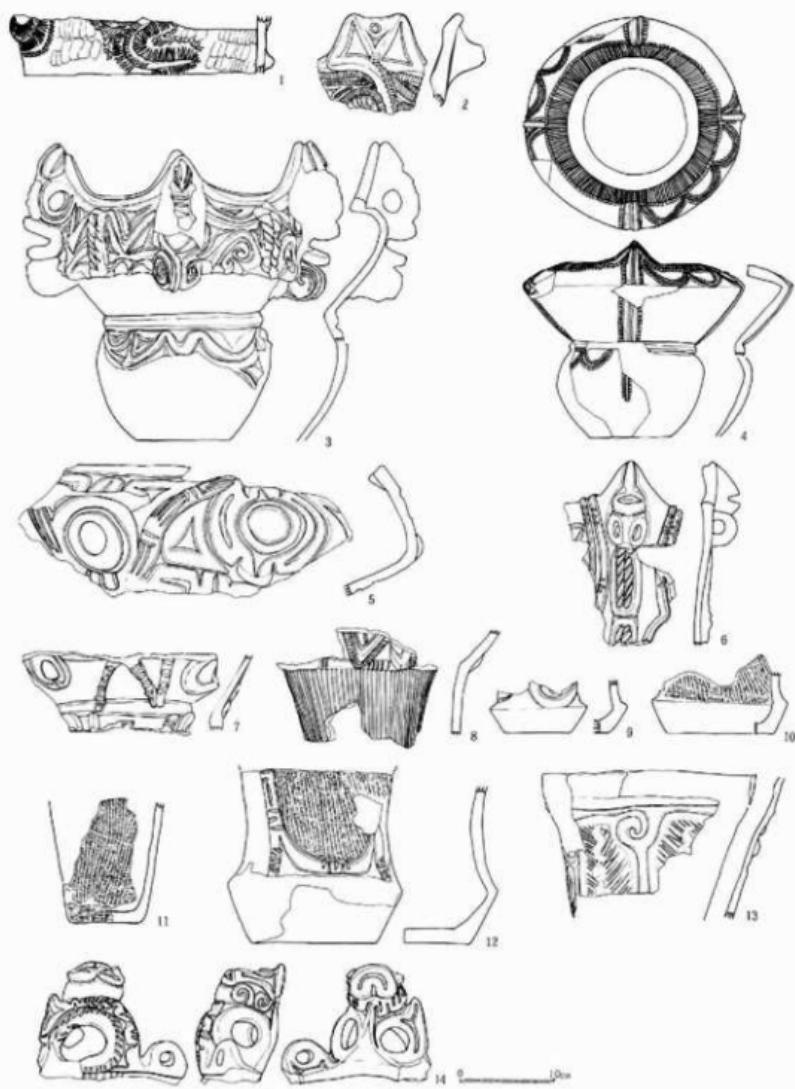
(出土遺物) 第17・18図が出土土器である。

1. 炉体土器。隆帯による抽象文と竹管背面の押引きによるキャタピラ文をもつ深鉢形土器胴部で、外面無文部は指頭痕が残る。内面は2次焼成のため器面にひびが走り、弱い。

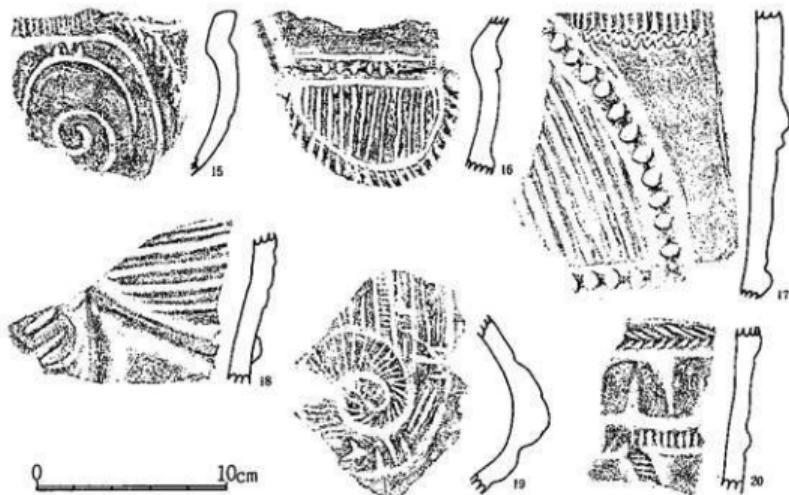


第16図 5号・9号住居址

色調は茶褐色で胎土中に石英粒を含む。2. 深鉢口縁部で隆帯による区画内を竹管背面の押引き文で充填する。把手部は玉抱き三叉文を施す。3. 4 単位の山形突起をもつ深鉢で、突起部側面に蛇体装飾と双孔を有する把手を配する。文様帶は、口縁部と胴下部に集中し、組み



第17図 5号住居址出土土器 (1)



第18図 5号住居址出土土器 (2)

紐状文様や隆帯による弧状文、渦巻文などが特徴である。4. 内屈する口縁と内彎する底部をもつ深鉢。口縁部に2単位の山形小突起を有し、胴部にはベン先状工具による弧状の押し引き文が施される。5. 形状が3・4と類似するが大形である。隆帯による曲線文と沈線による円文、三叉文を施す。6. 山形突起をもつ深鉢で、口縁は直立する。粘土紐による組み紐状文を垂下する。7・8は深鉢胴上部。頸部で屈折し、上部は外反する。9・10・12は屈折底をもつ深鉢破片。9・12は胴部に隆帯によるU字状文をもち、10・12は繩文を施す。14. 深鉢把手部で、猪状の動物が表現される。13. 深鉢上半部。低隆帯が垂下し縦区画を形成する。区画内には蛇行沈線文と綾杉状沈線が施される。以上の土器中1・2は藤内式、13は曾利M式、その他は井戸尻式に対比されるものであるが、住居址の使用時期は炉体土器から藤内式期と判断される。13は、9号住に伴うものであろう。

土器以外では、石鎌6点(第111図3~8)、多孔石1点(第119図4)、磨石1点(第115図13)、土製円盤9点(第107図2~10)、打製石斧5点(第108図3~7)が出土している。

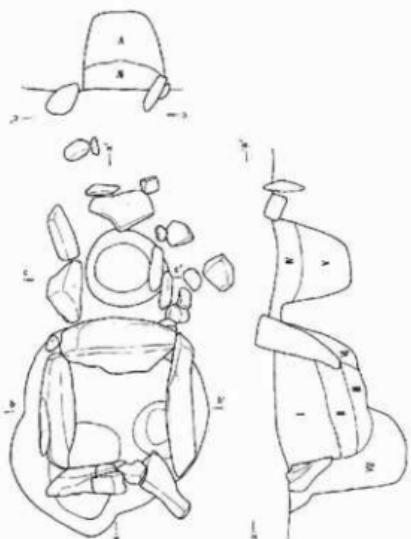
(5) 9号住居址 (第16・19~21図、図版4)

(位置) B-23~24グリッドに位置し、5号住、7号住を切る。

(形状・規模) 南側がわずかに調査区外へのびるが、長軸5m50cm程の梢円形プランを呈すると推定される。

(床面・壁) 床面は平坦でよく踏み堅められている。壁の残存状況は良好で、壁高は20~30cmを測る。西側一部を除いて周溝が巡っている。

(炉) 石囲い炉が住居址中央部東側に竪して存在する。炉石は、長さ60cm、幅30cm、厚さ



第19図 9号住居址炉

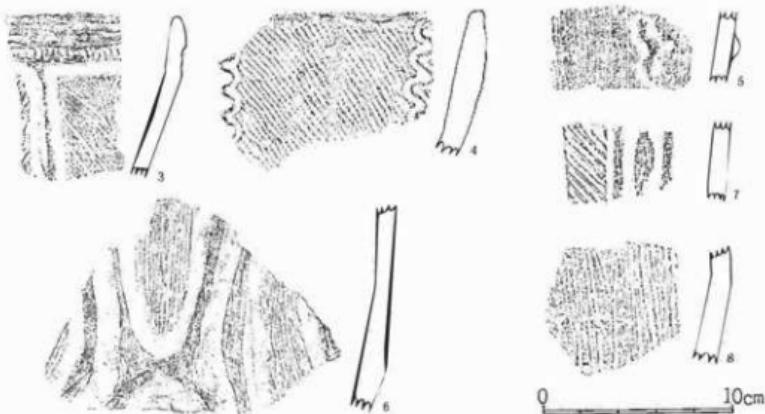
15cm程の礫を四方に配する。石突い炉より奥壁部にかけて人頭大の礫や多孔石をつきたてて石を配し、内部に長径40cm、深さ40cmの円形ピットをもつため一見複式炉状を呈するが焼土層は石突い炉部のみで検出され、奥壁側のピット内では確認されなかった。

(その他の施設) ピットは12個存在するが、その一部は5号住、7号住に伴うものと考えられる。主柱穴は、ピット1・2・4・5・8・11の6本と判断される。大半が長径50cmの円形を呈し深さは60~100cmを測る。

(出土遺物) 第20・21図が本住居址出土土器である。



第20図 9号住居址出土土器(1)



第21図 9号住居址出土土器(2)

1. 床面直上と炉内出土の深鉢洞部片。平行する隆帯が垂下し縦区画をなし、内部にヘラ状工具による綾杉状文を施す。3・6・8は、1と同様低隆帯による区画内を綾杉状沈線や粗い条線で充填する深鉢破片である。4. 蛇行沈線文を垂下し縦文を施す深鉢口縁部。5. 地文に条線をもち、粘土絵による蛇行懸垂文を施す。出土土器は、5を除いてすべて曾利M式に比定される。

土器以外では、凹石2点（第116図21・25）、磨石3点（第116図22～24）、多孔石3点（第119図5～7）、石鐵2点（第111図10・11）、打製石斧1点（第108図13）が出土している。

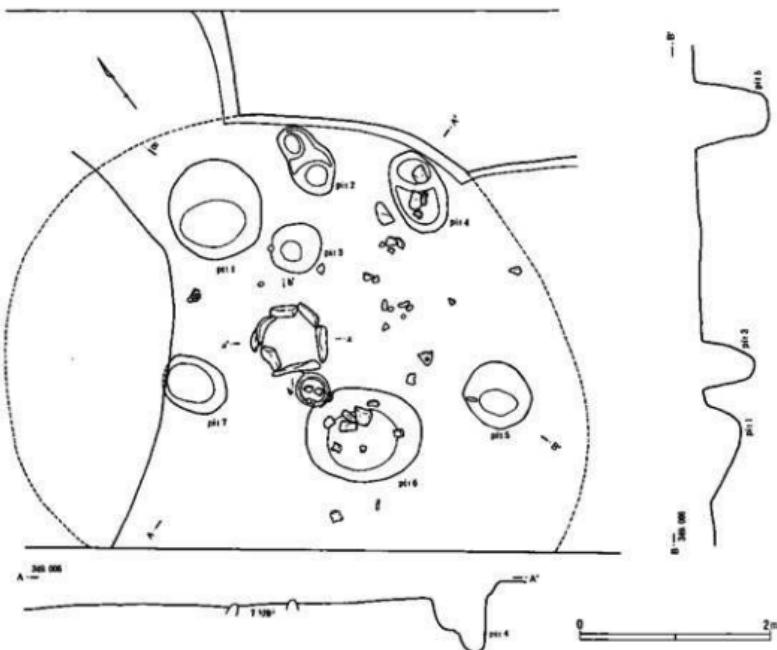
(6) 7号住居址（第22～25図、図版4・10）

（位置） B-22～23グリッドに位置し、5号住、8号住、9号住と重複する。

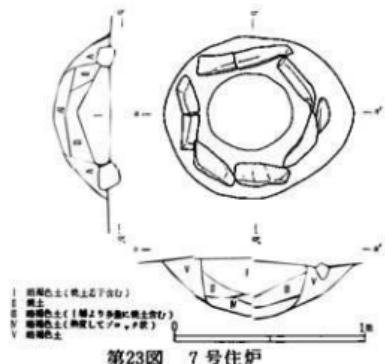
（形状・規模） 他の住居址との重複が激しく、住居址南側が調査区外にのびるため全体の形状・規模は不明である。

（床面・壁） 床は南西方向にやや低くなるが、概ね平坦を保つ。壁は東壁の一部のみ残存し、壁高は10cm程度である。

（炉） 石囲い炉で、長さ30～50cm、厚さ15cm程の棒状の礫を六角形に配する。



第22図 7号住居址

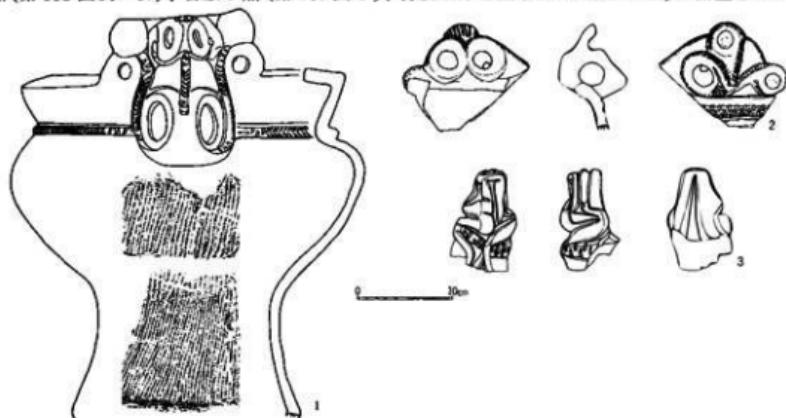


第23図 7号住炉

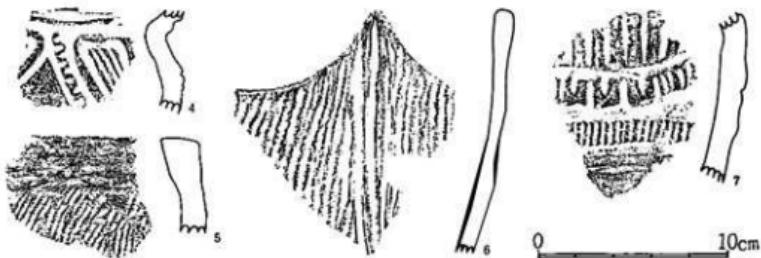
(その他の施設) 本住居址に伴うピットは7個確認されたが、他に9号住内にも存在する可能性がある。柱穴と考えられるピット2~5、7は直径50~70cmで深さ50~80cmを測る。

(出土遺物) 第24・25図が伴出土器である。

1. 炉南側床直上に逆位で出土。口縁部が内屈し、胴上部が内彎する深鉢形土器。口縁に大型の塔状突起を1つもち、その外面は大小の双孔をもつ把手となる。口縁下の屈折部下方は全面的にRL繩文が覆う。2は山形で内面がみみづく状の双孔をもち、内部が中空となる把手である。外面には竹管による刺突文、押引文が施される。3は塔状把手と隆帯とその間に深く刻まれた三叉文が特徴的である。2を除いては井戸尻式に比定されよう。土器以外では、凹石4点(第115図14~17)、石礫1点(第111図9)、打製石斧4点(第108図8~11)が出土している。



第24図 7号住居址出土土器 (1)



第25図 7号住居址出土土器 (2)

(7) 8号住居址 (第26~30図、図版4・11)

(位置) B-21~23グリッドに位置する。北西部が7号住居址と重複する。

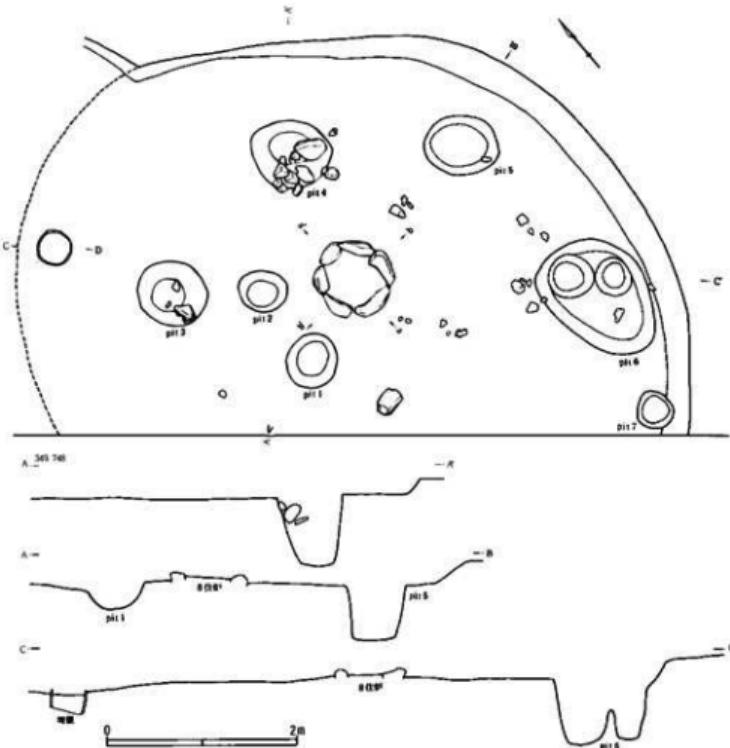
(形状・規模) 南側が調査区外へのびるが、直径約7mの円形プランを呈すると推定される。

(床面・壁) 床面は西側がやや低くなる。壁は重複部分を除いては比較的良好な残存状況を示し、壁高20~30cmを測る。

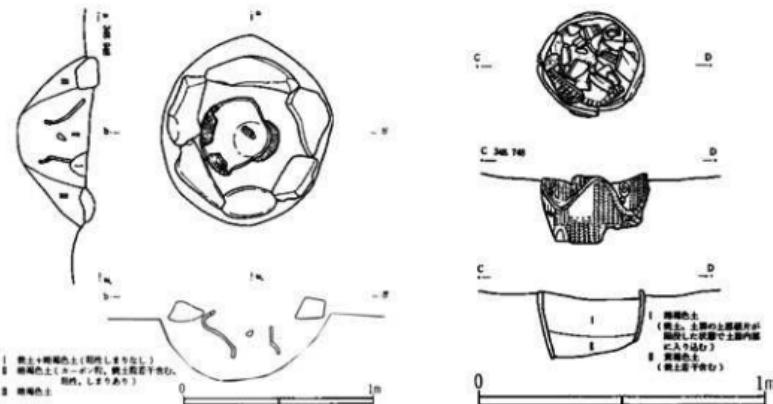
(炉) 石囲い埋甕炉で、長さ30~50cm、厚さ15cm程の棒状礫を六角形に配する。内部に屈折底をもつ深鉢を炉体土器とする。

(その他の施設) 本住居址に伴うピットは7個存在する。柱穴と判断されるものはピット3~6の4本で、直径70cm前後の円形プランを呈し深さ60~70cmを測る。ピット4では柱を固定したと考えられる礫が検出された。ピット6では2つの柱穴が認められ、柱の建て替えが行われたと推定される。

また、住居址北西よりに埋甕が検出された。埋甕は正位で埋設されており、土器内には口縁

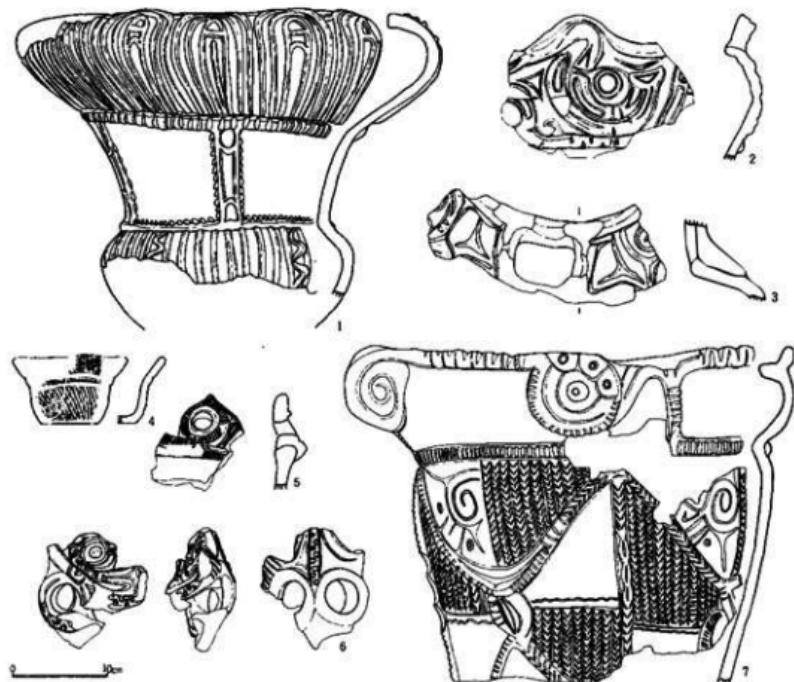


第26図 8号住居址

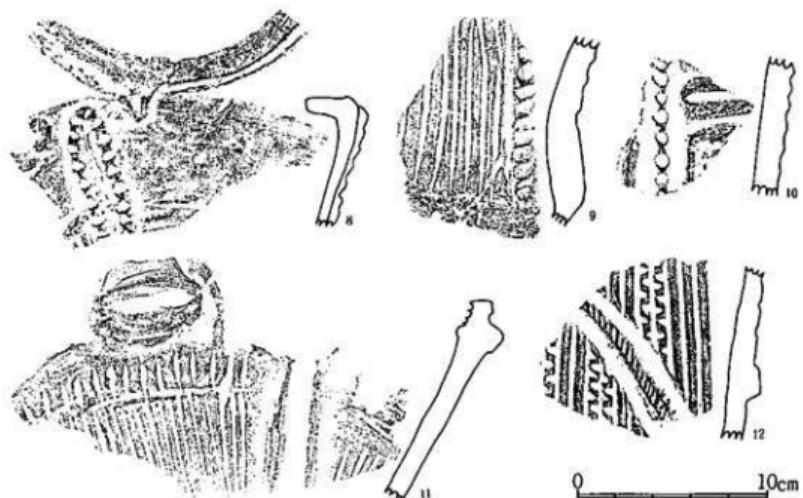


第27図 8号住居址炉

第28図 8号住居址埋甕



第29図 8号住居址出土土器 (1)



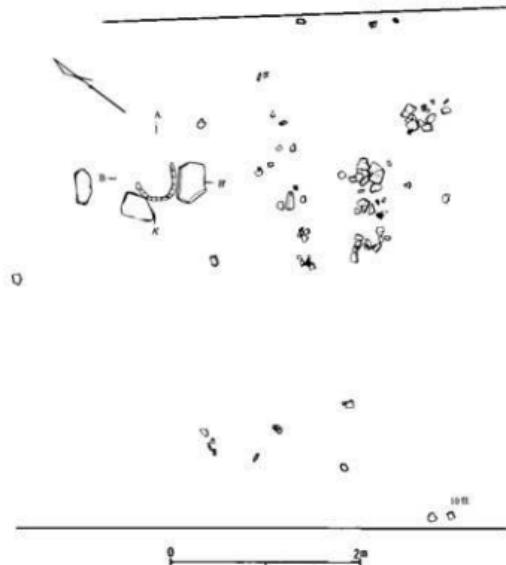
第30図 8号住居址出土土器 (2)

部破片が陥没した状態で入り込んでいた。この埋甕は7号住戸の東側に位置しているため、7号住居址に伴う可能性も否定できない。

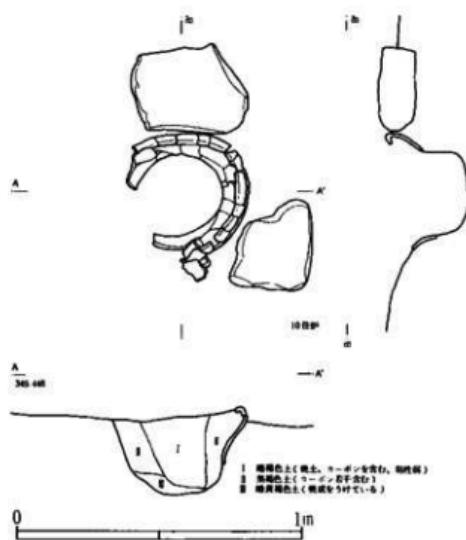
(出土遺物) 第29・30図が本住居址伴出土器である。

1. 炉体土器。内彎口縁と屈曲底部を有する深鉢形土器。口縁部に隆帯による匁字文を重弧状に付加し、胴部中段に平行する隆帯が5単位垂下し胴下部で連結する。さらに胴下部では同様の隆帯が平行あるいは蛇行しながら垂下する。口径約23cm、最大径45cm、現存高30cmを測る。色調は明褐色、胎土中に長石粒、雲母を含む。2・3. 内彎する口縁部をもつ深鉢口縁部。隆帯と沈線による大柄の文様が施され、玉抱き三叉文や三叉文が特徴的である。2は山形の小突起をもち、色調は暗褐色を呈する。3は塔状の把手がつくが、破損している。4. 小型の鉢形土器。口縁部が外反し、頸部に2本の平行沈線、胴部にR L繩文を施す。口径12cm、器高7cmを測る。5・6は深鉢把手破片である。5は貫通孔を1つもち外面はヘラ状工具による刻み目が施される。6は内部が中空となる把手で、内側にみみづく状の双孔、外側に1孔を有する。7. 埋甕。口縁部が内彎し、胴部が舟状にわずかに膨らみをもつ。口縁直下の側面に把手が認められる。胴部には有刻の隆帯によって大きな弧状区画や梢円形区画がなされ、内部を渦巻文、三叉状沈線や綾杉状の刻みをもつ隆帯で充填する。色調は茶褐色で、外面に2次焼成が認められる。11. 深鉢胴上部。低隆帯と平行沈線による文様を有する。これらの土器の内、5は藤内式に、その他は井戸尻式土器に比定される。

土器以外に、土製円盤3点(第107図12~14)、凹石3点(第115~116図18~20)が出土している。



第31図 10号住居址



第32図 10号住居址炉

(8) 10号住居址 (第31～34図)

(位置) B-19～20グリッドに位置し、13号住、15号住と重複する。

(形状・規模) 確認面で既に炉址のみが残存している状況で検出されたため、形状・規模については不明である。

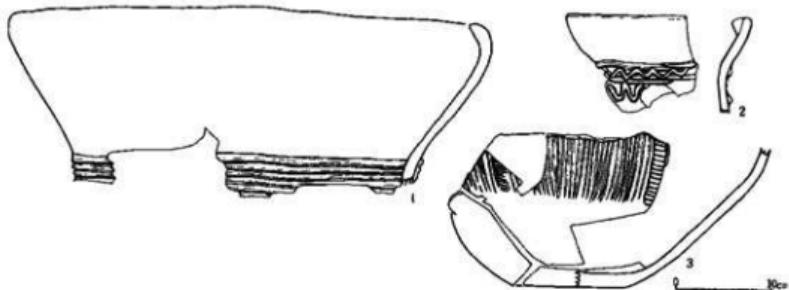
(床面・壁) 13号住覆土中に掘り込まれているが、床面、壁、ピット等の確認は困難であった。

(炉) 石囲い埋甕炉。炉石は南側と西側のものが残存し、長さ40cm、幅30cm、厚さ15cm程の扁平な石を炉石としている。炉体土器は深鉢口縁部のみを使用している。

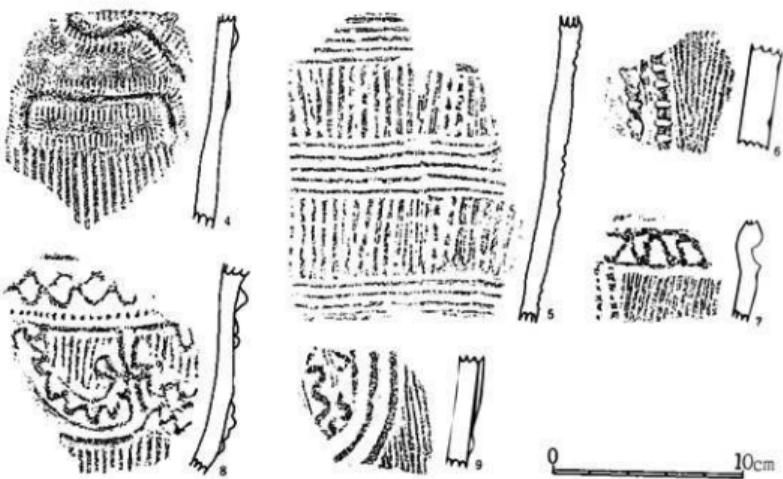
(出土遺物) 炉址のやや上層より、炉体土器とほぼ同時期の土器が出土している。

1. 炉体土器。キャリバー形に内側する口縁をもつ深鉢で、口縁部は無文、頸部は平行する隆帯が5本巡る。口径46cm、現存高20cmを測る。色調は茶褐色、胎土に長石粒を多く含む。
2. やや内屈する深鉢口縁部。口縁部は無文、頸部は粘土紐による平行文と蛇行文が巡る。色調は黒褐色。
3. 胎下半部に半截竹管による条線が施される深鉢底部。色調は茶褐色、胎土中に長石粒を多く含む。
4. 深鉢胴部、上部に隆帯とキャタピラ文、下部に平行沈線文を施す。
5. 深鉢胴部。円筒形を呈し、半截竹管による平行沈線を縦横交互に施す。
- 6～9は同様に隆帯による懸垂文と地文の条線を特徴とする。これらの土器の内、4は藤内式、その他は曾利1式の特徴を有する。

土器以外に土製円盤3点(第107図15～17)、石鐵2点(第111図12



第33回 10号住居址出土土器 (1)



第34図 10号住居址出土土器 (2)

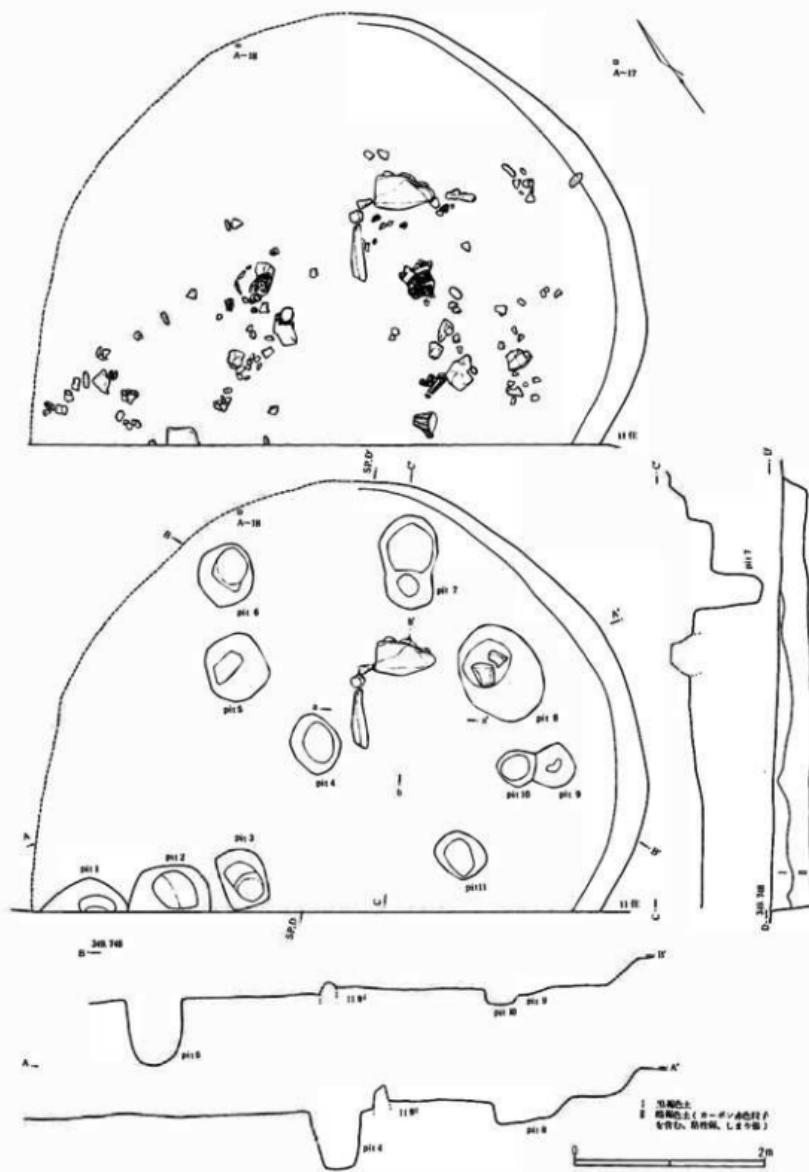
・13)、四石2点(第116図26~27)、磨石1点(第117図28)、多孔石1点(第119図8)が出土している。

(9) 11号住居址 (第35~38図、図版5・11)

(位置) A ~ B - 17 ~ 18グリッドに位置する。西側を3号溝によって切られる。

(形状・規模) 住居址南側が調査区外へのび、西壁が破壊されていることから形状・規模は確定し得ないが、ピットおよび東壁から直径6~50cm程の円形乃至橢円形を呈するものと推定される。

(床面・壁) 床面は西側において10cm程下がる。壁は東壁のみが残存し、壁高30cm程度を測る。



第35図 11号住居址

(炉) 住居址中央部よりやや北側に扁して存在する石囲い炉である。炉石は北・西の2辺のみが残存し、他の2辺は既にぬきとられている。炉石の大きさは長さ約60cm、幅約50cm、厚さ10~20cm程の扁平石を横につき立てる状態で使用し、コーナー部分の間隙を人頭大の礫で充填する。炉構築時の掘り方は1辺100cm程の隅丸方形を呈し、深さ45cmを測る。基底部はほぼ平坦である。

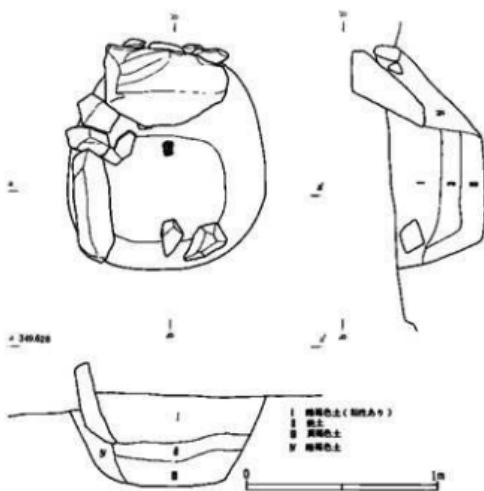
(その他の施設) ピットは11個存在するが柱穴は壁際をめぐるピット1・2・6・7・10

11と判断される。柱穴は直径70~90cm、深さ80cm程の円形ピットである。ピット8はこれよりやや規模が大きいが、掘り込みは浅い。

(出土遺物) 出土状態は第35図上部の図面によるが、大半は床面よりやや浮いた位置で出土している。出土土器は、第37・38図である。

1. 深鉢形土器。胴部がやや膨らみ、頸部で屈折して口縁部が外反する。口縁部に貫通孔をもつ山形突起を4単位、その間に小突起を4単位付加する。文様帶は口縁部および胴部に施される。口縁部文様は隆帯による横円区画を巡らし、内部を太い沈線で埋める。突起端部には沈線による渦巻文が施文される。胴部には低隆帯によるわらび手状文様と地文に条線を有する。口径27cm、底径8cm、器高36cmを測る。色調は暗褐色、胎土中に細かい長石粒を多く含む。2.

深鉢形土器。胴部が樽状にやや膨らむ。胴上部を隆帯による渦巻文、平行沈線などで施し、胴下部はR L繩文をこころがす。胴部最大径26cm、底径15cm、現存高33cmを測る。3. 深鉢形土器。口縁部に山形小突起をもち、底部から口縁部へ直線的に外反する。胴部にはクシ状工具によって条線が縱方向に施される。口径約24cm、現存高20cmを測る。器面は粗く、胎土中に長石粒を含む。色調は茶褐色。4. 深鉢形土器。頸部がゆるやかにくびれる。器外面に蛇行沈線文が垂下し、地文にクシ状工具による条線を斜走する。口径16cm、現存高12.5cmを測る。色調は淡褐色。胎土中に石英、長石粒を含む。5. 深鉢形土器。形状は3と類似するが平縁である。口縁部より沈線を垂下させ、地文に粗い条線を斜走する。口径18cm、底径7cm、器高19cmを測る。色調は淡褐色。6. 深鉢胴上部。外反口縁を有し、頸部下が内縛する。口縁部は無文で、胴上部に粘土紐貼付による渦巻文、ジグザグ文が施文される。地文には半截竹管による沈線が縱走する。口径13cm、現存高13cmを測る。色調は茶褐色を呈し、外面に煤状炭化物が付着する。

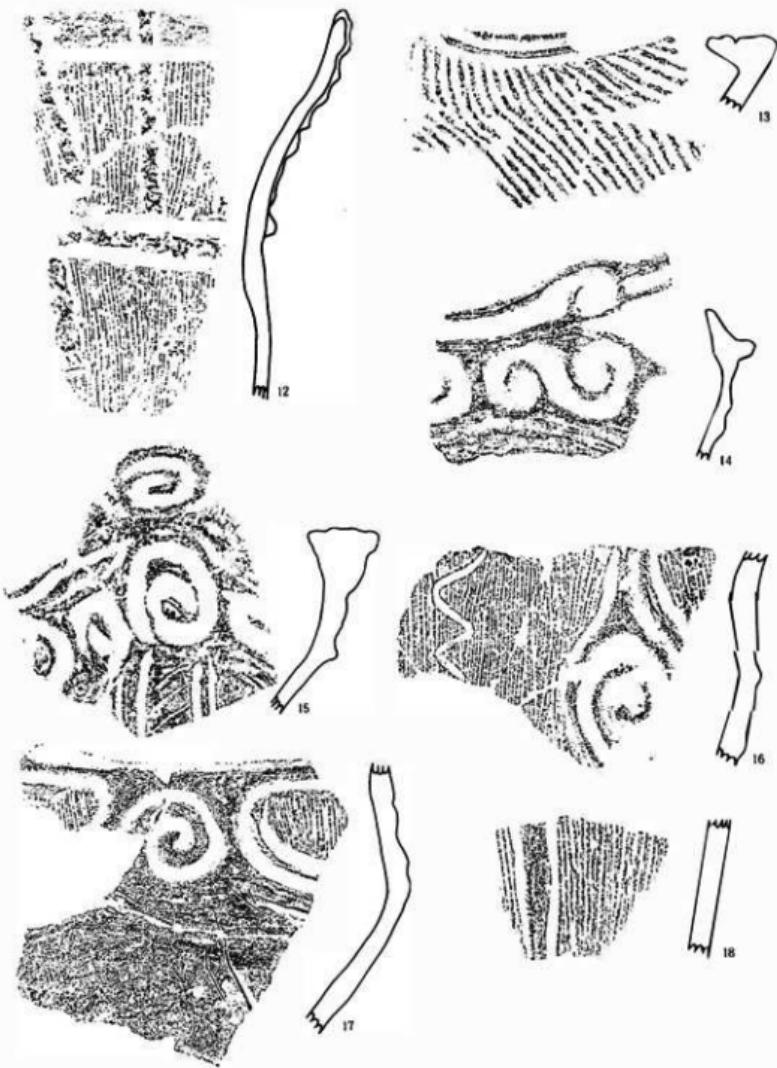


第36図 11号住居址炉

7. 深鉢形土器。頸部がゆるやかにくびれる。胴部を低隆帯によるわらび手状の区画をし、内部を半截竹管によって条線を施す。口径約26cm、現存高23cmを測る。色調は暗褐色で、胎土中に細かい雲母、長石粒を含むが精選されている。8. 深鉢形土器。口縁部に三角形小突起を有する。低隆帯によって口縁部に横円文、渦巻文を施し、胴部へも隆帯を垂下する。外面はヘラケズリ痕を残す。色調は茶褐色で、胎土中に金雲母を含む。9. 頸部が屈折する深鉢形土器。頸部に粘土紐貼付による格子目文を施す。色調は茶褐色。胴部最大径22cm、現存高20cm



第37図 11号住居址出土土器 (1)

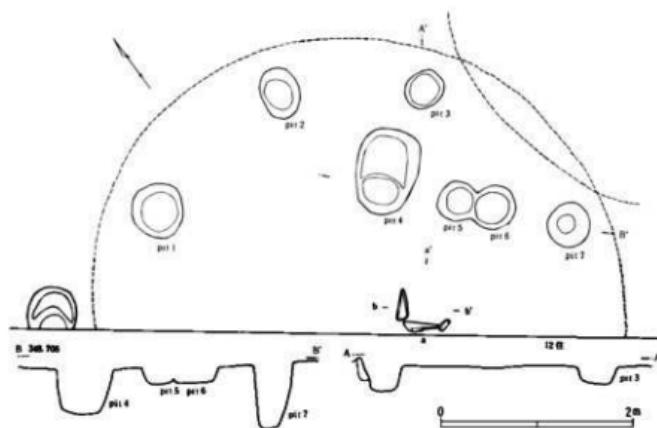


第38圖 11號住居址出土土器 (2)

を測る。10. 浅鉢形土器。口縁部に2条の沈線が巡るが、胸部は粗くヘラケズリ痕を残す。口径30cm、底径7cm、器高13cmである。色調は暗褐色。11. 深鉢胸上部破片。隆帯による渦巻文を特徴とする。12. 深鉢形土器。形状は7に類似する。くびれ部に指頭痕をもつ隆帯を横走し、その上下に同様の隆帯を縱走する。地文はクシ状工具による条線が施される。色調は淡褐色。13. 半截竹管による斜行沈線をもつ深鉢口縁部。14~18は、太い沈線と低隆帯による渦巻文、S字文などを特徴とする。14~16、18が深鉢、17が浅鉢破片である。これらの土器は曾利Ⅲ~Ⅳ式の特徴を示す。

土器以外では、土製円盤7点(第107図18~24)、石鎌1点(第111図14)、打製石斧3点(第108図14~16)、石錘1点(第112図)、凹石・磨石4点(第117図29~32)が出土している。

(10) 12号住居址 (第39~41図、図版5)



第39図 12号住居址

(位置) B-24~26グリッドに位置する。

(形状・規模) すでに壁が削平されており詳細は不明である。

(床面・壁) 床面の残存状況は悪いが、ほぼ平坦である。

(炉) 石突い炉。炉石は西・南部の2辺のみが残存し、長さ30~40cmほどの扁平な石を使用している。炉の掘り込みは長軸70cm、短軸55cm程の楕円形で、深さは25cmを測る。

(その他の施設) 本住居址に伴うと考えられるピットは7個存在する。柱穴はピット1~3・7が推定され、直



第40図 12号住炉



第41図 12号住居址出土土器

径50~60cm、深さ70cm程である。ピット4は70×60cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。

(出土遺物) 第41図が出土土器である。

1. 深鉢口縁部破片。口縁下に楕円状の区画をもち、平行沈線で充填する。2・3は、隆帶による区画内を沈線で充填する深鉢胴部破片である。4. 内彎する口縁をもつ深鉢破片。外面にR L縄文を施す。1~3は藤内式土器、4は井戸尻式土器に比定されよう。

土器以外では、磨石1点(第118図35)、打製石斧2点(第108図19・20)が出土している。

(11) 13号住居址 (第42~45図、図版5・12)

(位置) B-19~20グリッドに位置し、10号住、15号住、16号住、3号溝と重複する。

(形状・規模) 南半分が調査区外へのびるが、直径8m程の円形のプランを呈すると考えられる。

(床面・壁) 床面は東側が若干低くなるが、ほぼ平坦である。壁は東側一部を欠くが、壁高は10cm程である。

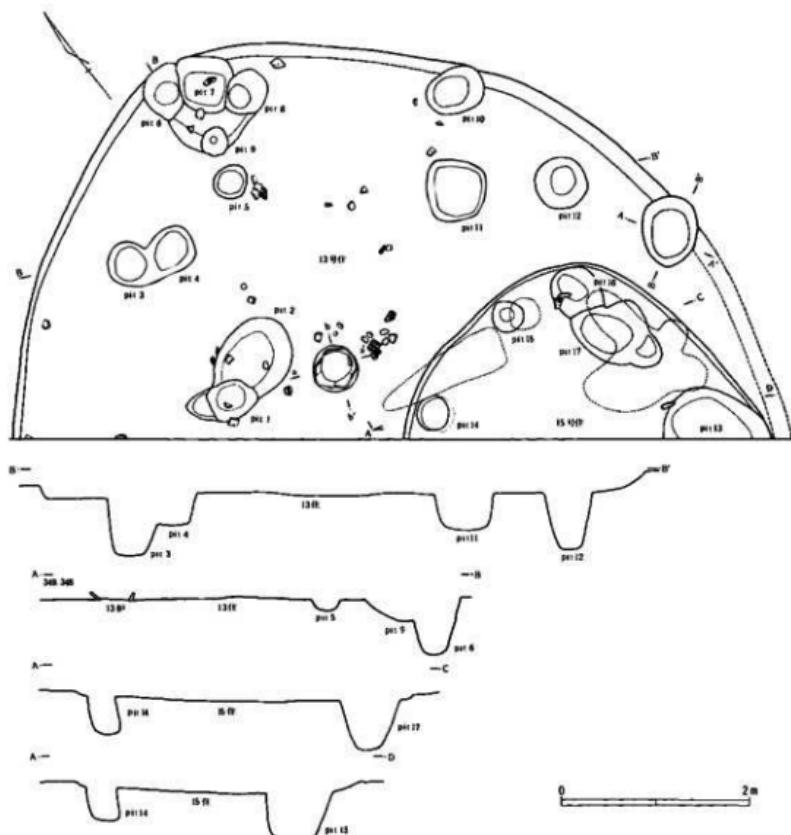
(炉) 埋甕炉。炉の掘り込みは直径50cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。

(その他の施設) 本住居址に伴うピットは13本存在する。柱穴は直径50cm程の円形の掘り込みで深さ50cmを測る。柱穴の重複例も存在し、2~3回の建て替えも考えられよう。

(出土遺物) 第44・45図が本住居址出土の土器である。

1. 炉体土器。深鉢形土器胴上部。隆帶による三角形区画、平行四辺形の区画を施し、隆帶に沿って連続爪形文を施文する。更にその内部には沈線によるジグザグ文や玉抱き三叉文が付加される。色調は暗褐色で、胎土中に金雲母を含む。2. 深鉢口縁部。内彎する口縁で、頸部に有刻の低隆帶を巡らす。色調は暗褐色。3. 深鉢胴部。指頭圧痕を有する隆帶を2条垂下する。地文にR L縄文をこころがす。色調は明褐色を呈す。4. 深鉢胴部。地文に条線を施し、隆帶によるわらび手状文様を付加する。色調は暗褐色。5. やや内彎する深鉢胴部。平行沈線、蛇行沈線が垂下し地文に縞文を施す。6. 頸部に向ってゆるやかにくびれる深鉢口縁部。沈線による楕円形縦区画文を施し、内外をR L縄文で埋める。色調は黒褐色。胎土に細かい長石粒を含む。7. 深鉢胴部。低隆帶によって縦方向の区画言し、内部を蛇行沈線と綾杉状沈線で充填する。色調は淡褐色。これらの土器の内、1は新道式、2. 井戸尻、3~7は曾利式に比定されるが、住居址の使用時期は新道式期に限定できよう。

土器以外では磨製石斧1点(第110図1)、石匙1点(第113図1)が出土している。

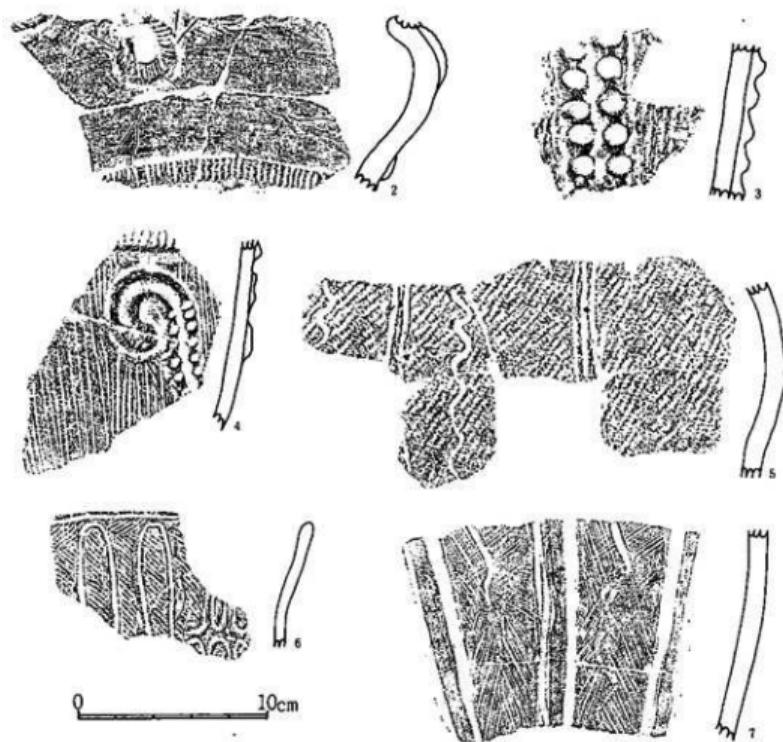


第42図 13号・15号住居址



第43図 13号住炉

第44図 13号住炉体土器



第45図 13号住居址出土土器

(12) 15号住居址 (第42・46図、図版5)

(位置) B-18~19グリッドに位置し、13号住居址と重複する。

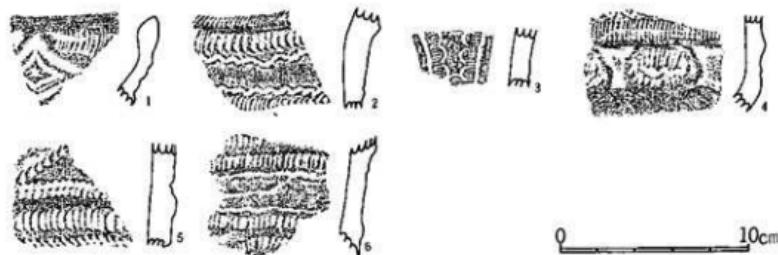
(形状・規模) 南半分が調査区外にのびるが、直径4m程の円形乃至椭円形プランを呈すると推定される。

(床面・壁) 床面はほぼ平坦で、堅緻である。壁高は13号住床面より5cm程低い。

(炉) 炉の施設は調査区外へのびると考えられるが確認されなかった。

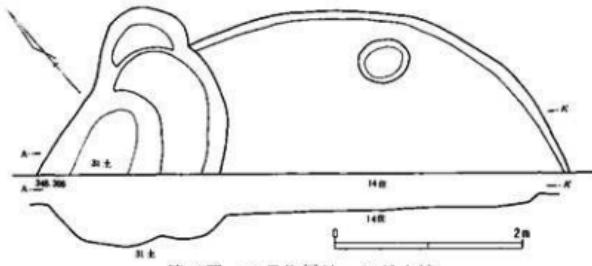
(その他の施設) ピットは5本確認されピット14~16は直径30~40cmの円形、ピット13・17は長軸1m程の椭円形を呈し、深さ約50cmを測る。床面上には焼土が堆積し、火災住居の可能性がある。

(出土遺物) 1. 深鉢口縁部。隆帶による弧状区画と菱形区画文が見られ、その内部に連続爪形文が施される。2・3・5・6は隆帶による区画と竹管背面の連続押引文を特徴とする深鉢破片である。1・2・5・6が新道式、3・4が藤内式に比定されよう。



第46図 15号住居址出土土器

(13) 14号住居址 (第47・48図)



第47図 14号住居址・31号土塁

(位置) B-29～
30グリッドに位置し、
西側が31号土塁によ
って切られる。

(形状・規模) 大
半が調査区外にあるた
め詳細は不明である。

(床面・壁) 床面
は西側にやや下がるが

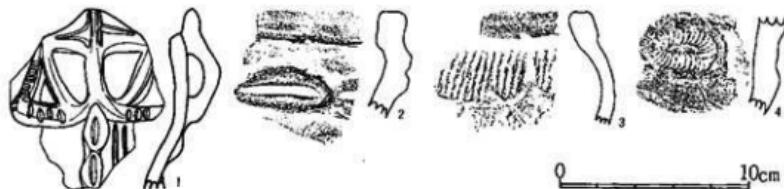
ほぼ平坦である。壁高は確認面より10cm程を測る。

(炉) 検出されなかった。

(その他の施設) 確認されたピットは1つで直径50cmの円形を呈し、深さ10cmを測る。

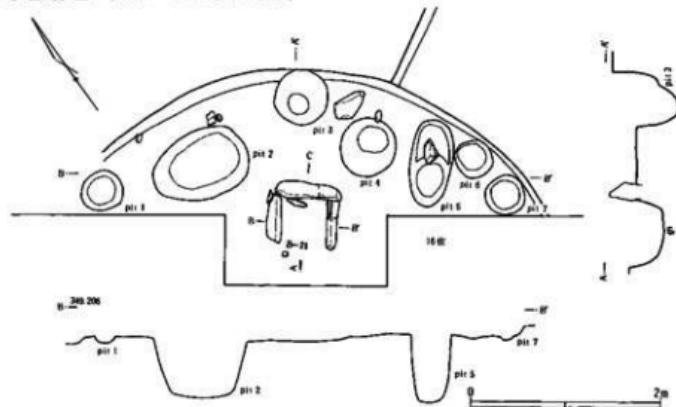
(出土遺物) 第48図が覆土中出土土器である。

1. 深鉢口縁部。口縁部に低い山形突起を有し、その外面に橋状把手をもち、胸部には連鎖状隆帯が垂下する。色調は暗褐色。
 2. 口縁下に連鎖状隆帯が巡る浅鉢口縁部。
 3. 地文に繩文を施し、菱形に無文部を残す深鉢口縁部。
 4. 隆帯による楕円区画内を連続爪形文で埋める。
- 4は藤内式、1～3は井戸尻式に対比されよう。



第48図 14号住居址出土土器

(14) 16号住居址 (第49~51図、図版5)



第49図 16号住居址

(位置) B-20~21グリッドに位置し、13号住居址と重複する。

(形状・規模) ほとんどが調査区外にあるため詳細は不明である。

(床面・壁) 床面は西側にむけてやや下がるがほぼ平坦である。壁高は20cmを測る。

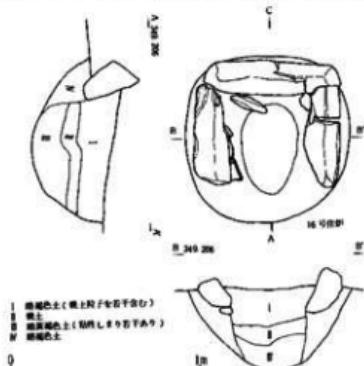
(炉) 北壁から130cm程南側に位置する石囲い炉である。南側を除く3辺の炉石が残存し、コの字状を呈する。炉石は長さ50~70のやや扁平な炉を横につきたてて使用している。炉の掘り込みは、直径約90cmの円形を呈し深さ45cmを測る。覆土中層に焼土の堆積が認められる。

(その他の施設) 7本のピットが壁際を巡る。ピット2はやや大形で100×70cmの椭円形ピットである。他は直径40~50cmほどの円形を呈し、深さ60~70cmを測る。

(出土遺物) 第51図が本住居址出土土器である。

頸部がゆるやかにくびれ、口縁部が外反する深鉢形土器胴上部。口縁下に1条の沈線がめぐ

り、胴部縦区画内を綾杉状沈線と蛇行沈線文が垂下する。色調は暗褐色で、胎土中に長石、石英を含む。曾利M式に比定されよう。



第50図 16号住居址炉



第51図 16号住出土土器

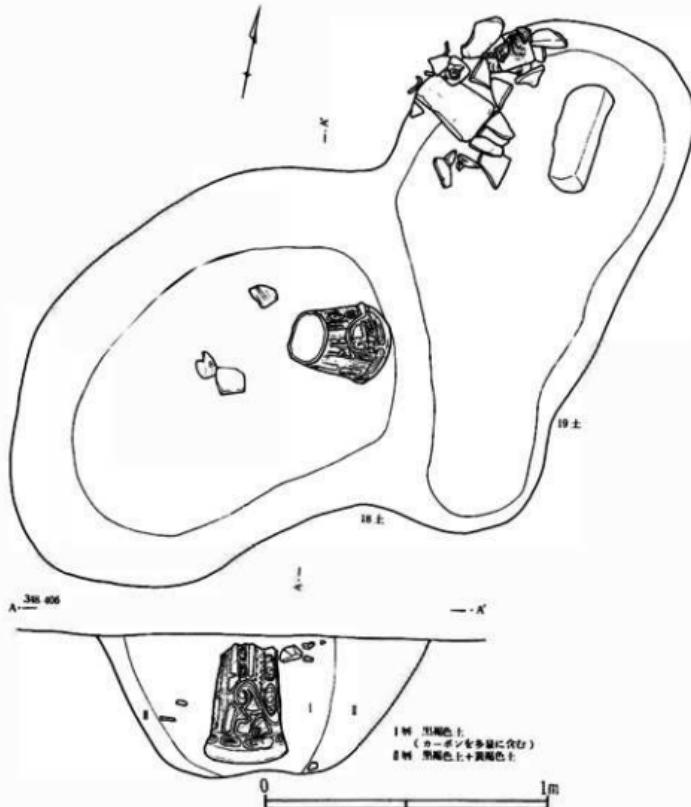
2 土塙と出土遺物

(1) 18号土塙 (第52・72図、図版7・12)

(位置) B-27グリッドに位置し、19号土塙を切る。

(形状・規模) 長軸 160 cm × 短軸 130 cm 程の梢円形プランを呈し、壁高は 50 cm を測る。土塙東側から深鉢完形土器が逆位で出土している。底はほぼ平坦であるが、わずかに中央が高くする個所もある。

(出土遺物) 第72図 3 が出土土器である。口縁部が内脣し、胴部が円筒形の深鉢形土器である。口縁部に 1ヶ所貫通孔をもつ山形把手を有する。口縁部無文帯で頸部には梢円形区画文、胴部には隆帯によるわらび手状文や梢円形区画文が縱方向に施される。区画内部には竹管背面



第52図 18号・19号土塙

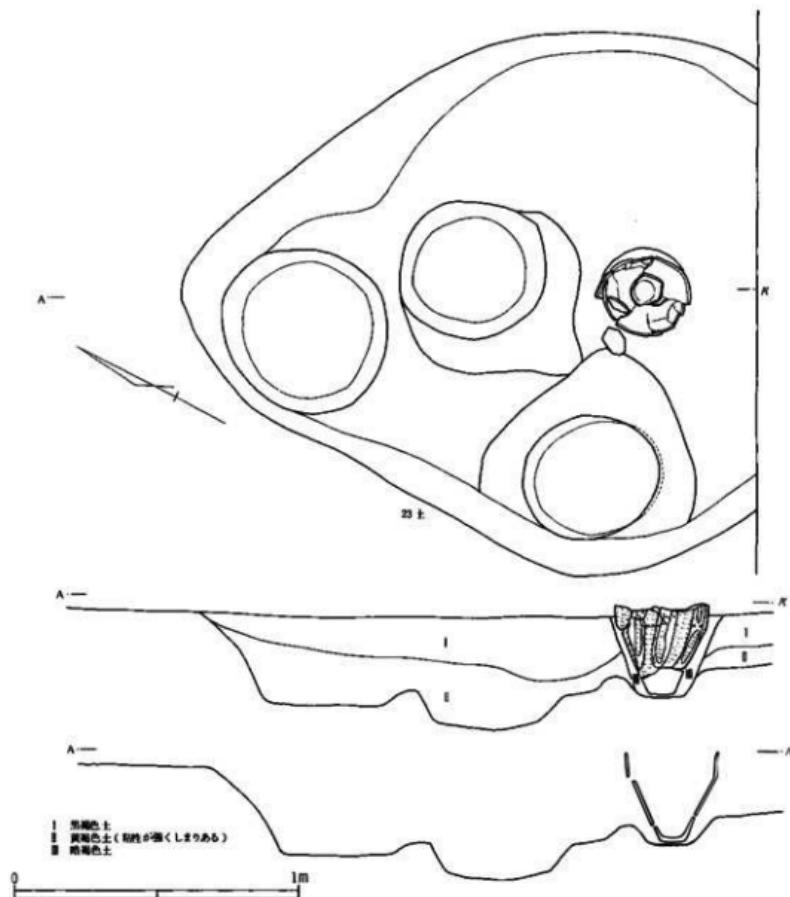
による連続爪形文や刺突文、沈線による三叉文や渦巻文が充填される。器高は55cm、口径29cm、底径17cmを測る。色調は暗褐色で、胎土中に雲母、長石粒を含む。

(2) 19号土塙 (第52・72図、図版12)

(位置) B-27グリッドに位置し、18号土塙と重複する。

(形状・規模) 長軸180cm、短軸100cm程の長円形を呈する。壁高は18号土塙より低く、30cm程である。北側覆土上層から土器と30~40cmの礫が検出された。

(出土遺物) 第72図4・5が出土土器である。4は円筒形の深鉢形土器で口縁部から3段



第53図 23号土塙

の文様帶をもつ。上・中胴部は隆帶による区画文が形成され、内部に沈線による渦巻文、三叉文を施す。胴下部では隆帶とキャタピラ文による所謂抽象文が施文される。器高は56cm、口径37cm、底径19cmを測る。5は内縁口縁を有する深鉢形土器で口縁部に山形の小突起を有し、その外面に橋状の把手を附加する。隆帶によって三角形や弧状の区画をし、内部に連続押引き文や三叉状沈線を施す。色調は茶褐色。胎土に石英、長石粒を含む。

(3) 23号土塙 (第53・72図、図版12)

(位置) B-47グリッドに位置する。

(形状・規模) 南側が調査区外にあるため全体の形状は不明であるが、短軸180cm程の西洋ナシ形を呈する。内部に3ヶ所の浅いピットを有し、土塙中央部やや南側に正位の埋甕が埋設されていた。セクションからこの埋甕は23号土塙埋没後に設置されたと判断される。

(出土遺物) 23号土塙に伴う出土土器は存在しないが、下限を知る手掛りとなる埋甕について記述する。埋設土器は第72図7で、頸部がゆるやかにくびれ、口縁部に向かって大きく外反する。沈線による縱長の楕円形区画内を「ハ」の字状沈線で充填している。口縁部分を欠くが、現存高42cm、底径11cmを測る。その特徴から曾利V式に対比されるが、本土塙はこれより古い時期に掘り込まれたものと判断される。

(4) 35号土塙 (第54・55・73図、図版7・13・19)

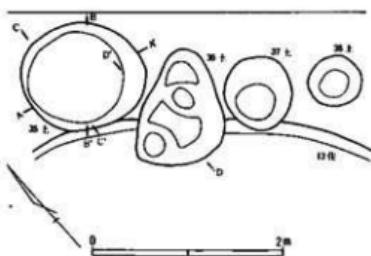
(位置) A-B-20グリッドに位置し、13号住居北壁と接する。

(形状・規模) 直径120cm程のはば円形を呈し、壁は70cm程の直壁である。底部直上から2個体の完形土器が横に倒れた状態で出土している。

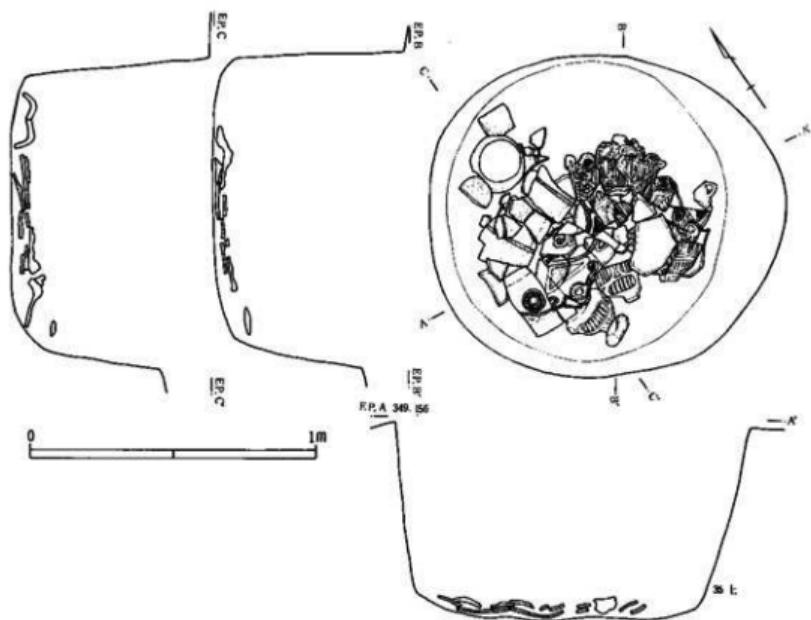
(出土遺物) 本土塙から出土した土器は第73図8・9で図示した土器と覆土中層から出土した小型磨製石斧(第110図2)と打製石斧1点(第109図22)がある。

第73図8は土塙東側から出土した深鉢形土器で、口縁部に4単位のみみづく状把手、耳状把手をもち把手間にも小突起を有する。口縁部に隆帶による三角形区画文、胴部に4段にわたって楕円形区画文がめぐり、区画内を平行沈線文で埋めている。器高50cm、口径44cm、底径15cmを測る。色調暗褐色、胎土中に長石粒を含む。9は円筒形の深鉢形土器で、口縁部に貫通孔を有する山形突起をもつ。胴部には連続爪形文を刻んだ隆帶をY字状に配し、胴下半を繩文で施文する。器高51cm、口径30cm、底径15cmを測り、色調は茶褐色を呈する。

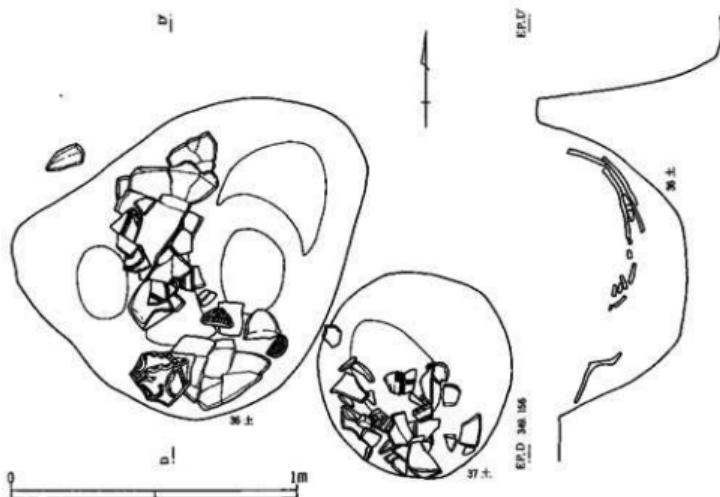
これらの土器は、繩文時代中期中葉の藤内式に対比される。



第54図 35号～38号土塙



第55図 35号土塙



第56図 36号・37号土塙

(5) 36号土塙 (第54・56図、図版8・13)

(位置) 35号土塙の東側に位置し、13号住居址の北壁を切る。

(形状・規模) 長軸130cm、短軸110cm程の不整形を呈し、北側及び西側にテラスを有する。底部はほぼ平坦で壁高50cmを測る。

(出土遺物) 第73図10・11、第75図25が本土塙出土土器である。

10はやや内凹する深鉢口縁部で、口縁に山形突起を有する。文様は連鎖状隆帯による対弧状文が特徴的である。色調は暗褐色、胎土は長石、石英粒を含む。11は樽状にやや膨らんだ胴部をもつ深鉢形土器で、口縁部を欠損する。胴部には「へ」の字文を刻んだ隆帯によって円形や三角形区画がなされ、内部を渦巻文、平行沈線文などで埋めている。現存高約50cm、胴部最大径40cm、底径20cmを測り、色調は茶褐色を呈する。いずれも、縄文時代中期中葉の井戸尻式に比定されよう。

(6) 37号土塙 (第54・56・73図、図版8・13)

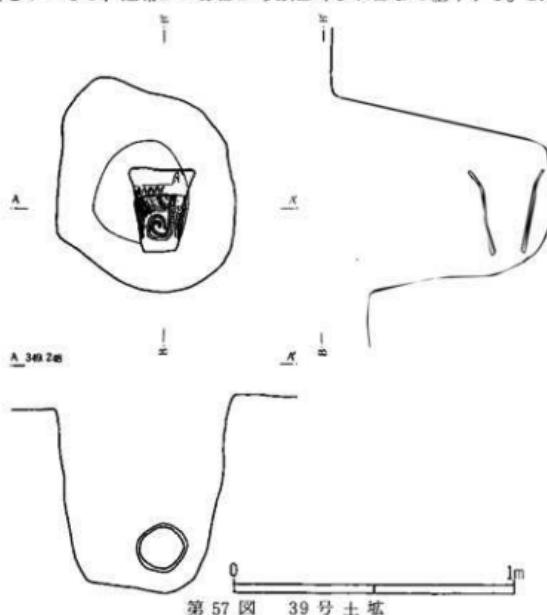
(位置) 36号土塙の東側に位置する。

(形状・規模) 直径70cm前後の円形プランを呈する。壁高は約50cmを測る。

(出土遺物) 第73図12に示した土器が覆土中より出土している。

12は、内凹する口縁とやや膨らみをもつ胴部をもつ深鉢形土器である。口縁部に半円形の突起を5つもち、隆帯が口縁部から頸部くびれ部まで垂下する。胴上部には連鎖状隆帯が巡り、

胴部には有刻の隆帯による文様が施文される。現存高42cm、口径33cmを測る。色調は茶褐色、胎土中に長石を含む。



第57図 39号土塙

(7) 39号土塙 (第57・74図、図版8・13)

(位置) B-18・19グリッドの境界に位置し、13号住居址壁を切って存在する。

(形状・規模) 口径70cm前後の不整円形をする。深さは80cmで壁はほぼ垂直に立ち上る。底部は平坦で、その直上より完形土器が

横倒しの状態で出土している。

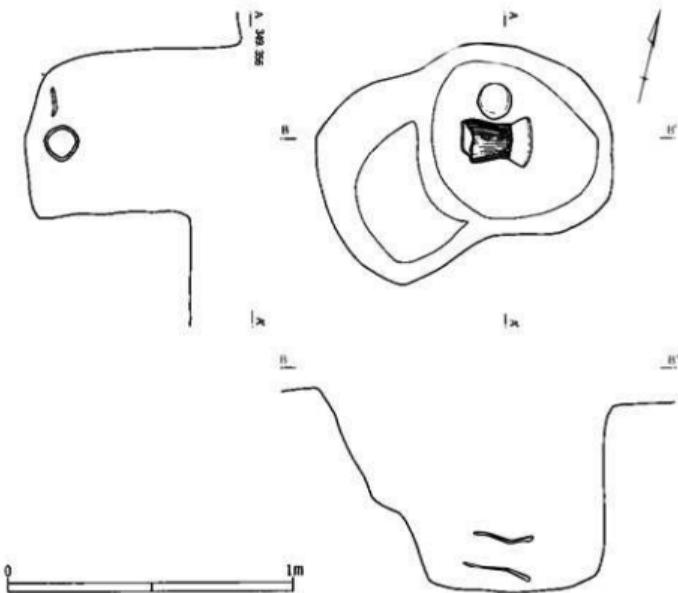
(出土遺物) 第74図13が本土塙出土土器である。やや外反した口縁を有する深鉢形土器で、口縁部は隆帯によるわずかな装飾を除いて無文である。頸部は粘土紐貼付による平行隆帯の間に蛇行する隆帯を施す。胴部にはわらび手状懸垂文を3単位で附加し、地文にヘラ状工具による条線をもつ。器高は32cm、口径25cm、底径10cmを測る。色調は淡褐色で器面が風化し、内面胴下部に煤状炭化物が付着する。胎土中に長石、石英粒を多く含む。この土器は、曾利I式に比定されよう。

(8) 40号土塙 (第58・74図、図版8・13)

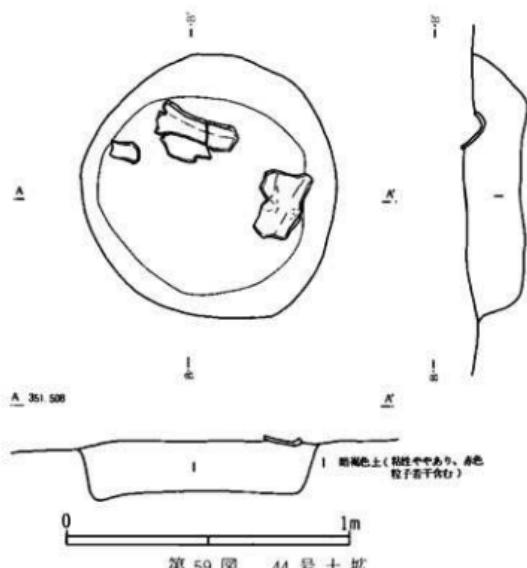
(位置) B-18グリッドに位置し、3号溝に上部を切られる。

(形状・規模) 長軸100cm、短軸60cmの梢円形を呈する。底部はほぼ平坦で、西側に1段テラスを有する。壁は西側をのぞいて直壁で、壁高70cmを測る。底部直上より土器が横倒しの状態で出土している。

(出土遺物) 第74図14が本土塙出土土器である。口縁部が内屈し、頸部がくびれ、胴部が樽状に膨らむ深鉢形土器である。口縁部は無文帶で頸部には平行する隆帯と蛇行隆帯が巡る。胴部には粘土紐貼付による懸垂文が4単位で施され、地文に半截竹管による条線が縱走する。外面の文様には煤状炭化物を付着するが、色調は暗褐色である。



第58図 40号土塙

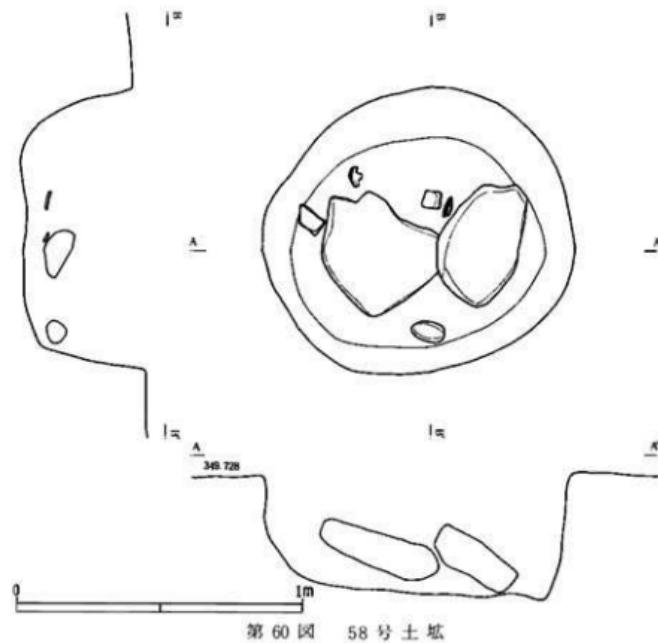


(9) 44号土坑 (第59図)

(位置) B-13グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径90cmの円形プランで壁高は20cmと浅い。底部はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。覆土上層より土器口縁部が出土している。

(出土土器) 第74図15が出土土器である。内側する口縁部をもち、粘土紐貼付による重弧文、円文、連鎖状文などの文様を施す。井戸尻式に比定されよう。



(10) 58号土塙 (第60・76図)

(位置) B-16グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径110cm程のほぼ円形を呈する。壁は直壁で、深さ40cmを測る。

(出土遺物) 第76図30、31が出土土器である。30は隆帶による区画文を施し、内部を平行沈線文で充填する。31は抽象文を特徴とする深鉢破片である。共に藤内式に比定されよう。

(11) 82号土塙 (第61図)

(位置) B-9グリッドに位置し、83号土塙の西に存在する。

(形状・遺物) 直径30cm程の円形を呈し壁高は10cmを測る。底部はは間平坦である。覆土上層より深鉢口縁部が出土している。

(出土遺物) 内屈する口縁をもつ深鉢口縁部で、双孔を有する橋状把手をもつ。出土土器は井戸尻式に比定されよう。

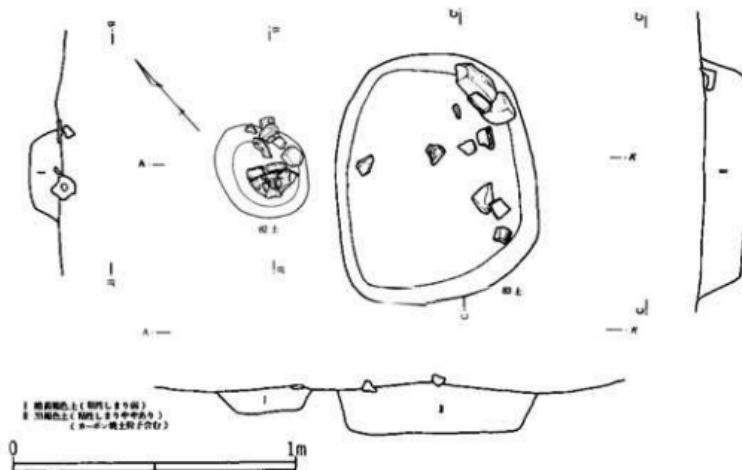
(12) 83号土塙 (第61・76図)

(位置) B-9グリッドに位置する。

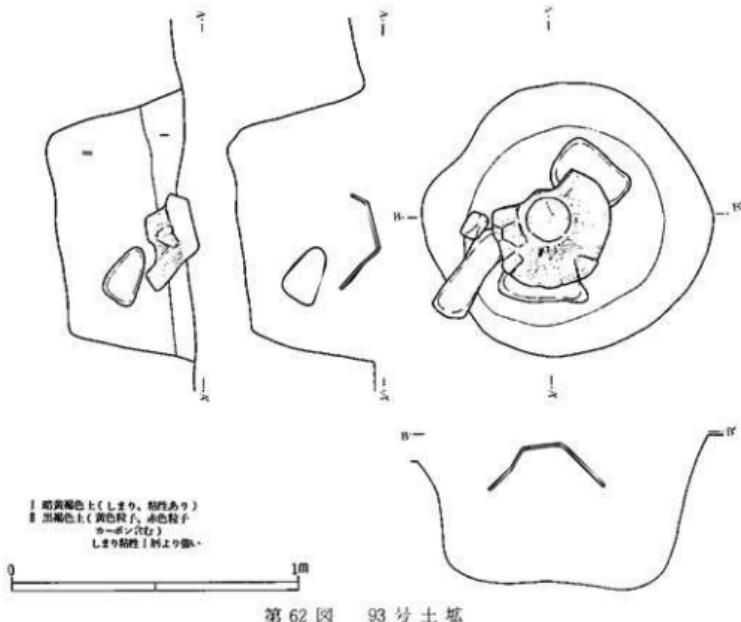
(形状・規模) 長軸90cm、短軸70cmほどの楕円形を呈し、壁高は20cmを測る。底部はほぼ平坦で、覆土中より土器片および礫が出土している。

(出土遺物) 第76図34が出土している。低隆帶による渦巻文、連鎖状文などが施される。他に口縁部に刻み目を巡らす深鉢口縁も出土しているが、井戸尻式に比定される。

土器以外では、打製石斧1点(第109図23)が出土している。



第61図 82号・83号土塙



第62図 93号土塙

(13) 93号土塙 (第62・74図)

(位置) B-7グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径100cm程の円形プランを呈し、壁高50cmを測る。覆土土肩より深鉢底部が逆位の状態で出土している。また、土器下部から自然礫が3つ出土している。

(出土遺物) 第74図16が本土塙の出土土器である。大形の深鉢形土器底部で、胴下半に条線が施される。現存高17cm、底径14.5cmを測る。色調は茶褐色で、胎土中に長石粒を多量に含む。器面は、著しく風化している。

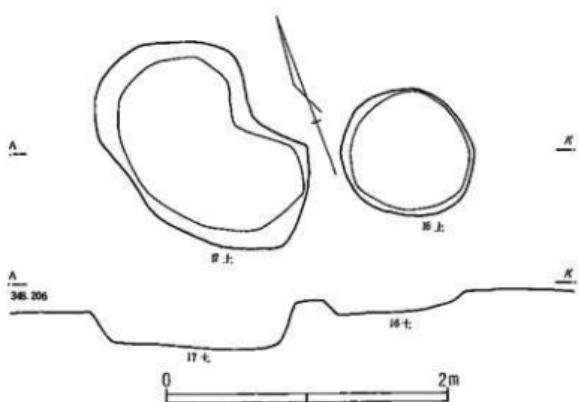
(14) その他の土塙

表1. B区土塙一覧

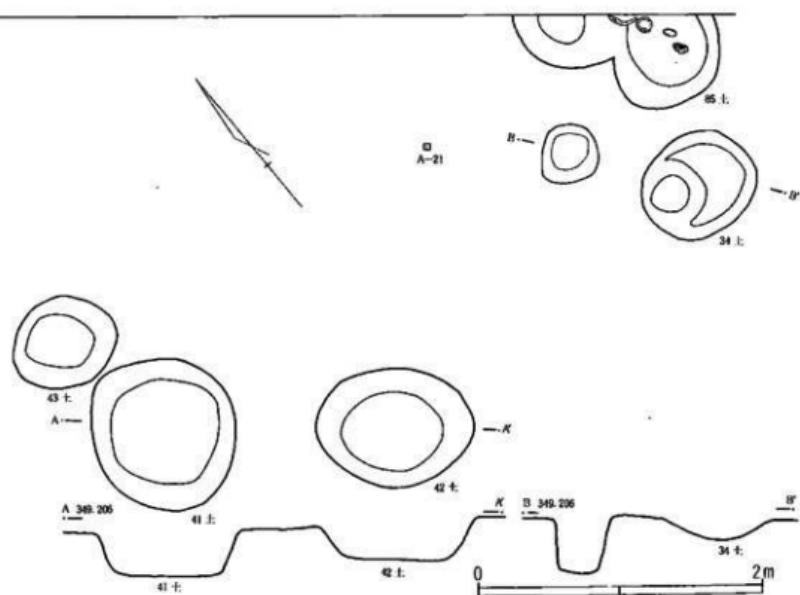
番号	形態		規模(cm)			塙底	位置 (グリッド)	備考
	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
13	椭円形	皿状	150	110	30	平坦	A～B-27	21土、24土と重複
14	(椭円形)	皿状	100	(?)	30	平坦	A-2～3	
15	椭円形	皿状	230	170	15	平坦	B-1	

番号	形態		規模(cm)			底	位置 (グリッド)	備考
	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
16	円形	皿状	100	100	10	平坦	B-30	
17	不整椭円形	皿状	170	100	30	平坦	B-31	
20	隅丸方形	皿状	190	170	25	平坦 小穴1	B-15	
21	椭円形	皿状	120	70	30	平坦	A-21	井戸尻式
22	椭円形	不定形	170	(130)	40	テラス有	B-6	2号溝と重複 井戸尻式
24	(円形)	皿状	150	(?)	30	平坦	A-26	13土と重複
30	不明	不明						曾利Ⅰ式
31	不整形	不定形	(?)	180	40	2段のテラス	B-30	14住と重複 井戸尻式
32	(椭円形)	皿状	(?)	90	30	平坦	B-31	33土と重複
33	椭円形	皿状	100	80	40	平坦	B-31	4住と重複 新造式
34	椭円形	丸底	80	70	15	平坦 小穴1	B-20	
38	円形	円筒形	50	50	35	平坦	A-19	曾利Ⅱ式
41	円形	皿状	100	100	30	平坦	B-21	藤内式
42	椭円形	皿状	110	80	30	平坦	B-21	
43	円形	皿状	70	70	(?)	平坦	B-21	
45	円形	丸底	125	125	45	平坦	B-15	
46	不整椭円形	円筒形	100	80	40	平坦 小穴2	B-14	
47	(円形)	丸底	160	(?)	20	平坦 小山穴1	A-14	
48	椭円形	皿状	120	100	15	平坦 小穴1	B-14	
49	不整椭円形	皿状	120	90	15	平坦 テラス有	B-14	
50	円形	皿状	120	120	15	平坦 小穴1	B-14	藤内式
51	椭円形	鍋底状	140	100	15	やや凹凸有 小穴2	B-13	
52	椭円形	円筒形	60	40	50	平坦	B-13	
53	椭円形	鍋底状	180	115	30	平坦	B-14	
54	不整形	皿状	100	70	12	平坦	B-13	
55	不整円形	皿状	90	80		平坦	B-13	
56	(椭円形)	皿状	(?)	60	15	平坦	B-13	
57	円形	皿状	90	90	15	平坦		
59	円形	不定形	65	65	15	やや凹凸有	B-12	
60	不整形	不定形	100	80	25	やや凹凸有	B-12	
61	隅丸台形	丸底	65	60	50	ほぼ平坦	B-12	

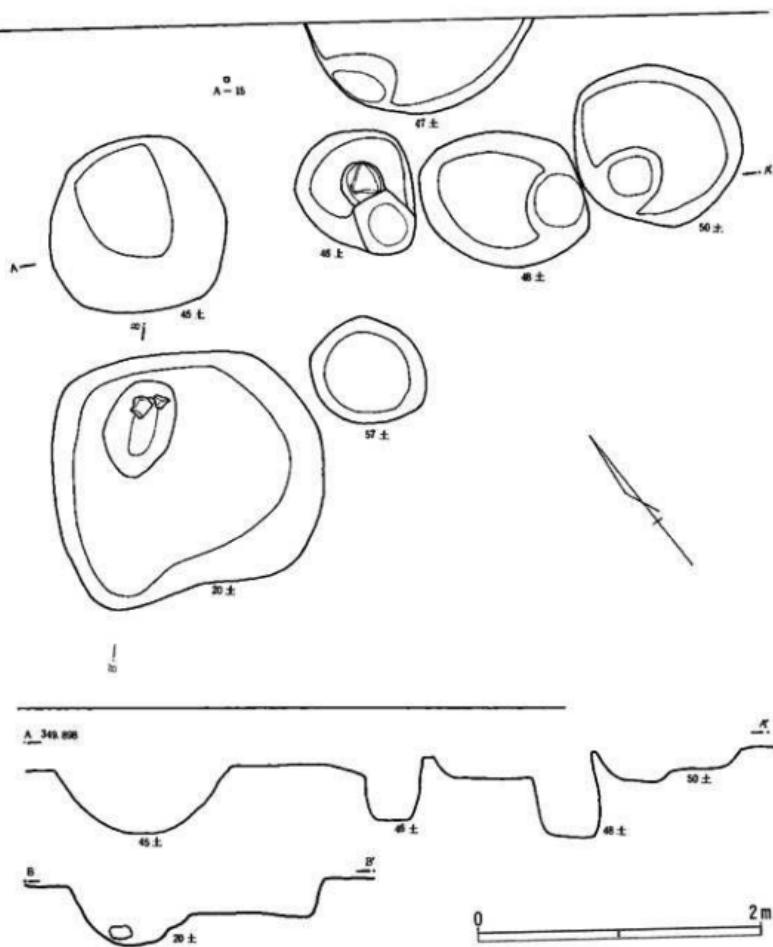
番号	形態		規模(cm)			底	位置 (グリッド)	備考
	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
62	円形	皿状	60	60	20	平坦	B-12	
63	椭円形	皿状	45	35	10	平坦	B-12	
64	円形	皿状	40	40	10	平坦	B-12	
65	隅丸五角形	皿状	60	55	20	平坦	B-11	
66	隅丸方形	皿状	60	55	60	平坦	B-11	
67	円形	丸底	65	65	20	ほぼ平坦	B-10	
68	椭円形	円筒形	80	60	50	平坦	B-27	2号竖穴と重複
69	椭円形	皿状	120	90	25	平坦		
70	椭円形	鍋底状	140	90	30	平坦	B-26	
71	円形	鍋底状	75	75	45	平坦	A-26	
72	(円形)	鍋底状	70	(?)	30	平坦	A-26	井戸尻式
73	瓢形	円筒形	80	45	40	テラス有	B-25	
74	円形	円筒形	45	45	35	平坦	B-25	
75	円形	円筒形	45	45	25	平坦	B-25	
76	円形	円筒形	45	45	20	平坦	A-25	
77	椭円形	鍋底状	90	80	40	平坦	B-8	
78	椭円形	すり鉢状	110	80	25	凹凸有	B-8	
79	椭円形	皿状	100	80	25	平坦	B-8	
80	椭円形	皿状	170	100	40	平坦	B-8	井戸尻式
81	不整形	皿状	100	70	40	平坦	B-8	
84	(椭円形)	皿状	(?)	90	40	平坦	A-31	新道式
85	(椭円形)		(?)	70				曾利Ⅲ式
87	椭円形	円筒形	60	55	30	平坦	B-26	
94	椭円形	鍋底状	110	90	40	ほぼ平坦	B-16	
95	椭円形	皿状	130	80	35	平坦 小穴1	B-15	



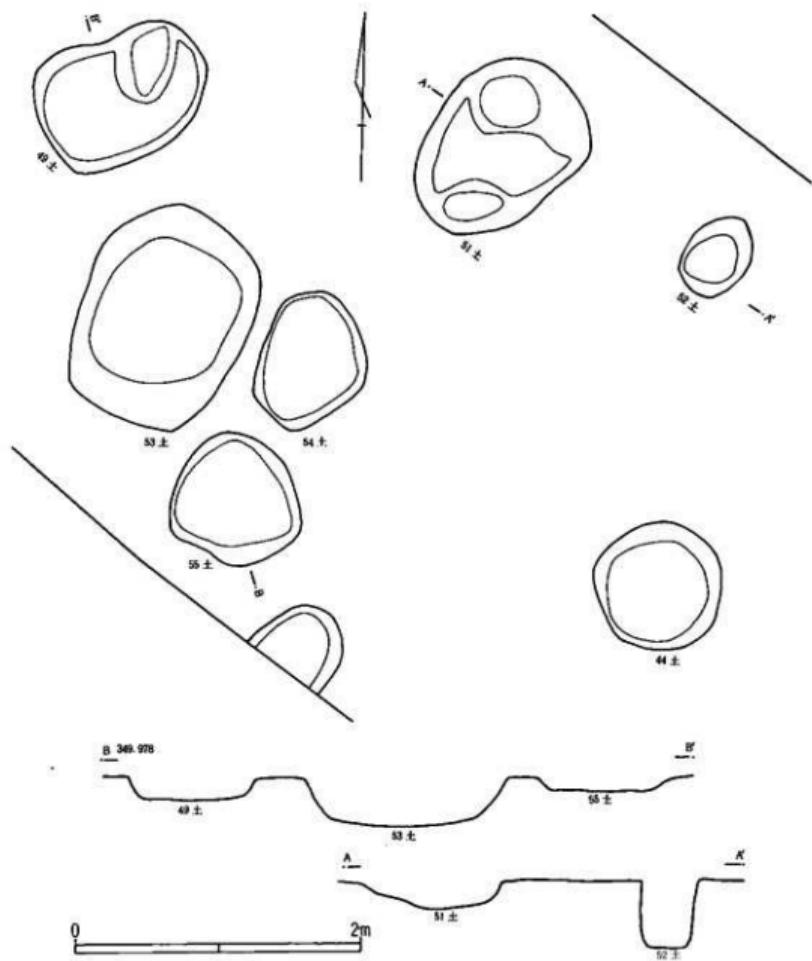
第63図 16号・17号土塙



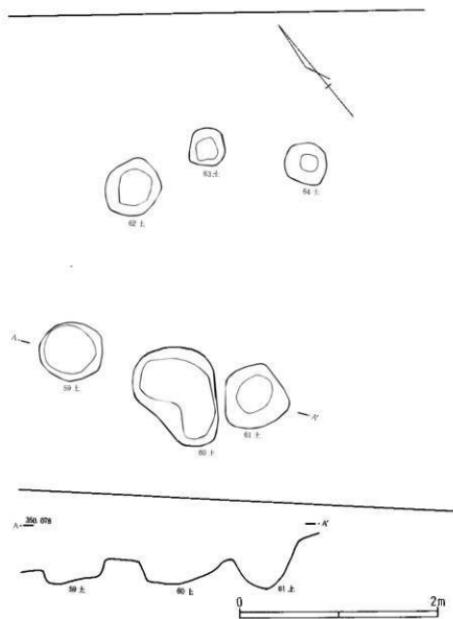
第64図 34号・41号～43号・85号土塙



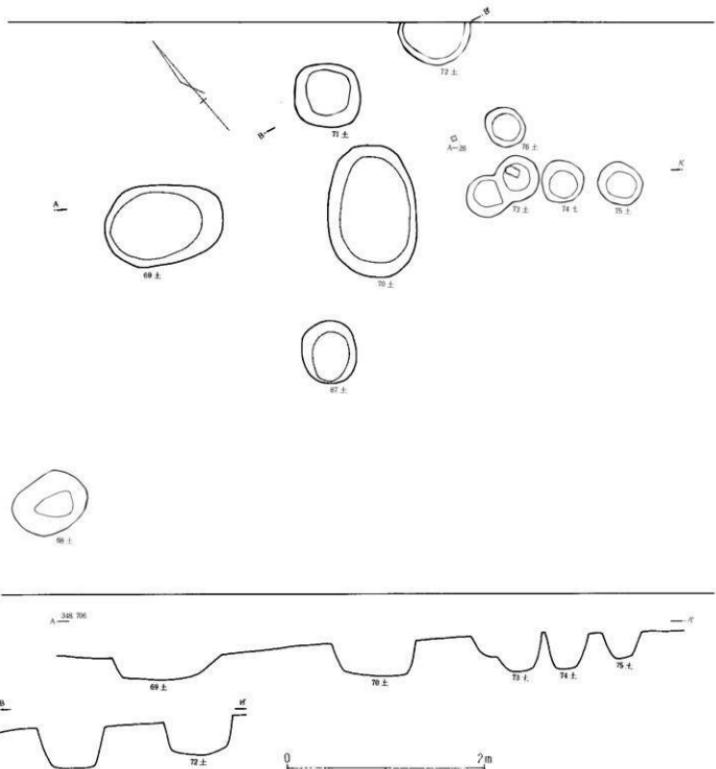
第65図 20号・45～48号・50号・57号土塚



第66図 44号・49号・51号～56号土壌



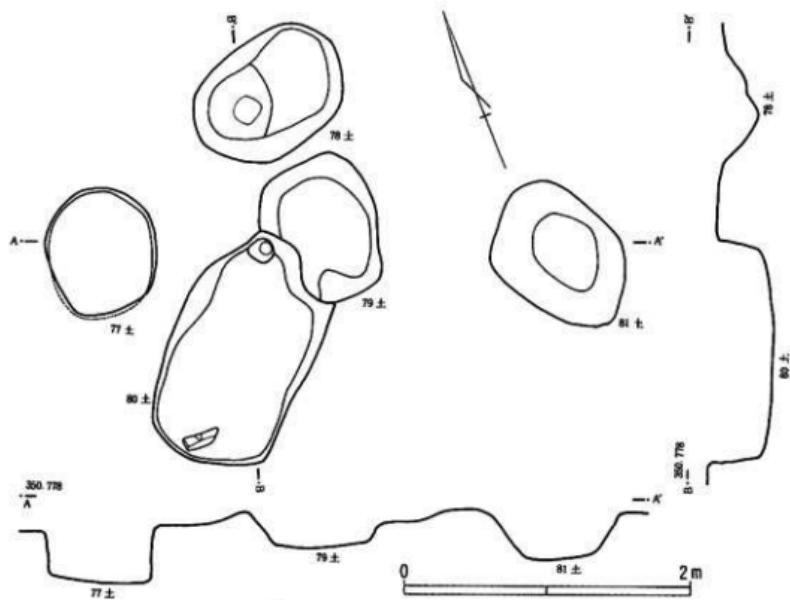
第67図 59号～64号土埴



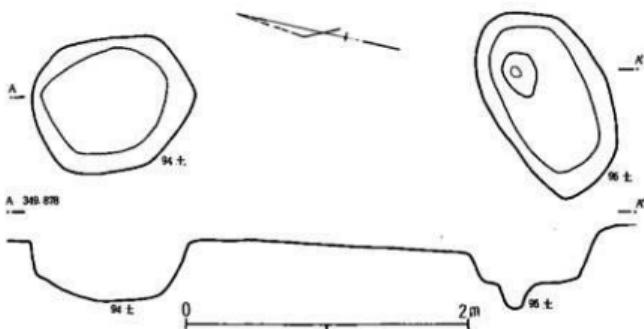
第68図 68号～76号・87号土埴



第69図 1号集石、65号～67号土塁



第70図 77号～81号土塁



第71図 94号・95号土塚

土塚内出土土器（第72～76図）

1～5、7～16、30、31については既に記述してあるので、その他の土器について概要を記す。

6. 30号土塚出土。側面に橋状把手が4単位付けられる朝顔状の深鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部には低隆帯と沈線によって区画されその内部をタシ状工具によって刺突文を施している。現存高44cm、口径43cmを測り、色調は暗褐色を呈する。縄文時代中期末葉の曾利V式に比定されよう。

17. 85号土塚出土。低隆帯による大柄渦巻文と地文の条線を特徴とする深鉢胴部である。現存高24cm、底径8cmを測る。曾利Ⅲ式に比定される。

18. 21号土塚出土。深鉢胴上部。口縁部は内屈し、胴部には縄文が施される。井戸尻式に比定される。

19. 22号土塚出土。深鉢口縁部で、口縁が「く」の字状に内折する。沈線文、鋸歯状文を特徴とし、井戸尻式に比定される。

20. 30号土塚出土。やや口縁部が内摺する深鉢形土器。口縁下に1条の沈線が巡り、胴部に沈線による弧状文と懸垂文が施される。曾利V式に比定される。

21. 30号土塚出土。やや内摺する深鉢口縁部。隆帯による渦巻文とその間の縄文を特徴とし、曾利V式に比定される。

22. 31号土塚出土。平行沈線と菱形状の無文部を特徴とする深鉢胴部である。

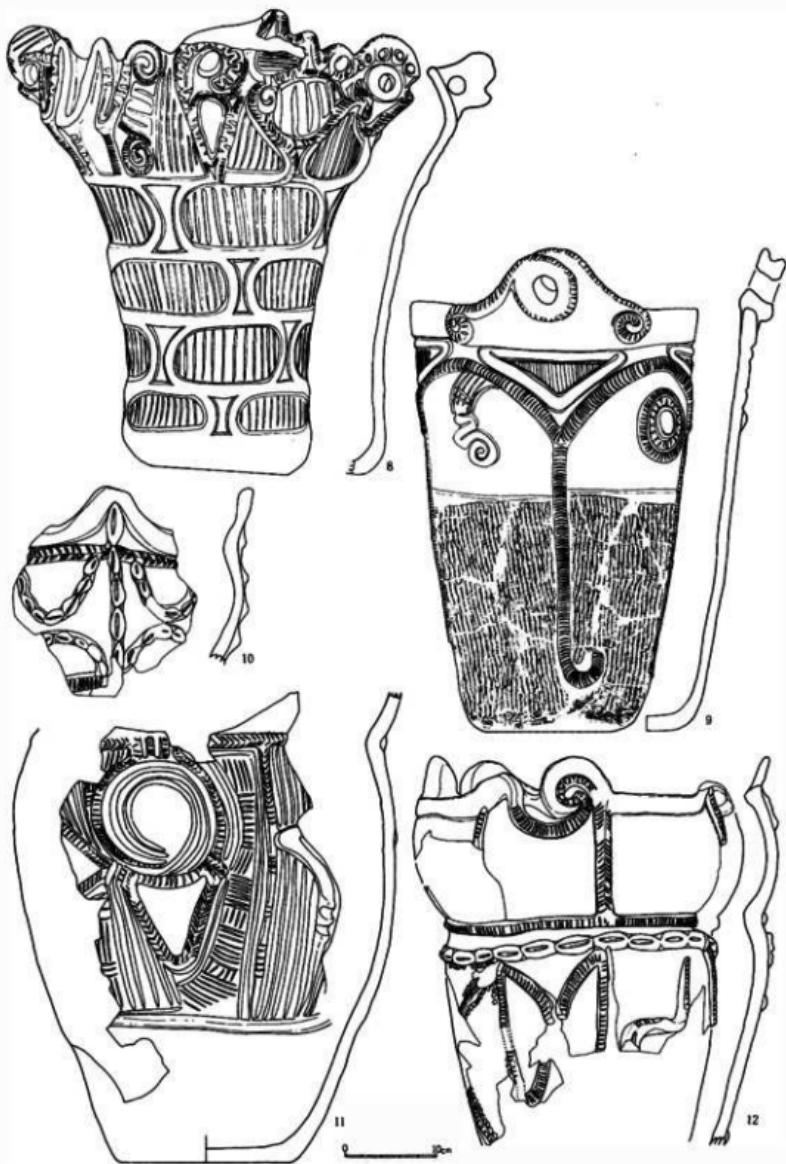
23. 34号土塚出土。深鉢胴部破片。地文に縄文を施し「ハ」の字状の刻みをもつ隆帯が認められる。

24. 33号土塚出土。横位の椭円形区画が数設施され、下部は抽象文風の文様が施される深鉢形土器胴部である。区画文内には蛇行沈線と連続爪形文が充填される。中期前葉猪沢式に比定される。

25. 36号土塚出土。深鉢口縁部。隆帯により動物顔面様の文様が施され、胴部には三叉状沈



第72圖 土坡出土土器 (1)



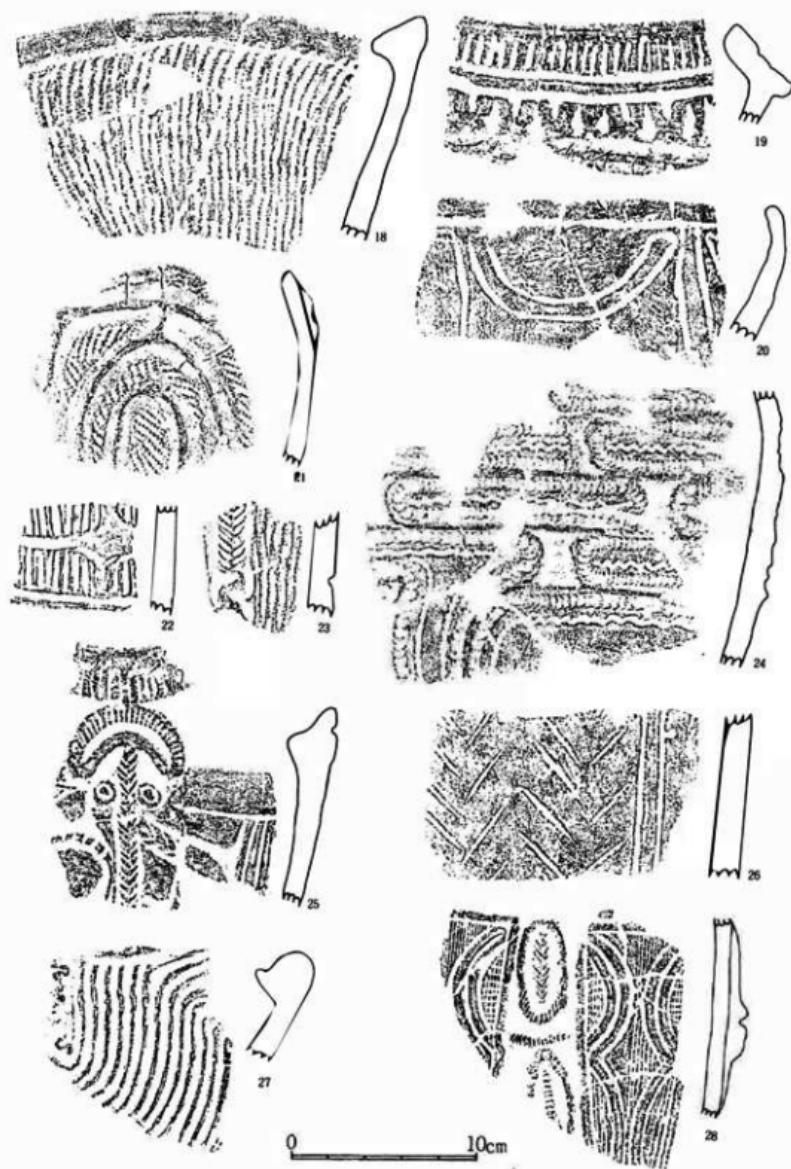
第73図 土城出土土器 (2)



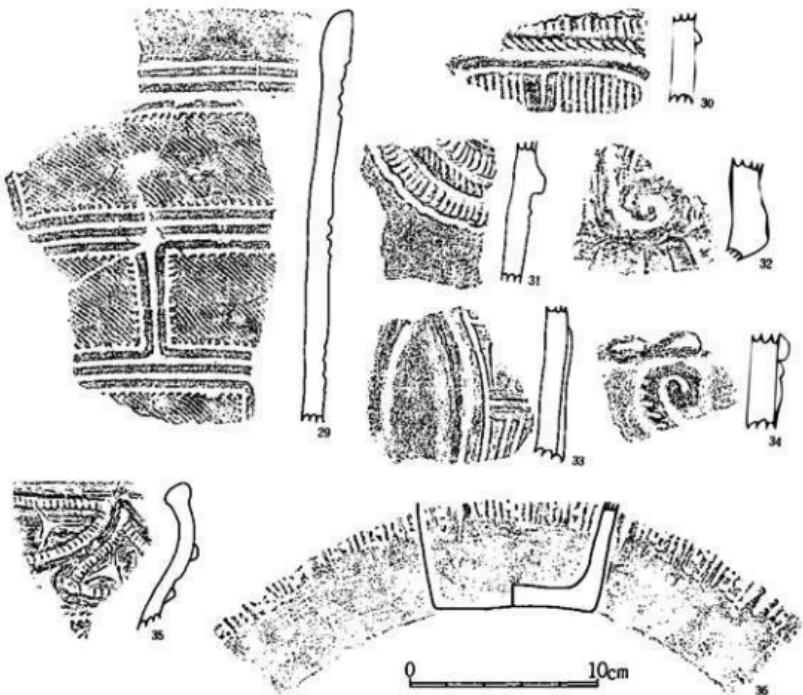
第74図 土塙出土土器 (3)

線が認められる。井戸尻式に比定。

26. 38号土塙出土。深鉢胴部片、綾杉状沈線文を特徴とし、曾利V式に比定される。
27. 38号土塙出土。深鉢口縁部片。隆帯による重弧文を口縁部にもつ。
28. 41号土塙出土。深鉢胴部破片。隆帯による綾位の楕円区画文と半截竹管による弧状文を特徴とする。区画内には格子状又は平行沈線が施される。藤内式に比定されよう。
29. 50号土塙出土。円筒形の深鉢形土器で、胴部に半截竹管による長方形の区画文が横位に数段巡る。区画内には刻みとR L繩文が充填される。藤内式に比定されよう。
32. 72号土塙出土。屈折底部をもつ深鉢で胴部に隆帯による渦巻文、繩文を施す。井戸尻式に比定される。
33. 80号土塙出土。隆帯による綾位の楕円形区画と沈線文を特徴とする深鉢胴部片である。
34. 83号土塙出土。深鉢胴部片で、隆帯による連鎖状文と渦巻文を施す。
35. 84号土塙出土。やや内彎する深鉢口縁部。舟底形及び三角形の区画内に連続爪形文と三叉状沈線で装飾する。新道式に比定される。
36. 85号土塙出土。深鉢胴下部。綾方向の条線とそれを横方向に刻む沈線が見られる。



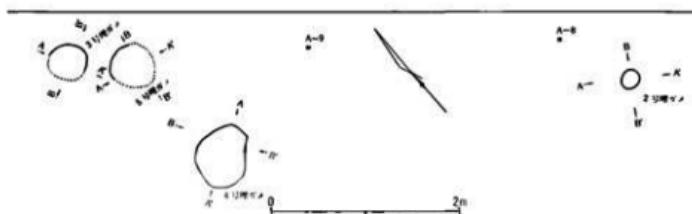
第75図 土塙出土土器 (4)



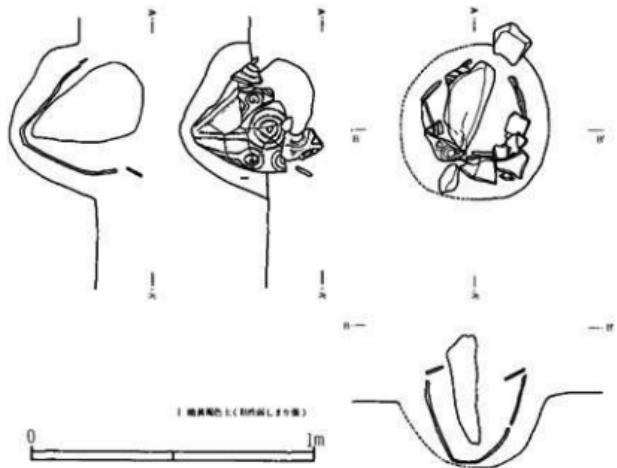
第76図 土塙出土土器 (5)

3. 単独埋甕

単独埋甕は、B区の中でも東側に集中する。1号単独埋甕は1号溝と2号溝の中間B-4グリッド、2号単独埋甕はA-7グリッド、3号～5号単独埋甕はA-8グリッドに位置する。いずれも住居址群とはやや離れた場所で検出される点が特徴的である。



第77図 2号～5号埋甕位置図



第78図 1号埋甕

(1) 1号単独埋甕 (第78・79図、
図版14)

直径55cm程のほぼ円形の土塙内に正位の状態で埋設されていた。土塙の深さは約25cmを測る。土器の内部には長さ75cm、最大幅60cm、厚さ15cm程の扁平な石が突き立てられた様な状態で入り込んでいた。

(土器) 頭部にわずかにくびれをもつが全体的には朝顔状に開く深鉢形土器である。頭部に4単位のX字状の把手が付加され、胴部に低隆帯による大柄渦巻文が施される。渦巻文部や胴下半部にはクシ状工具による条線が施文される。口縁部分は欠損するが、現存高51cm、底径10cm

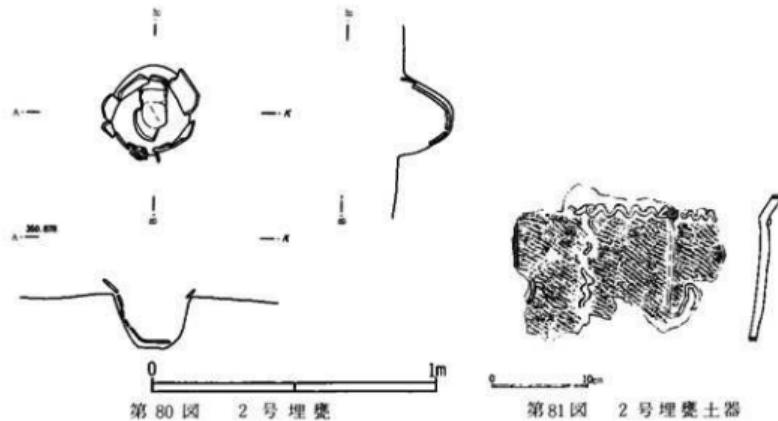
を測る。色調は淡褐色である。縄文時代中期後半曾利Ⅲ式に比定されよう。

(2) 2号単独埋甕 (第80・81図)

直径30cm程の円形の掘り込み部に、正位の状態で土器が埋設されていた。土塙の壁はほぼ土器の形に沿って立ち上がり、壁高は約15cmを測る。



第79図 1号埋甕土器



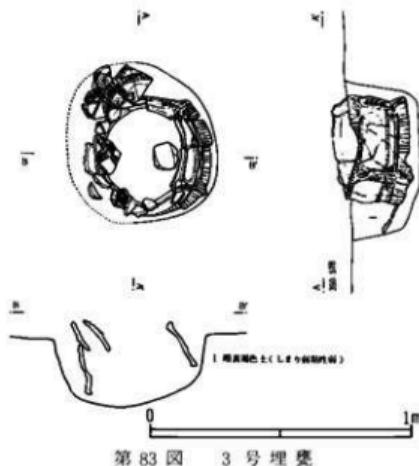
第 80 図 2 号 埋甕

第 81 図 2 号 埋甕器

(土器) 埋設土器は口縁部がやや外反する深鉢形土器で、頸部に粘土紐貼付による蛇行文が巡る。この蛇行隆帶文は数ヶ所でとぎれるが、この端部は渦巻文となり、その部分から粘土紐の貼付による懸垂文が施される。口縁部は無文であるが、胴部は L R 繩文を縱方向に回転させている。色調は暗褐色で、胎土は精選されている。繩文時代中期後半の曾利Ⅱ式に比定される。

(3) 3号単独埋甕 (第83・84図、図版14)

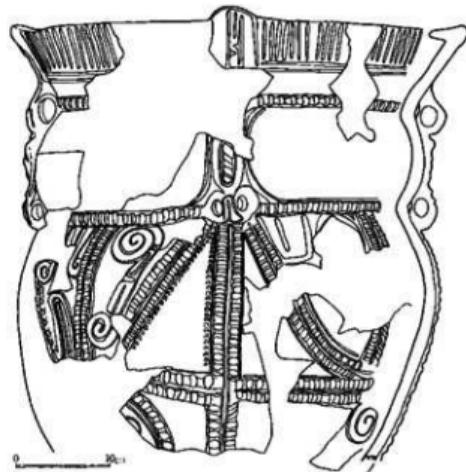
5号埋甕の西側に併設されている。土塗は直径約60cmの円形プランを呈し、深さは約30cmを測る。塗底はほぼ平坦で断面形は鍋底状を示す。土塗西側は攪乱を受けている。土器は逆位の



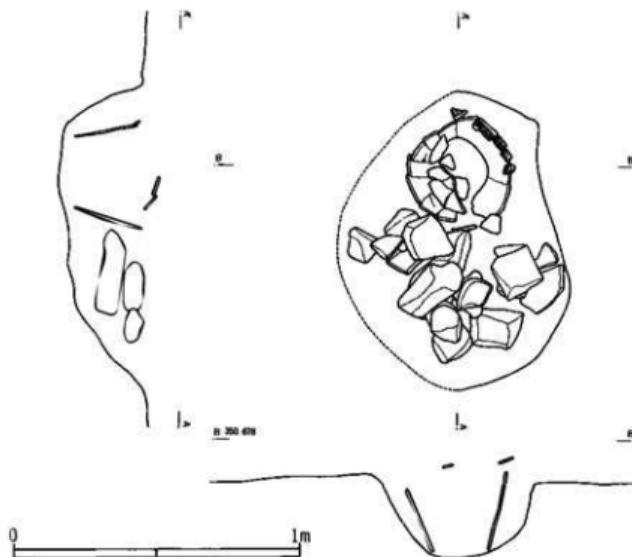
第 83 図 3 号 埋甕

の状態で埋設され、胴下半は欠損していた。

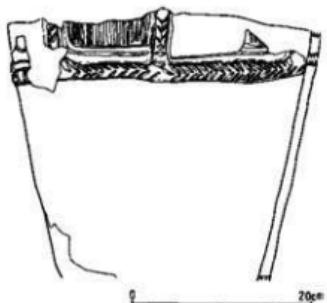
(土器) 胴上部で2段のくびれをもつ深鉢形土器で、頸部と胴部が内側する。口縁部分は外反し、端部に至って内屈する。口縁端部には4単位の山形小突起がつき、口縁部下には縦列沈線文が巡る。2段のくびれ部には有刻の隆帯が巡り、その間の頸部を無文で残すが、口縁部突起下のみは双孔を有する小把手が付加される。胴部には有刻隆帯による十字文、弧文、沈線による渦巻文などを施す。口径48cm、現存高47cmを測る。色調は暗褐色で、胎土に長石粒を多量に含む。縄文時代中期中葉井戸尻式に比定されよう。



第83図 3号埋甕土器



第84図 4号埋甕



第85図 4号埋甕土器

(4) 4号単独埋甕 (第84・85図、図版14)

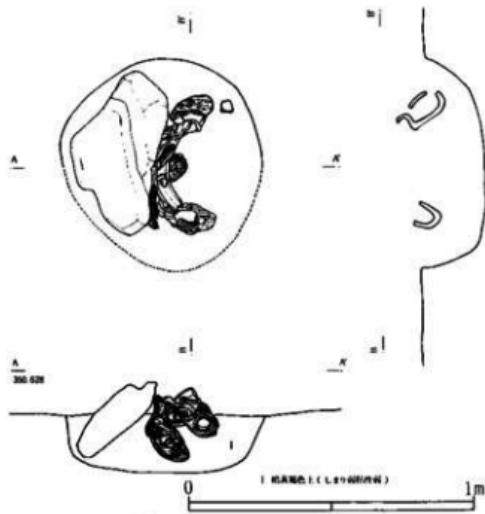
5号埋甕の南側に位置する。土塙の形態は長軸100cm、短軸80cmの不整椭円形を呈し、深さ30cmを測る。底部はやや凹凸をもち、東側にやや傾斜する。埋甕は正位で、土塙北部に設置され、土塙南側には人頭大の扁平石が集められている。

(土器) 深鉢形土器胴下半部で底部を欠く。胴下部は無文であるが、胴中位には「ハ」の字状の刻みをもつ隆帯によって区画文を施し、その内部を縦列沈線文などで充填する。現存高約30cm、最大径35cm、底径23cmを測る。色調は暗褐色で、胎土中に金雲母、長石粒を含む。縄文時代中期中葉の井戸尻式に比定されよう。

(5) 5号単独埋甕 (第86・87図、図版14)

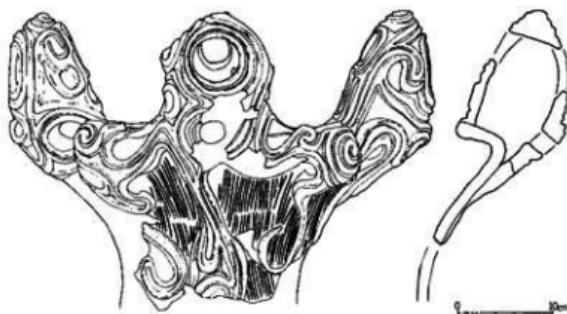
3号埋甕の東側に併設される。土塙は直径約70cmのほぼ円形を呈し、深さは20cmを測る。土塙底部はほぼ平坦で、断面形は皿状を呈する。埋甕は逆位で埋設され、土器の西側には60cm×30cm×10cmの扁平な繰が土器に倒れかかる状態で検出された。

(土器) 潟巻文を主体的に施した塔状把手を4単位有する深鉢形土器で、把手の1つは既に欠損している。所謂水蛭文土器で、腹部がゆるやかにくびれ、口縁部が内彎する。把手の内部は中空で、内外面に通じる孔を数ヶ所有する。塔状把手間の口縁には渦巻文をもつ中空の小



第86図 5号埋甕

突起が付加される。腹部には隆帯による懸垂文やわらび手状の文様が施され、地文は5単位のクシ状工具による条線が施される。現存高32cm、口縁部内径24cmを測る。色調は暗褐色、胎土中に長石粒を多く含む。縄文時代中期後葉の曾利I式に比定される。



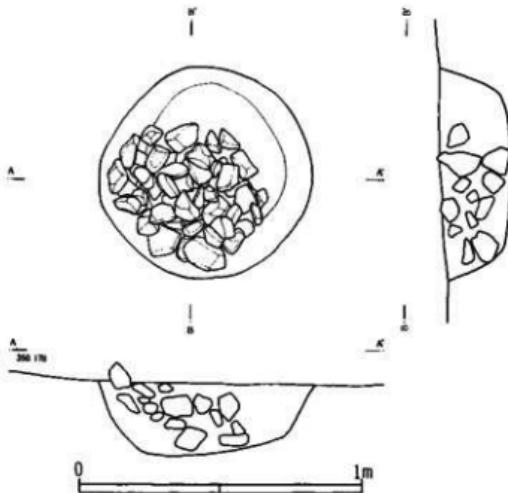
第87図 5号埋壺土器

4. 集石遺構

1号集石 (第88図、図版9)

(位置) B-11~12グリッドに位置する。

(形状・規模) 直径75cm程の円形プランを呈し、深さ25cmを測る。塙底はほぼ平坦で断面は皿状である。集石は10cm程の拳大の自然礫を土塙北側に扁して検出された。土器、石器等の人為的な遺物は出土しておらず、帰属時期については不明である。



第88図 1号集石

5. 壊穴状遺構

(1) 2号壊穴 (第89・90図)

(位置) B-26~27グリッドに位置する。

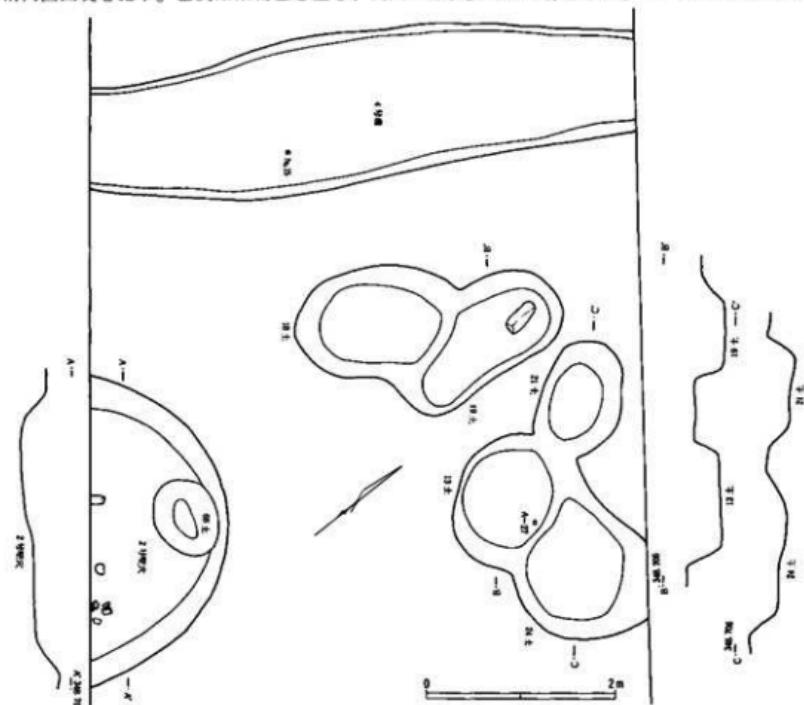
(形状・規模) 大半が調査区南に位置するため全体の形状・規模は不明であるが、東西方向3m30cmを測る。北壁部を68号土塙によって切られる。

(床面・壁) 床面は西側で1段下がるがほぼ平坦である。壁はゆるやかに立ち上り、壁高は約30cmを測る。

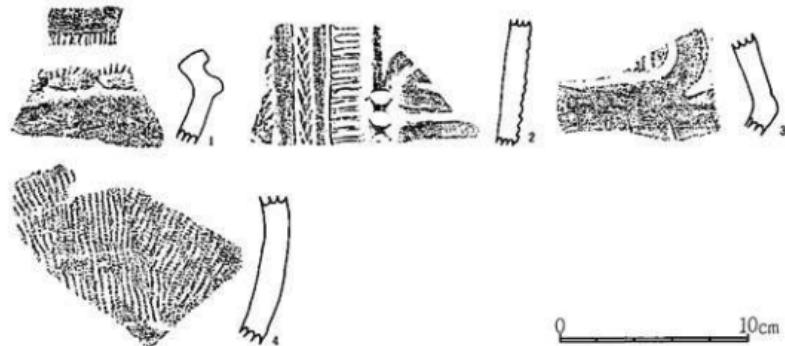
(出土遺物) 第90図が出土土器である。

1. 浅鉢口縁部片。口縁部が内屈し口縁端部に刻み目を有し、屈折部分に連鎖状隆帯を施す。胴部は無文で、色調は暗褐色を呈する。胎土には粗い石英粒を含んでいる。2. 深鉢胴部片。

有刻隆帶と沈線による文様を施す。沈線文には平行沈線、「へ」の字状沈線文、三叉文などが見られる。色調は暗褐色、胎土に長石粒を含む。3. 屈折底を有する深鉢破片。低隆帶による梢円区画文を施す。色調は茶褐色を呈し、内面に煤状炭化物が付着する。4. 浅鉢胴部片。胴



第89図 2号堅穴、13号・18号・19号・21号・24号土塙



第90図 2号堅穴出土土器

部にRL縄文を施す。色調は茶褐色で、胎土に長石、石英粒を含む。出土土器は縄文時代中期中葉井戸尻式に比定されよう。他に打製石斧1点（第108図20）が出土している。

6. 溝状遺構

1号溝、2号溝はB区の東端に位置し、3号溝がB区中程のB-17~18グリッド、4号溝はB区西側のB-28グリッドに位置する。

(1) 1号溝（第91図、図版6）

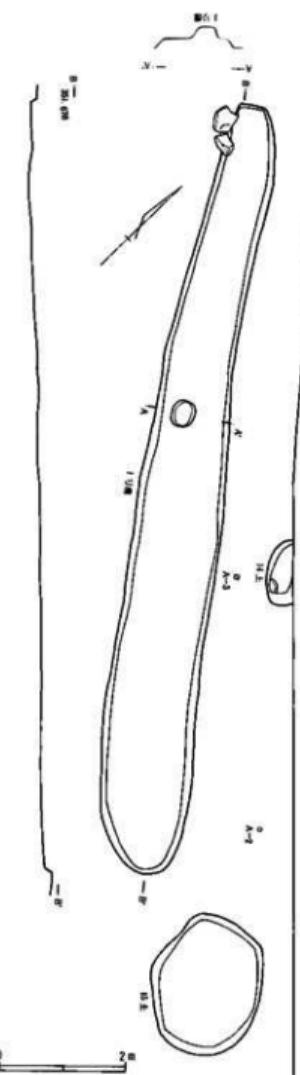
A-4、B-1~4グリッドに位置する。長さ12m、幅80~130cmを測る。溝底はほぼ平坦で北側へやや傾斜する。壁高は約15cmを測る。出土遺物が検出されず、時期、用途については不明である。

(2) 2号溝（第92図、図版6）

A-6、B-4~5、C-5グリッドに位置する。L字状に直角に屈折する。東溝はさらに調査区北側へ、南溝は西側へのびる。確認された範囲では、東溝の長さ9m50cm、幅約2m、南溝の長さ7m、幅約2mを測る。南溝西側で幅が膨らむ部分は擾乱によるものと考えられる。溝深は30cmと浅く、溝の断面は東溝がすり鉢状、南溝が皿状を呈する。東溝では溝のほぼ中央部に30~100cm程の扁平な自然礫を縦方向に配している。南溝では北側壁に沿って20~50cm程の扁平な石を一列配し、その南側に裏込め石と考えられる拳大の礫を配している。本溝状遺構は石積み上部の多くがすでに破壊されているが、本来は畠の地割等に伴う石積みとそれを構築する時の溝状の掘り込みと推定される。使用時期については不明である。

(3) 3号溝（第93図、図版6）

調査区を斜めに横断する。11号住、13号住を切って構築されている。溝幅は250cm前後で、2号溝と同様に中央に縦の石列が1段認められた。石積の表面は北側と考えられ、南側には裏込め石が検出された。溝底はほぼ平坦であるが、石列の北側は1段低い。付近は南から北へ向ってゆるやかに傾斜する斜面をなすが、この溝も2号

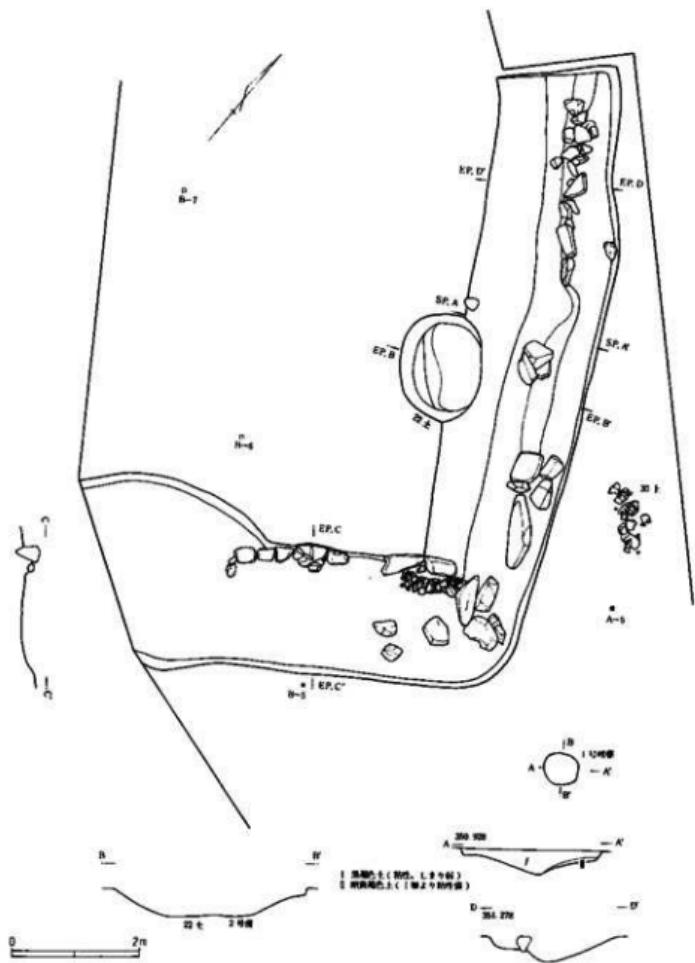


第91図 1号溝

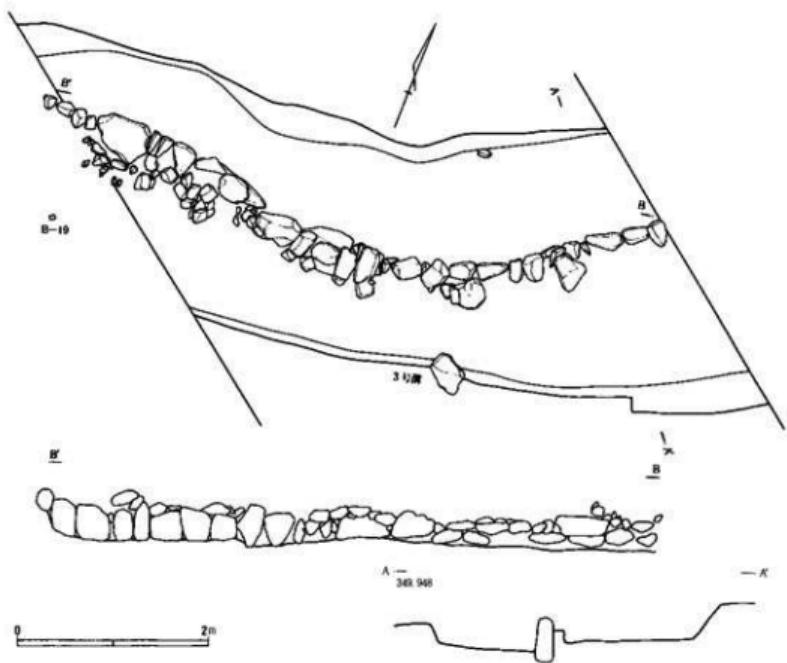
溝同様に畑等の地境と耕作面を水平に保つのに使用された石積に伴うものと推定される。使用時期については不明である。

(4) 4号溝 (第89図)

溝の長さは5m70cm、幅150cm程であるが調査区外へ更にのびるものと考えられる。溝深は10cmと浅く、断面は皿状を呈する。出土遺物は検出されず、使用時期、用途等は不明である。



第92図 2号溝



第93図 3号溝

第2節 C区の遺構と遺物

C区東端と西端部に縄文時代の遺構が検出されているが、その間には遺構は存在しない。C区東端の遺構は、住居址1軒、土塙15基、堅穴状遺構1基である(第6図)。

また、B-7～12、B-14、B-16、B-18、B-20、B-22、B-24、B-26、B-28、B-30、B-32、B-35グリッドにおいてローム層の掘り下げを行い、先土器時代の遺構、遺物等の確認調査を行なったが発見されなかった。

1. 住居址と出土遺物

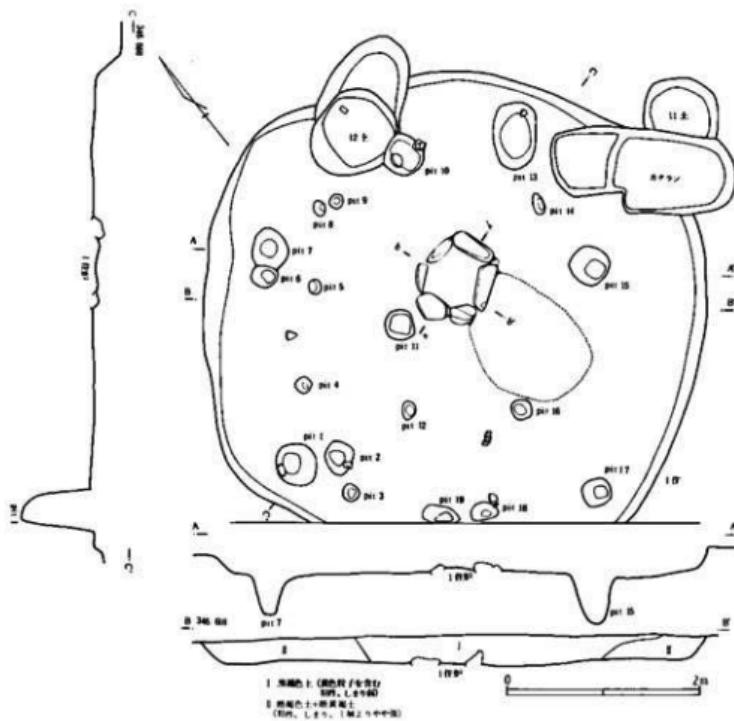
(1) 1号住居址(第94～96図、図版3)

(位置) B～C-2～4グリッドに位置する。11号、12号土塙と重複する。

(形状・規模) 南壁が調査区外にのびるが、直径5m30cm前後のほぼ円形を呈する。

(床面・壁) 床面はほぼ平坦で良く踏み壓められている。壁は土塙との重複部分を除いて良好な残存状態を示し、壁高は約30cmを測る。

(炉) 石開い炉。住居址中央よりやや北東に扁して設置される。長さ30～50cm、幅約20cm程の棒状乃至扁平な石を6個配する。全体的には5角形をなす。炉の掘り込みは、約30cmの深さで、底部はほぼ平坦である。

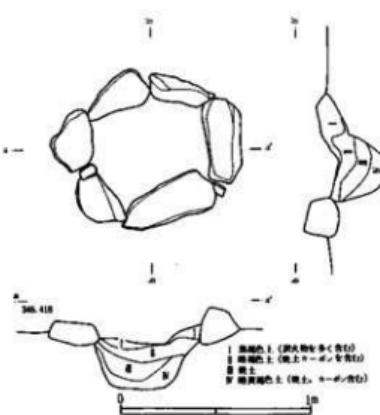


第94図 1号住居址

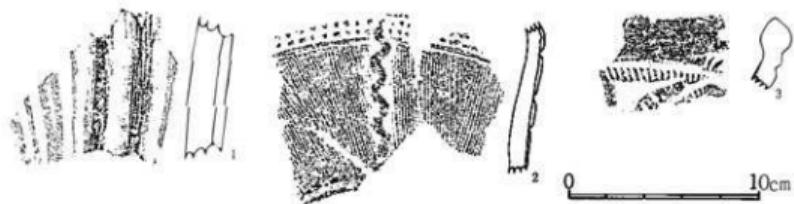
(その他の施設) 直径40cm程の円形ピットが6個、直径10~30cmの円形ピットが13個確認された。この内、ピット1・7・10・13・15・17は主柱穴と判断される。柱穴部の掘り込みは50~70cmの深さを測る。

(出土遺物) 第96図が本住居址出土土器である。

1. 深鉢胴部破片。平行する隆帯と沈線による文様を施す。色調は淡褐色。胎土中に石英、長石粒を多く含む。
2. 鉢胴部片。上部に半截竹管押引き文が巡り、蛇行隆帯が垂下する。地文にクシ状工具による条線を施す。色調は茶褐色、胎土中に長石粒を含む。
3. 深鉢口縁部片。口縁下に沈線による三叉文や平行する刻みを施す。



第95図 1号住居址炉



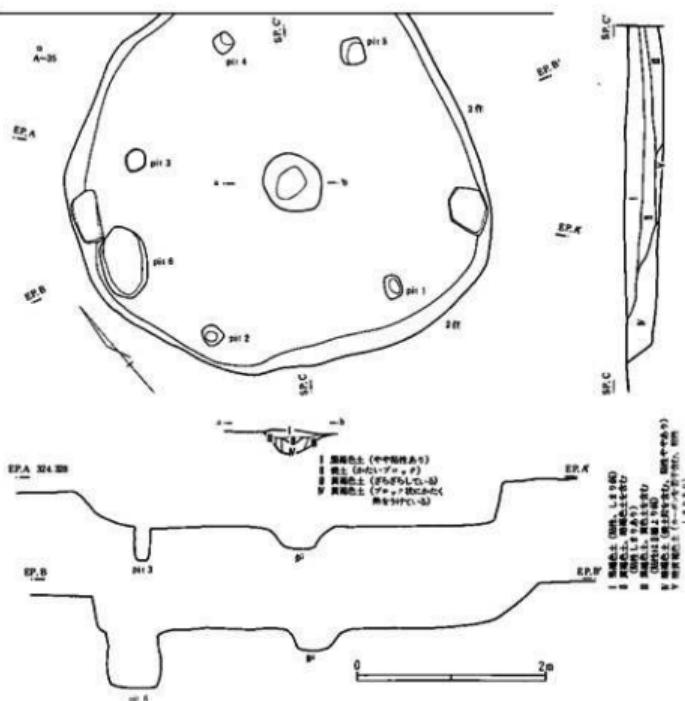
第96図 1号住居址出土土器

す。出土土器は1・3が井戸尻式、2が曾利式に比定されるが、他の出土土器片や炉の形態などから住居址の使用時期は井戸尻式期と考えられる。

土器以外の出土遺物では磨石4点（第114図1～3・5）、凹石1点（第114図4）、打製石斧1点（第108図1）がある。

(2) 2号住居址（第97図、図版3）

（位置） C区西端B-33～34グリッドに位置する。



第97図 2号住居址

(形状・規模) 北壁の一部は調査区外にのびるが直径4m50cmの不整円形を呈する。

(床面・壁) 床面はほぼ平坦で堅緻である。壁はほぼ直立に立ち上がる部分とゆるやかに立ち上がる部分がある。壁高は約50cmを測る。

(炉) 炉址は住居址のはば中央に存在し、地床炉である。直径60cmのほぼ円形で、深さ25cmを測る。覆土の中程に焼土が堆積する。

(その他の施設) 柱穴と考えられる直径20cmの円形の小ビットが5個壁際を巡る。柱穴の深さは30cm程度で、ビット間の間隔は150~250cmである。また西壁際に75cm×50cm~50cmの楕円形ビットが検出されたが、これは貯蔵穴等の施設であろう。ビット6の北側および南壁から50cm×30cm×10cm程度の扁平な礫が壁に立て掛けた状態で出土している。

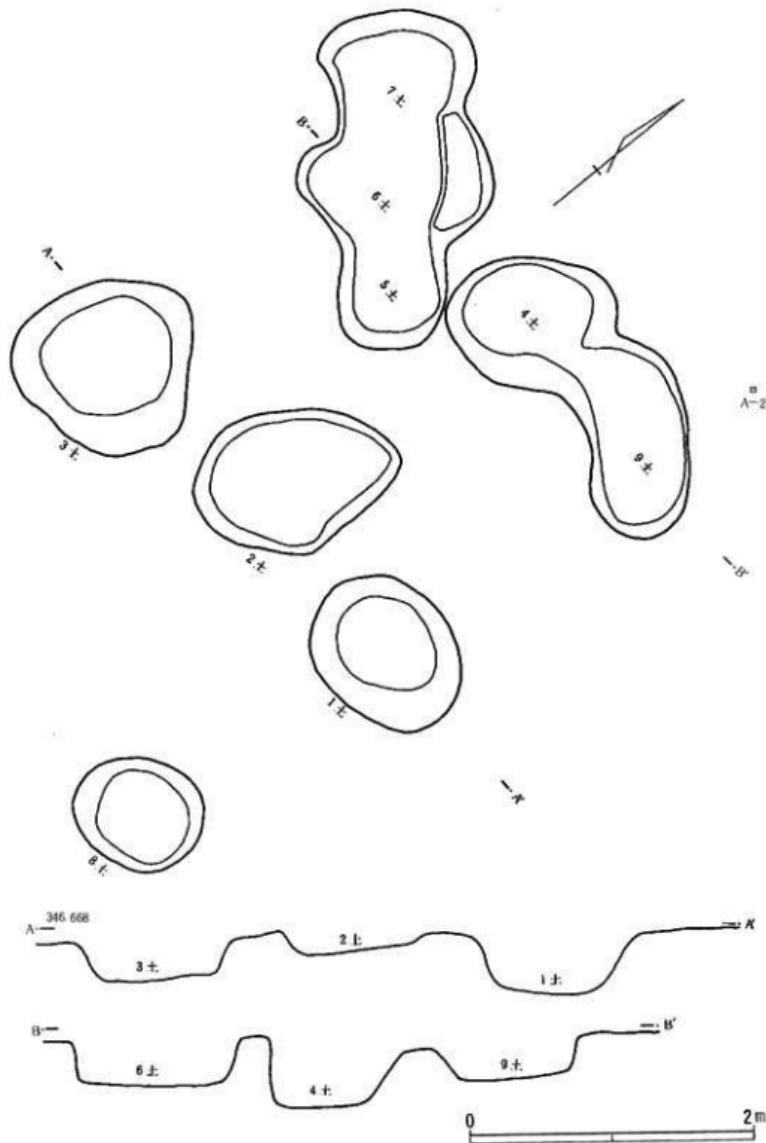
(出土遺物) 炉東側の床面直上より深鉢底部付近の土器片が出土したが、風化が激しく、実測、拓影が不可能であった。形態は胴下半部が外反する諸段b~c式土器と考えられる。

土器以外に、4面を使用した磨石1点(第114図6)、石鎌1点(第111図1)が出土している。

2. 土塙と出土遺物

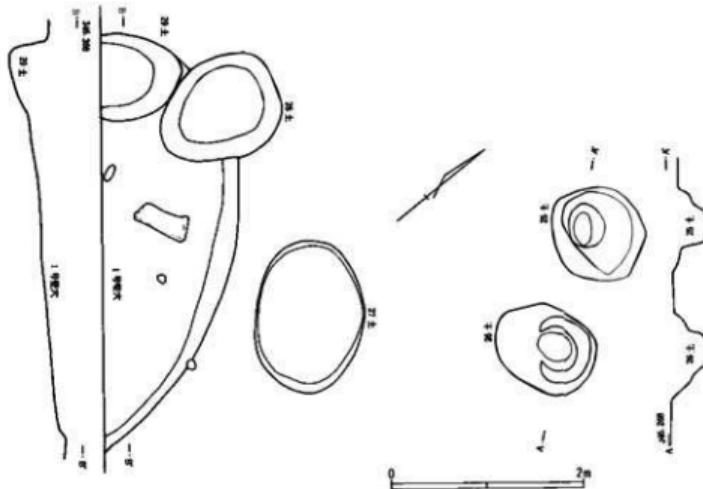
表2 C区土塙一覧

番号	形態		規模			底	位置 (グリッド)	備考
	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
1	椭円形	鍋底状	120	95	50	平坦	B-1	
2	不整 椭円形	皿状	150	105	10	平坦	B-1	
3	不整形	皿状	130	120	25	平坦	B-1~2	井戸尻式
4	椭円形	鍋底状	120	90	60	平坦	B-2	9土と重複
5	(椭円形)	皿状	(?)	80	40	平坦	B-2	6土と重複
6	(椭円形)	皿状	140	(?)	30	平坦	B-2	5土、7土と重複
7	(椭円形)	皿状	110	(?)	40	平坦	B-2	6土と重複
8	椭円形	皿状	90	80	20	平坦	B-1	
9	椭円形	皿状	(150)	70	30	平坦	B-1	4土と重複
11	(円形)	皿状	75	(?)	20	平坦	B-2	
12	(椭円形)	不定形	160	90	50	テラス有	B-3	1住と重複
25	不整 円形	不定形	100	100	30	テラス有	B-5	
26	椭円形	すり鉢状	110	80	40	平坦	B-4~5	
27	椭円形	皿状	160	115	15	平坦	B-5	
28	椭円形	皿状	135	110	20	平坦	B-5	1号堅穴と重複
29	(椭円形)	皿状	(?)	90	20	平坦	B~C-5	"



第98図 1号～9号土塚

3. 壓穴状遺構



第99図 1号壓穴



第100図 1号壓穴出土土器

(1) 1号壓穴 (第99・100図)

(位置) B-4~5グリッドに位置する。

(形状・規模) 大半が調査区南側にのびるため全体の形状・規模は不明であるが、南北幅は4m30cmを測る。

(床面・壁) 床面は西側に向って傾斜する。壁高は南側で10cmを測る。

(出土遺物) 第100図が出土土器である。断面が非常に薄手で、外面に貝殻条痕を施す。内面には指頭痕が残される。縄文時代前期初頭の土器と考えられる。

第3節 E区の遺構と遺物

E区はC区の南50m程の一角に位置する。調査区北側から1号配石および10号土塙が検出された。

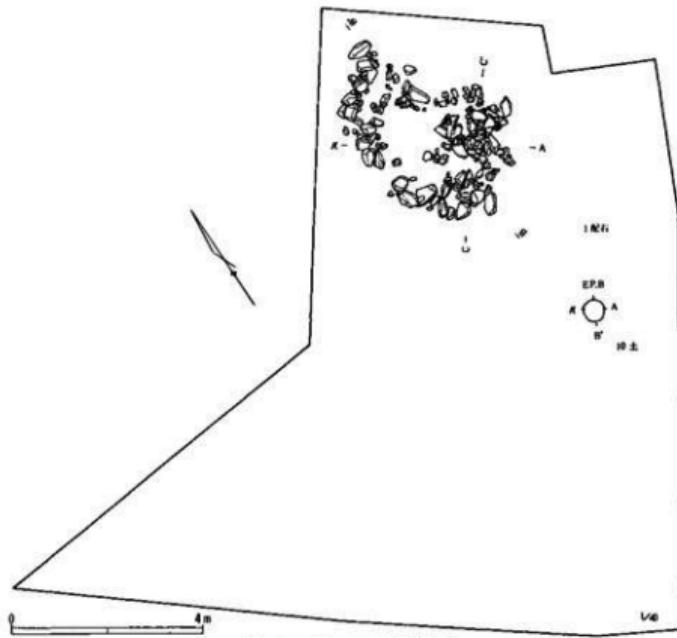
1. 土塙と出土遺物

(1) 10号土塙 (第72・102図)

(位置) 1号配石の南3mに位置する。

(形状・規模) 40~45cm程の不整円形を呈し、深さは10cm程である。

(土器) 第72図2が出土土器である。外面にクッショウ工具による綾杉状文をもつ諸磯c式土器である。現存高15cm、底径12.5cmを測る。

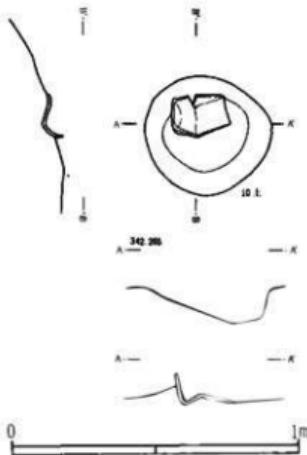


第101図 E区全体図

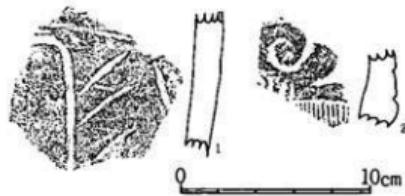
2. 配石遺構

(1) 1号配石 (第103・104図、図版9)

配石の範囲は $4\text{m}50\text{cm} \times 3\text{m}$ の楕円形を呈する。拳大から人頭大の自然礫を使用している。配石は西側が高く、東側が1段低くなる。配石下部は不整形の浅い掘り込みが、そこから北側にのびる溝に切られる状態で存在する。この掘り込みは長軸 $2\text{m}50\text{cm}$ 、短軸 $2\text{m}20\text{cm}$ ほどの規模で、深さは 10cm 程度である。底面は直径 10cm 程度の小ビットが、蜂の巣状にあけられ、凹凸が激しい。土塙基等の施設は検出されなかった。

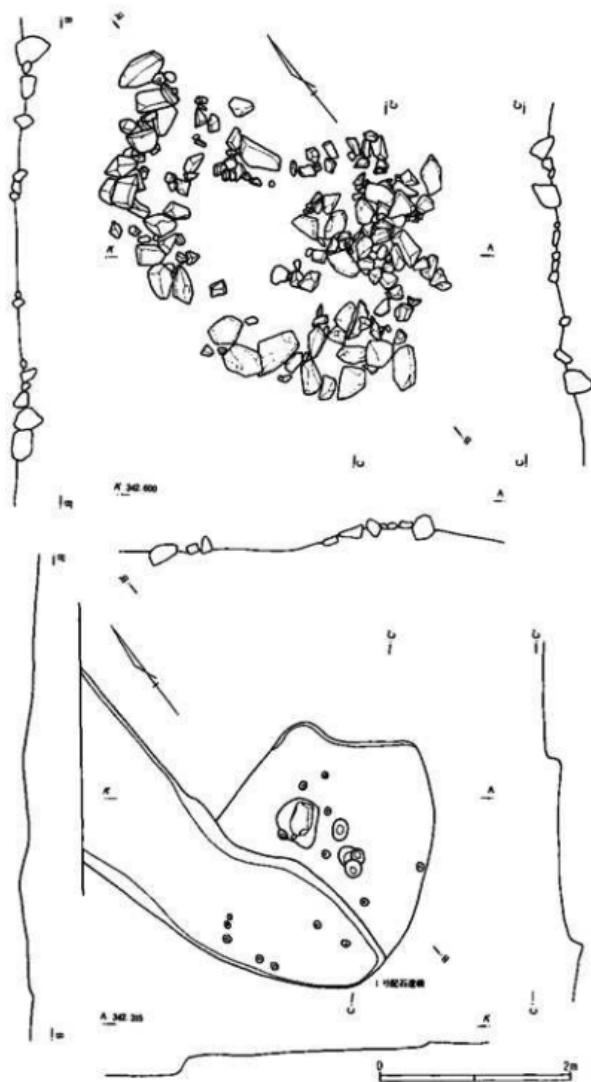


第102図 10号土塙



第103図 1号配石出土土器

(出土遺物) 第103図が本造構出土土器である。1は「ハ」の字状沈線を施した深鉢胴部である。2は沈線による渦巻文を特徴とする。1は曾利V式、2は井戸尻式に比定される。



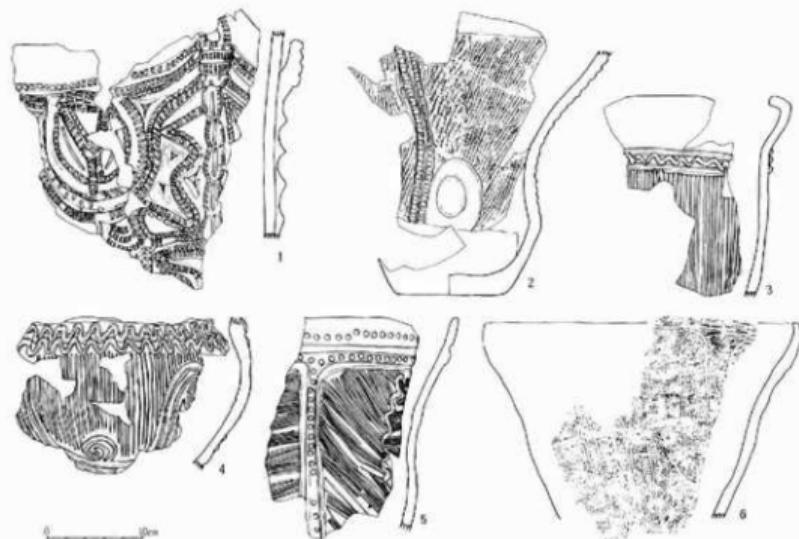
第104図 1号配石

第4節 その他の遺物

1. 遺構外出土土器（第105図）

遺構外の出土土器について主なものを記述する。

1. 表土中出土。深鉢胴上部。口縁部に山形の小突起を有する。有刻の隆帯や連鎖状隆帯による文様と三叉状沈線が特徴的である。色調は暗褐色で、胎土は精選されている。
2. B区A-10グリッド出土。屈折底を有する深鉢形土器。胴中程がゆるやかにくびれ、胴上部が開く。胴部に有刻の平行する隆帯が縱に走り、屈折部付近に低隆帯による円文を施す。地文は縦文である。現存高29.5cm、底径11cmを測る。色調は暗茶褐色で胎土中に長石を含む。
3. B区B-18グリッド出土。内縁口縁を有する深鉢形土器で、口縁部は無文で残す。頸部に平行する隆帯と蛇行隆帯を巡らし、胴部は隆帯による懸垂文と地文の条線を施す。現存高20cmを測る。色調は暗褐色で胎土中に長石粒を含む。
4. 表土中出土。胴部が内彎する鉢形土器。胴上部に蛇行隆帯が巡り、胴部にU字状隆帯が施される。地文は半截竹管による条線が縱走する。現存高16.5cmを測り、色調は茶褐色を呈する。
5. B区A-15グリッド出土。胴部がゆるやかにくびれる深鉢形土器。口縁部に円形竹管の刺突文が巡り、胴部に円形竹管刺突をもつ隆帯による区画がなされる。区画内には蛇行沈線文が垂下し、地文にクシ状工具による条線が斜走する。
6. E区出土。胴上部がゆるやかにくびれ、口縁部が若干内彎する深鉢形土器。口縁下に沈線が巡り、胴部に梢円形の沈線区画を縱に施す。現存高21cm。色調は暗褐色である。



第105図 グリッド出土土器

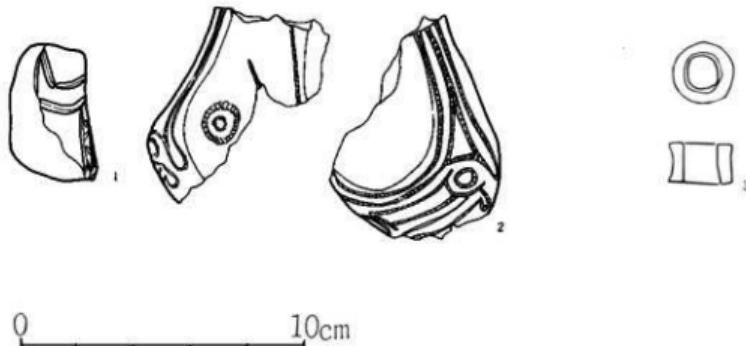
2. 土製品

(1) 土偶 (第106図1・2)

1. 表土中出土。土偶脇腹部分。曲線的な沈線文と刺突文を施す。2. 15号住居址出土。土偶腹部および臀部の破片である。土偶前面の中央にはペン先状工具押引きによって正中線が表現される。右腹には同様の手法による同心円文と三叉状の文様が見られる。脇腹から臀部にかけてはペン先状工具押引きによる曲線的な平行線や円文、渦文などが施される。現存長7cm、幅6cmを測る。色調は、暗褐色で長石粒を胎土に含む。

(2) 土製耳飾 (第106図3)

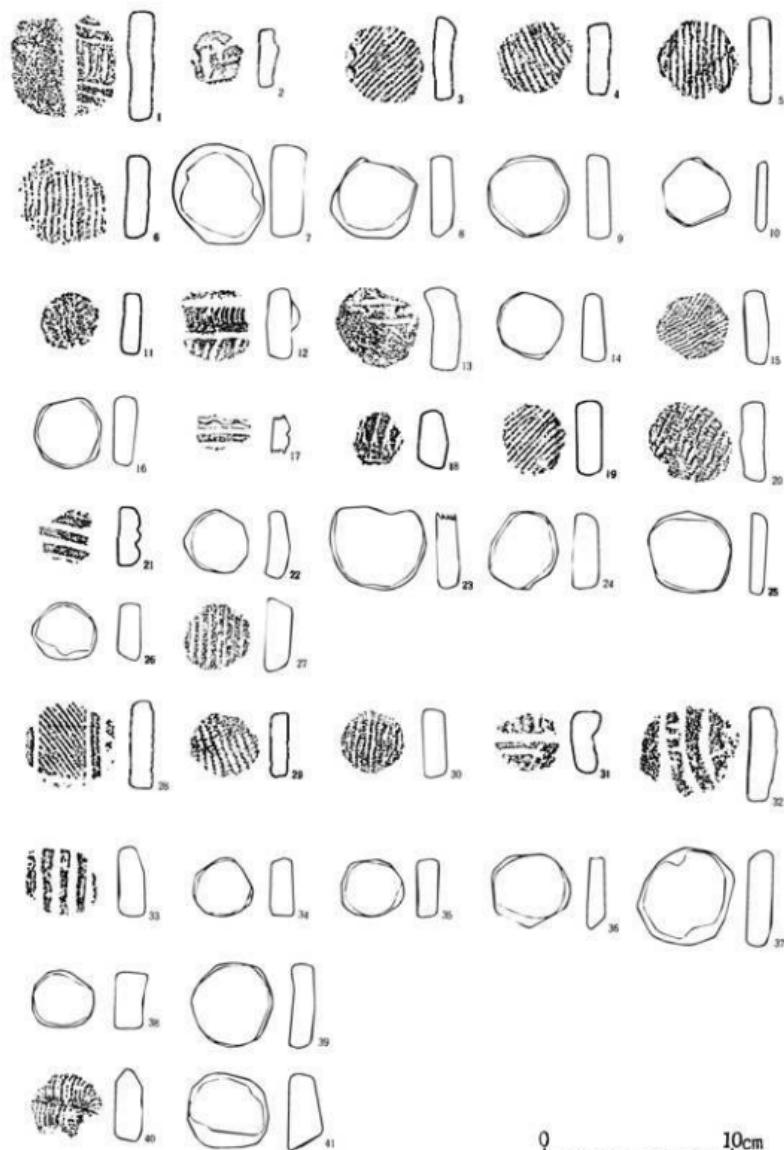
表土出土の土製耳飾である。直径2cmのドーナツ状の耳飾で、断面形は臼状に中央がゆるやかにくびれる。貫通孔の内径は1.2cmを測る。施文は全く認められず、色調は明褐色である。



第106図 土製品

(3) 土製円盤 (第107図、図版15)

本遺跡出土の土製円盤は、41点存在する。この内、有文のものは23点、無文のものは18点である。直径は3cm～6cmの範囲に含まれる。これらの土製円盤は全て土器片再利用のもので、当初から土製円盤として製作されたと考えられるものはない。円盤側面が丁寧に磨かれているものは、3・5・7・12・17・25～28・32の11点で、他は雑な側面磨きを見せている。断面はほとんどがゆるやかなカーブをなすもので、有文のものは全て縄文中期の土器と考えられる。無文のものについても厚さ、胎土等の特徴から中期以外のものと限定できるものは存在しない。遺構別にみると5号住居址覆土中から9点、11号住居址から7点と出土数が多く、この2軒で全体の40%を占める。形状は円形ないし梢円形に収束するが、17のみは長円形を呈する。厚さは大半が1cm前後であるが、7のみは1.5cmと極めて厚い。逆に薄手のものは10、36で0.6cm程度である。



第 107 図 土 製 円 盤

41点について出土位置、直径、厚さ、重量の順に記述しておく。

1；3号住出土・6cm・1.2cm・63.2g、2；5号住出土・3cm・1cm・11.0g、3；5号住出土・4cm・1cm・21.5g、4；5号住出土・4cm・1cm・23.5g、5；5号住出土・4cm・0.9cm・24.7g、6；5号住出土・4.5cm・1cm・29.1g、7；5号住出土・4.5cm・1.5cm・56.6g、8；5号住出土・4cm・1cm・25.9g、9；5号住出土・4cm・1.2cm・30.8g、10；5号住出土・3.5cm・0.6cm・10.4g、11；7号住出土・3cm・0.9cm・12.3g、12；8号住出土・3.8cm・1cm・27.3g、13；8号住出土・4.5cm・1.1cm・32.6g、14；8号住出土・3.2cm・1cm・14.3g、15；10号住出土・4cm・1cm・21.5g、16；10号住出土・3.5cm・1cm・17.5g、17；10号住出土・3cm×2cm・0.8cm・8.0g、18；11号住出土・2.5cm・1.2cm・12.1g、19；11号住出土・3.5cm・1.1cm・21.4g、20；11号住出土・4cm・1cm・28.5g、21；11号住出土・3cm・1cm・14.3g、22；11号住出土・3cm・0.9cm・12.5g、23；11号住出土・5cm・1cm・27.6g、24；11号住出土・4cm・1.2cm・24.2g、25；18号土塙出土・4cm・0.7cm・18.1g、26；76号土塙出土・3cm・1.1cm・12.5g、27；85号土塙出土・3.5cm・1.2cm・20.9g、28；表土・5cm・1cm・33.7g、29；表土・3.5cm・1cm・19.7g、30；表土・3.5cm・0.9cm・14.7g、31；表土・3×3.5cm・1.2cm・19.9g、32；表土・5cm・1cm・39.8g、33；表土・3.5cm・1.2cm・17.9g、34；表土・3cm・1cm・15.2g、35；表土・3cm・0.9cm・12.0g、36；表土・4cm・0.8cm・16.8g、37；表土・5.3cm・1.3cm・41.7g、38；表土・3.3cm・1.5cm・19.7g、39；表土・4cm・1cm・25.6g、40；表土・3cm・1cm・18.0g、41；表土・4cm・1.5cm・36.2g。

3. 石 器

(1) 打製石斧（第108・109図、図版16）

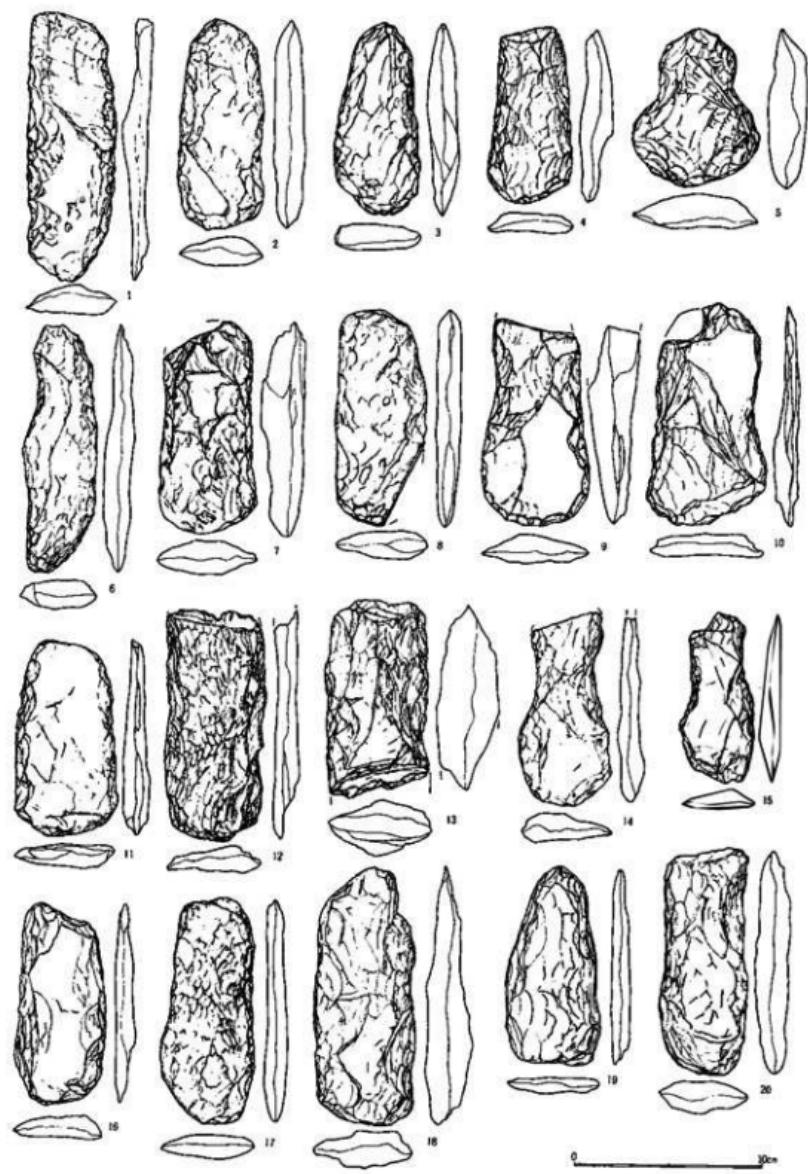
原形の推定できる欠損の少ないもの30点を図化した。他に剥離などによって原形をとどめていない打製石斧も相当数存在するが、ここでは割愛する。

30点の打製石斧を短冊形、撥形、分銅形に分類すると、短冊形を示すものが1、2、6～9、11～13、16～18、20～24、26～30の22点、撥形が3、4、19、25の4点、分銅形が5、10、14、15の4点である。

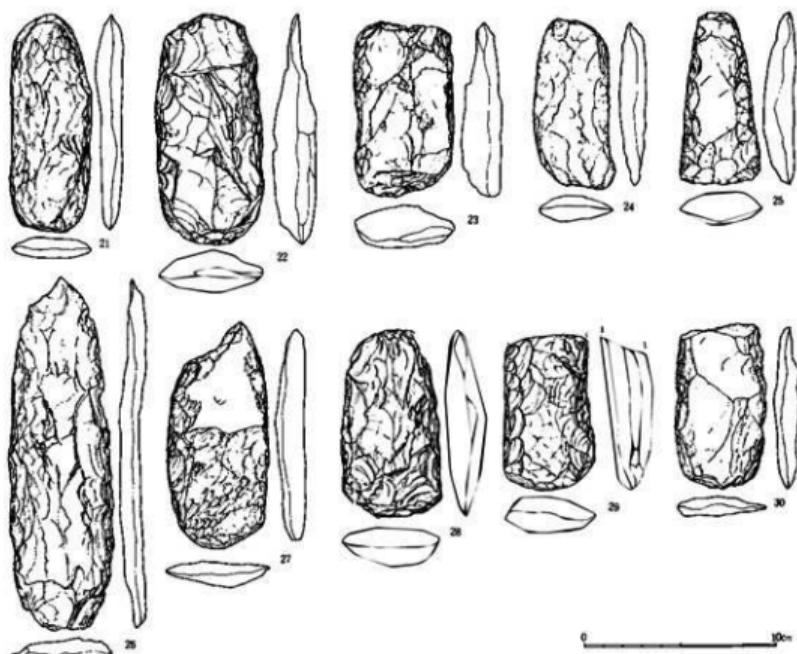
最も出土量の多い短冊形打製石斧の中でも刃部形態が円刃と斜刃の2種類に細分できるが、直刃のものは存在しない。斜刃のものは1、6の2点で、円刃がその大半を占めている。短冊形という同一形態の石斧であっても刃部形態に応じて異なる用途・機能が存在していたものかもしれない。特に6は、短冊形に含めたが、基部に抉りをもち、側面を使用したものと考えられる。長さは10～13cmのものが多く、最大で18.6cmを測る。刃部幅は4～5cmのものが多い。重量は100～130gほどが多く、200gを超えるものは2点に限られる。

撥形は全体の13%を占めるが、刃部形態は円刃と直刃の2種に分けられる。円刃をもつものは3、4、直刃を示すものは19、25である。長さは9～10cmで、短冊形よりやや小ぶりである。刃部幅は4～4.5cm程度で、重量は70～90gに集中する。

分銅形は、身の中程に抉りをもつものであるが、基部と刃部幅が極端に異なるもの（5）と



第 108 図 打製石斧 (I)



第 109 図 打製石斧 (2)

両者がほぼ同じ幅を示すもの (10, 14, 15) の 2 種類がある。長さは 8 ~ 10cm 程を測り、重さは各々にバラつきがある。

表 3. 打製石斧一覧

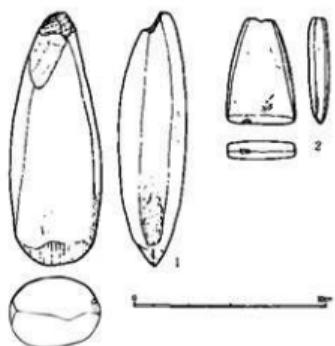
番号	出土位置	形態	長さ (cm)	基部幅 (cm)	刃部幅 (cm)	刃部形	重量 (g)	石 材
1	1 住	短冊	14.2	4.2	4.4	円刃	119.0	粘板岩
2	3 住	"	11.2	3.1	4.4	"	118.3	泥質ホルンフェルス
3	5 住	揆	10.2	3.3	4.5	"	91.8	細粒砂岩
4	5 住	"	9.5	3.1	4.5	"	84.8	細粒砂岩
5	5 住	分銅	8.5	3.5	6.8	"	114.2	粘板岩
6	5 住	短冊	13.2	2.5	3.6	斜刃	98.5	泥質ホルンフェルス
7	5 住	"	(11.2)	5.2	4.7	円刃	170.0	泥質ホルンフェルス

番号	出土位置	形態	長さ (cm)	基部幅 (cm)	刃部幅 (cm)	刃部形	重量 (g)	石 材
8	7住	短冊	(11.4)	3.7			106.3	泥質ホルンフェルス
9	7住	分銅	10.8	4.2	5.6	円刃	176.8	極粗粒砂岩
10	7住	短冊	11.8	5.1	6.0	"	113.3	粘板岩
11	7住	"	10.4	4.0	5.5	"	101.5	泥質ホルンフェルス
12	8住	"	12.2	5.2	4.9	"	128.5	細粒砂岩
13	9住	"	10.6	5.0			209.9	細粒砂岩
14	11住	分銅	10.3	3.8	4.8	円刃	78.0	細粒砂岩
15	11住	"	9.1	2.8	4.0	"	38.7	粘板岩
16	11住	短冊	(10.7)	4.0	4.6	"	95.2	砂質粘板岩
17	11住	"	12.0	3.1	5.0	斜刃	95.8	泥質ホルンフェルス
18	14住	"	13.6	(3.5)	5.2	円刃	202.7	細粒砂岩
19	12住	撲	10.6	2.7	5.0	"	72.3	泥質ホルンフェルス
20	2号堅穴	短冊	12.2	4.3	4.6	"	129.3	泥質ホルンフェルス
21	16土	"	11.5	3.1	4.0	"	90.9	泥質ホルンフェルス
22	35土	"	12.1	4.1	5.4	"	179.8	細粒砂岩
23	83土	"	9.3	5.1	5.1	"	137.8	細粒砂岩
24	85土	"	8.9	3.35	3.8	斜刃	69.1	泥質ホルンフェルス
25	A-21G	撲	9.0	1.9	4.2	直刃	67.4	粘板岩
26	表土	短冊	18.6	4.0	5.2	円刃	177.2	細粒砂岩
27	表土	"	11.9		5.0	"	111.4	細粒砂岩
28	表土	"	9.8	4.2	5.1	"	136.8	粘板岩
29	表土	"	8.1	4.2	4.8	斜刃	123.8	粗粒砂岩
30	表土	"	8.6	4.2	4.6	"	74.7	中粒砂岩

(2) 磨製石斧 (第110図、図版18)

磨製石斧の出土例はきわめて少なく13号住居址および35号土塙出土の2点がある。他では10号住で基部破片1点が出土している。

1は長さ13.35cm、幅4.75cm、厚さ3.5cmの乳棒状磨製石斧である。刃部は円刃で両側に刃部がつけられ、基部は一部欠損する。重さは350gを計る。2は小型で薄い定角式磨製石斧で



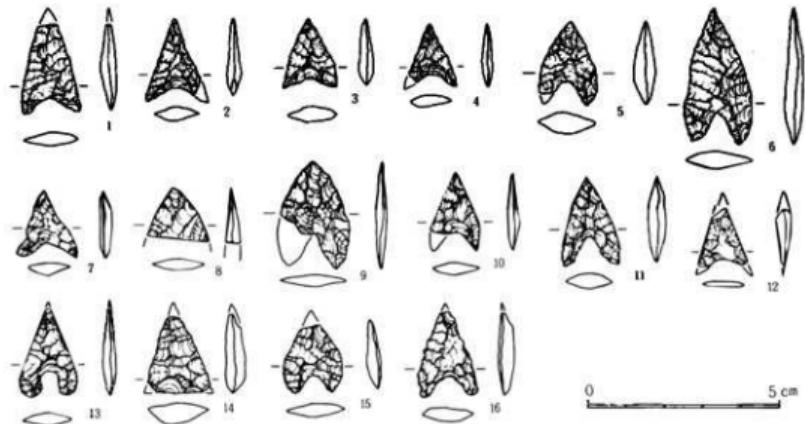
第110図 磨製石斧

ある。全体的に丁寧に磨かれており、石材も非常に硬い珪質岩を用いている。刃部は直刃で一部が欠損している。長さ 5.6 cm、幅 3.6 cm、重さ 34.6 g を計る。機能としては、1 が木材の伐採や資材の荒割り等に使用されたと考えられるが、2 は横斧として資材の 2 次加工等の用途に使われたものと推定される。また、2 は底部に 2 個体の土器を出土した35号土塚から出土したもので、土塚墓の副葬品の一つである可能性もある。

(3) 石 鎌 (第111図)

石鎌の出土例は16点存在する。3点を除いて全て

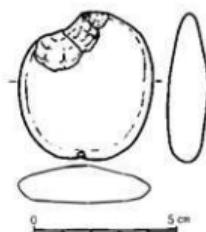
黒曜石を石材としており、他にはチャート質のものが利用されている。形態は14の三角鎌以外はすべて凹基無基鎌である。基部の抉り方は大半が三角形状をなすが、13のみは抉りが深くU字状を呈する。全体的には側面が直線的になるものと、やや膨らみをもつタイプが存在する。後者のタイプは相対的に大型のものが多い。大きさは、完形のもので最小が長さ 1.65 cm、最大で 3.55 cmとかなり差があるが、多くは 2 cm 前後のものである。重量は大形のものを除けば 1 g 以下のものが大半を占める。



第111図 石 鎌

(4) 石 錘 (第112図)

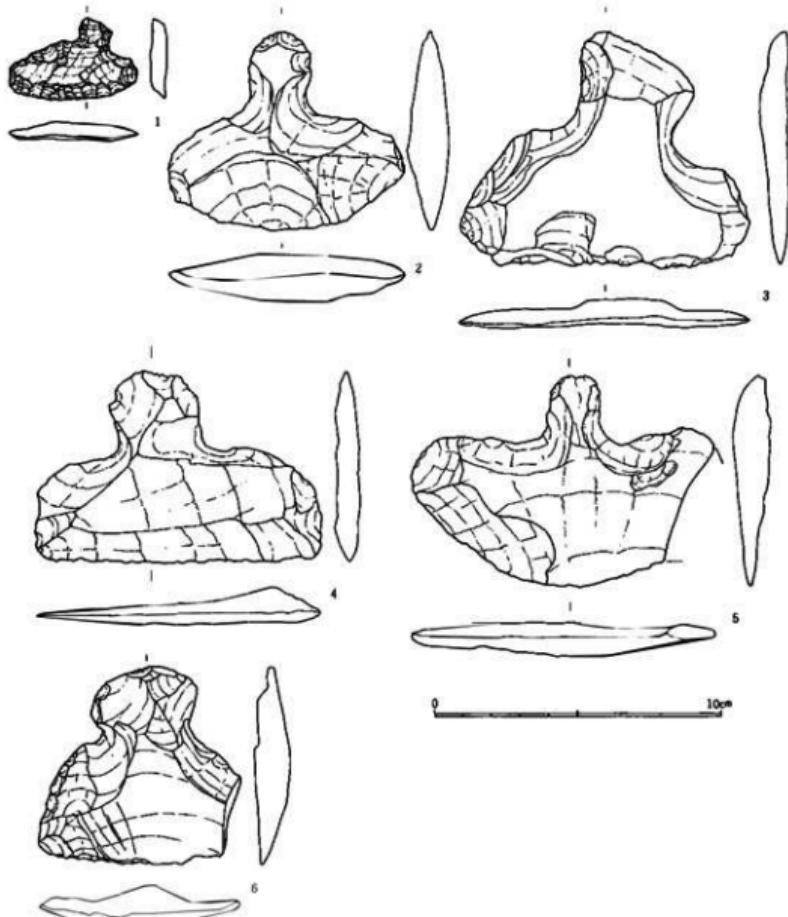
11号住居址で石錘が1点出土している。両端に切目を入れる切目石錘で、長さ5.15cm、幅4.6cm、厚さ1.3cmを測り、重さ39.95gを計る。石材は安山岩製である。



第112図 石 錘

(5) 石 匙 (第113図、図版18)

6点出土した石匙の内遺構に伴出したものは13号住出土の1のみで、他の5点はB区グリッドで検出されている。



第113図 石 匙

形態はすべて横型で、1を除いては大型品である。1は押圧剥離による刃部加工が片側になされ、極めて丁寧な作りを示す。他の5点は、刃部が彎曲しているものが2点（2・5）、直刃を呈するものが3点（3・4・6）存在する。つまみ状の小突起は1がやや片側に扁してつけられるが、他の粗製石匙ではほぼ中央部に認められる。石材は1が黒曜石、2・5が粘板岩、3が砂質シルト岩、4が砂岩、6が凝灰岩と多彩であるが、黒曜石のものは小型精製、他の石材では大型粗製の石匙となる。

(6) 磨石・凹石（第114～118図、図版17）

磨石・凹石の出土量は打製石斧と共に非常に多く、図示した41点の他に欠損品など40点が存在する。これらの中には純粹に磨石又は凹石として使用されたものもあるが、その両者の機能を兼ね備えているものも少なくない。

磨石は平面形がほぼ橢円形となるものと隅丸長方形となるものが多く、断面形は四角柱状を呈するものと、扁平な橢円形を呈するものなどが認められる。大きさは拳大からそれよりやや大きいものが目立つ。磨石としての使用面は1面～5面であるが、磨り面は中央が膨らみをもち彎曲するものが多い。このことは磨石を長軸方向に使用したのではなく、長軸に直交する方向の運動が加わった結果であると理解される。

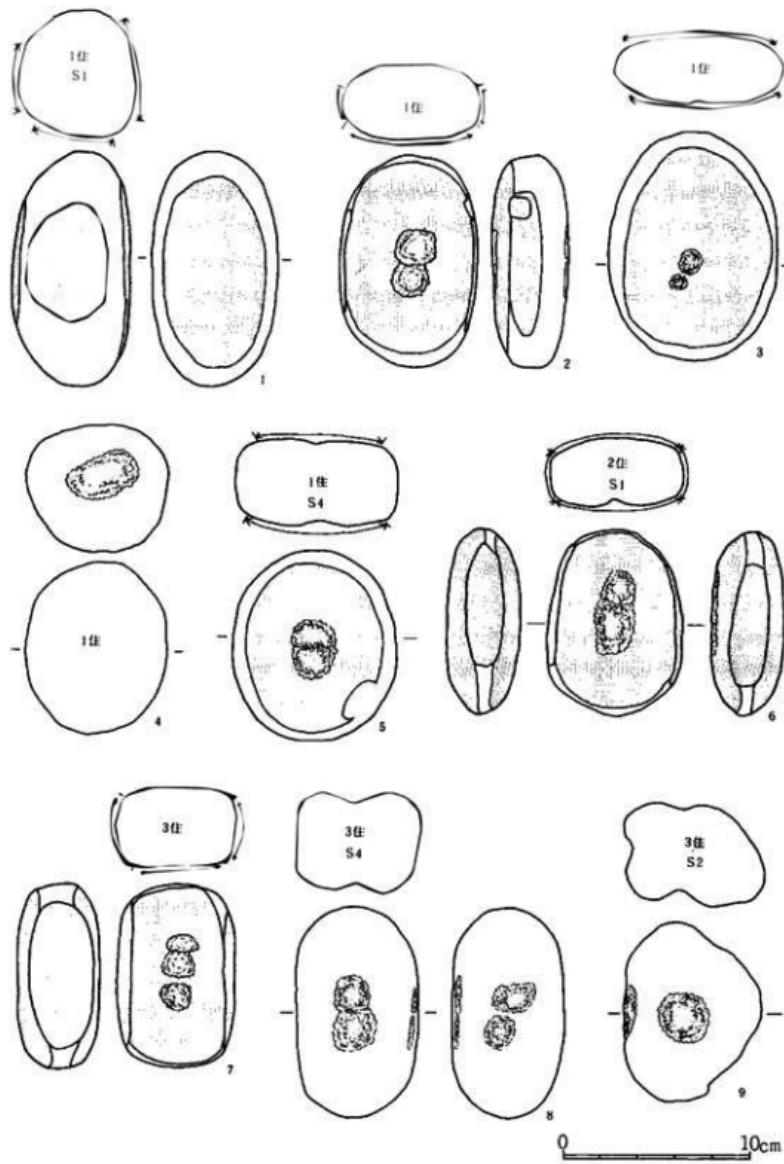
凹石で磨り面をもたないものは、図示したもの内15点存在する。形状は橢円形を呈するものが多く、打撃点と考えられる凹み部は1面に1～3ヶ所認められ、表裏の2面又は側面を含めた4面が使用されるものも少なくない。19はたびかさなる打撃によって、凹部が深い抉りとなっている。41は片面がやはり深い凹部となるが、その表面は19の打撃によるものとは異なり、なめらかな仕上げとなっている。その意味では他の凹石とは異なる石皿に寧ろ近い用途であったのではないかと考えられる。形態的には、新潟県沖ノ原遺跡や岩野原遺跡で出土した小型石皿と類似する。特に岩野原遺跡では、タッキー状炭化物が詰まった状態で出土しており、「捏ね鉢」または「型」として使用されたことが指摘されている。

磨石と凹石を兼ねたものは、図中12点存在する。磨痕のある面と凹み部は同一面にあるものが多く、「磨り」と「被打撃」の機能が結果的に同一の石器で行なわれていることから、この石器の多様な用途を窺うことができる、また、12はさらに長軸方向両端に抉りがはいり、石錘状を呈しているこの抉りを重視すれば、魚網錘や編物を編む際に使用された「おもり」としての用途も考えられよう。

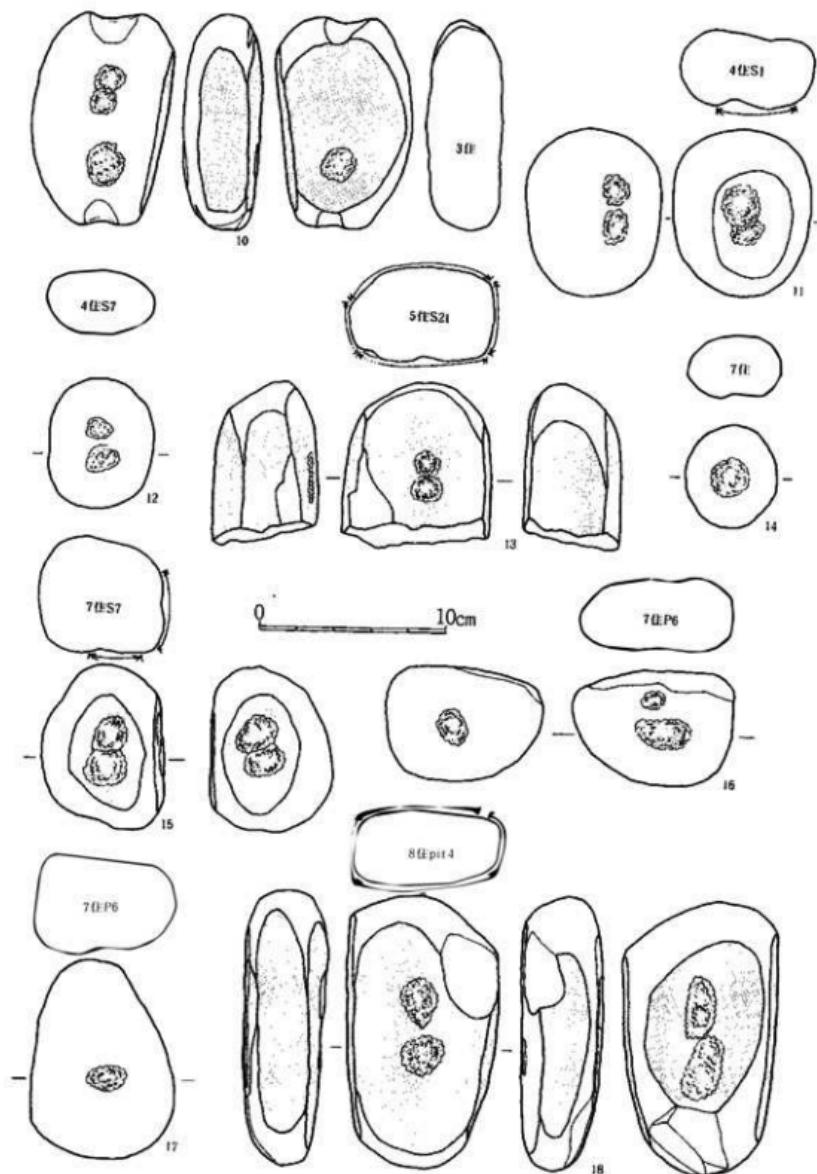
(7) 石皿・多孔石（第119図）

石皿・多孔石は、ほとんどが住居址内から出土している。1・3が石皿、4～9は多孔石、2は石皿と多孔石を兼ねている。

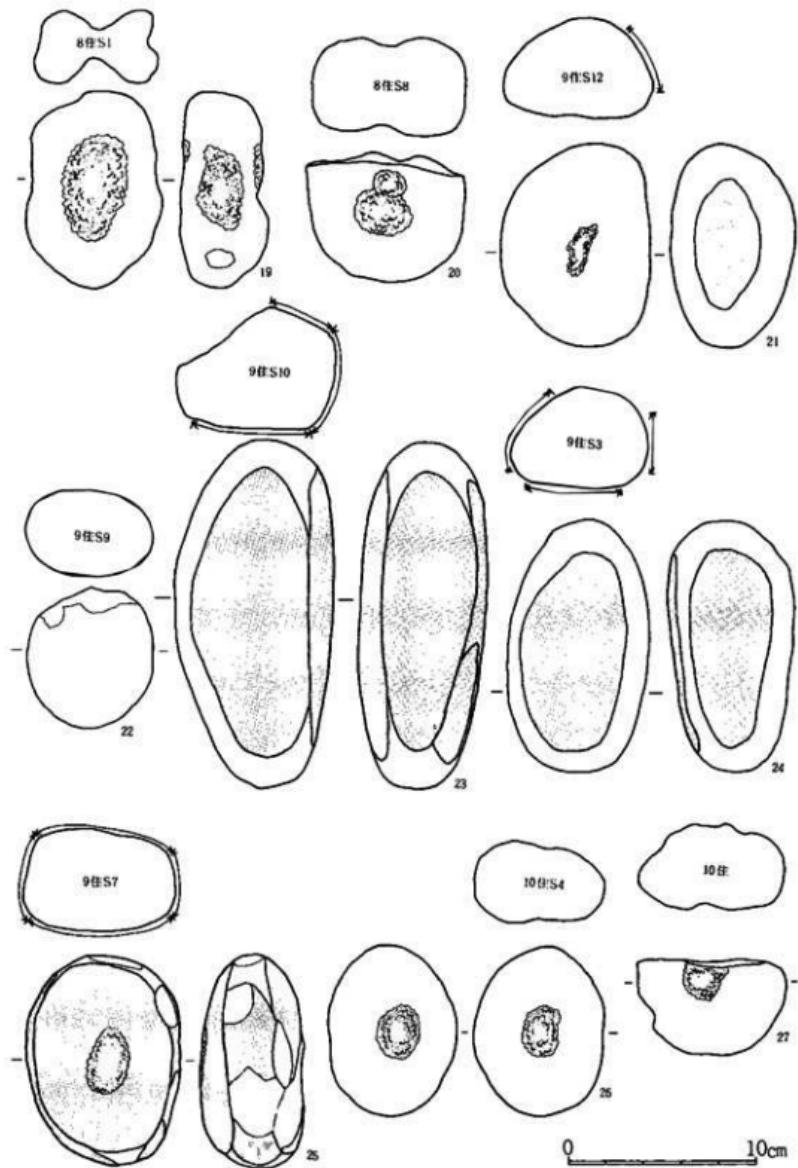
石皿はいずれも中央部が凹むものであるが完形品は1点も存在しない。多孔石は、人頭大とそれより小さなものがある。多くは表面がほぼ平らな扁平石を利用しておらず、表裏2面での使用が顕著である。このことは、打撃の際のたたき台として使用された可能性を示唆している。石材は、5・7がデイサイトで他は安山岩製である。



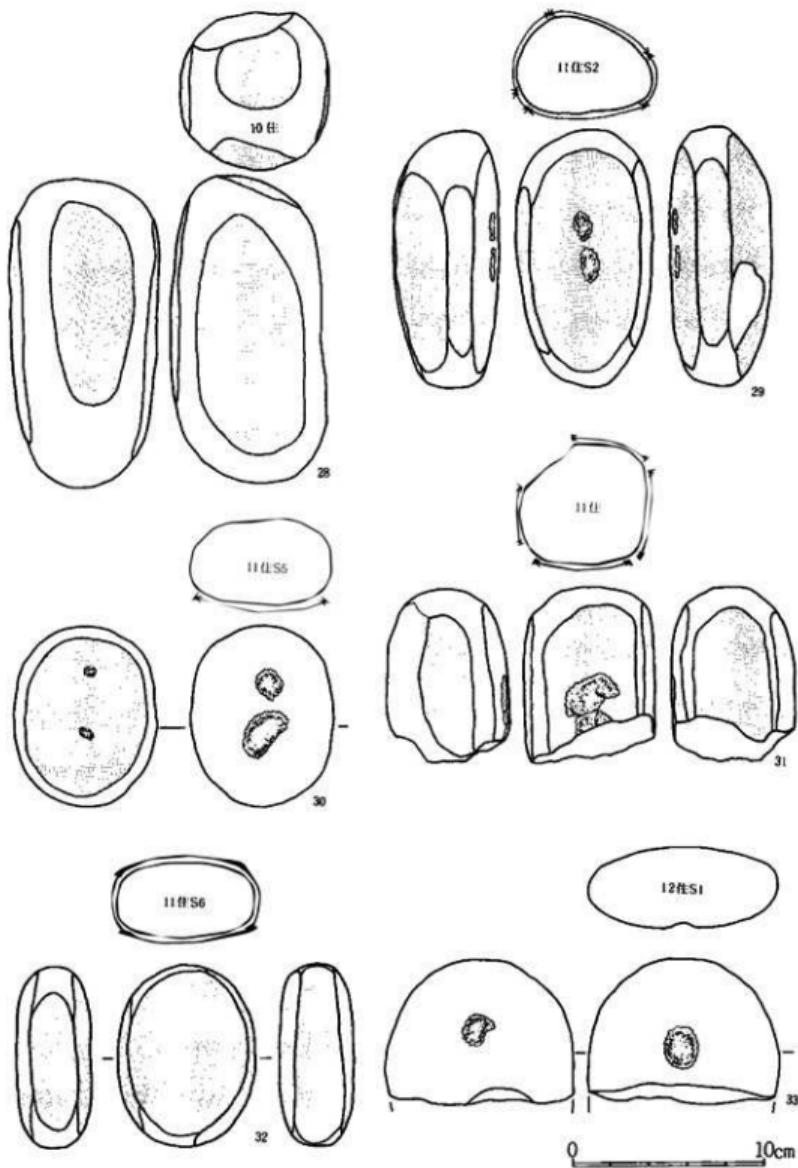
第 114 図 磨石・凹石 (I)



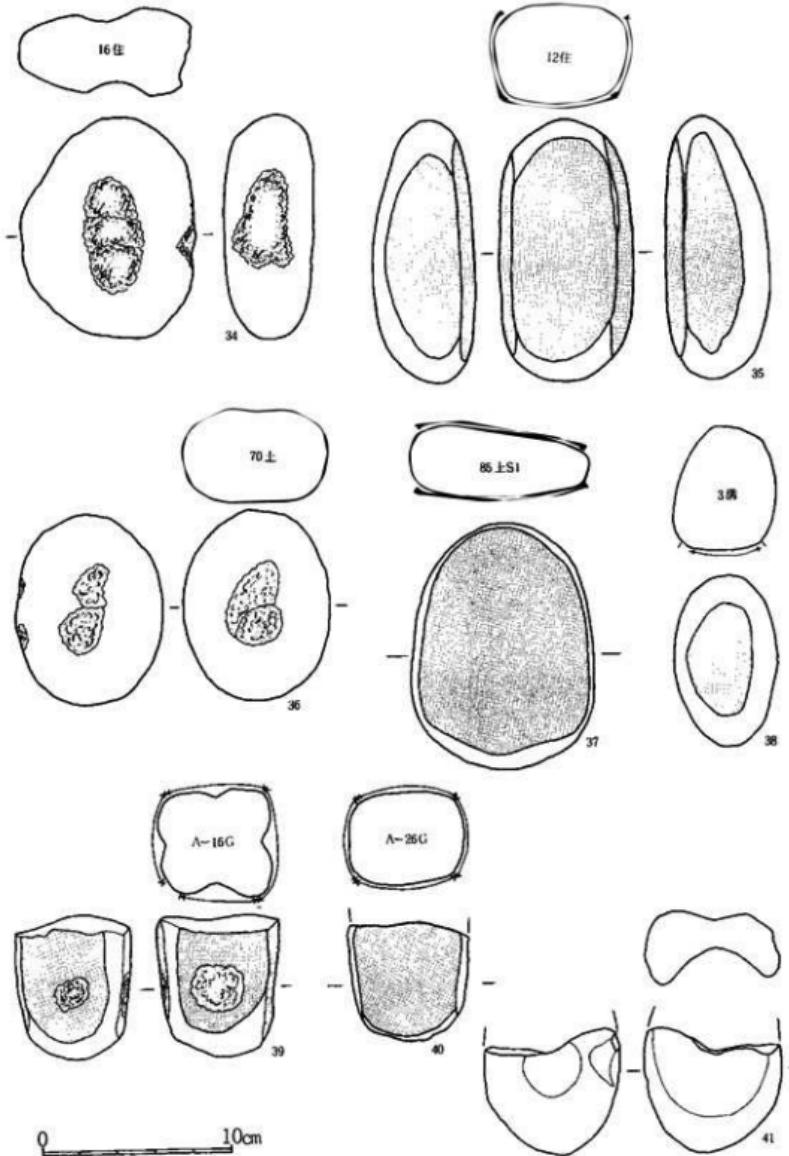
第115図 膜石・凹石 (2)



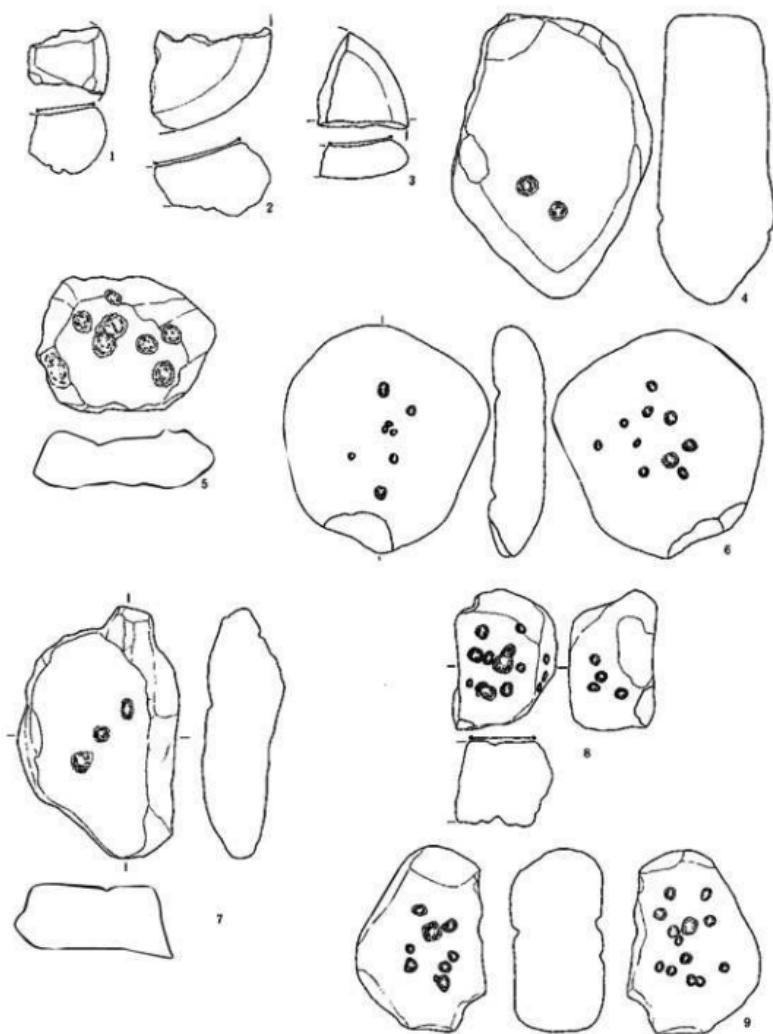
第 116 図 磨石・凹石 (3)



第117図 磨石・凹石 (4)



第 118 図 磨石・凹石 (5)



第 119 図 石皿・多孔石

表 4 磨製石斧一覧

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	石材
1	13 住	13.4	4.8	350.0	緑色凝灰岩
2	35 土	5.6	3.6	34.6	珪質岩

表 5 石匙一覧

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	石材
1	13 住	4.5	2.8	5.8	黒曜石
2	B区A-10グリッド	8.3	6.9	67.6	粘板岩
3	B区A-10グリッド	10.1	8.11	87.8	砂質シルト岩
4	B区A-10グリッド	9.9	6.6	62.9	砂岩
5	B区A-11グリッド	(10.6)	7.3	68.3	粘板岩
6	B区A-26グリッド	(6.9)	6.9	65.3	凝灰岩

表 6 石鎌一覧

番号	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	形態	石材
1	2 住	(2.2)	1.5	1.0	凹基無茎	黒曜石
2	13 住	(2.0)	(1.4)	0.7	"	"
3	5 住	1.8	1.5	0.7	"	"
4	5 住	1.7	(1.2)	0.3	"	?
5	5 住	2.2	1.5	1.2	"	黒曜石
6	5 住	3.6	1.8	2.1	"	"
7	5 住	1.8	1.6	0.5	"	"
8	5 住	(1.5)	(1.6)	0.5	?	"
9	7 住	2.8	(1.8)	1.0	凹基無茎	"
10	9 住炉	2.0	(1.3)	0.4	"	?
11	9 住	2.2	(1.5)	1.0	"	黒曜石
12	10 住	(1.5)	(1.3)	0.5	"	"
13	10 住	(2.3)	(1.5)	0.9	"	"
14	11 住	(2.0)	(1.6)	1.9	平基無茎	チャート
15	B区S-6グリッド	(1.8)	(1.6)	0.8	凹基無茎	黒曜石
16	48 土	(2.2)	(1.6)	1.3	"	"

表7 磨石・凹石一覧

番号	出土位置	長さ(cm)	重さ(g)	使用面	種別	石材
1	1 住	12.4	712	3面	磨	安山岩
2	"	11.2	516	3	磨	"
3	"	12.1	597	2	磨	"
4	"	9.2	638	先端	凹	"
5	"	10.1	637	2	磨・凹	"
6	2 住	9.9	364	4	磨	"
7	3 住	9.8	432	3	磨・凹	"
8	"	11.2	439	3	凹	"
9	"	9.6	442	3	凹	"
10	"	11.4	446	4	磨・凹	"
11	4 住	8.8	348	2	凹	"
12	"	6.9	498	1	凹	?
13	5 住	(8.8)		4	磨・凹	安山岩
14	7 住	5.4	108	1	凹	" " "
15	"	8.7	478	3	磨・凹	"
16	"	(6.1)	300	2	凹	"
17	"	10.6	518	1	凹	"
18	8 住	7.3	684	4	磨・凹	"
19	"	10.3	300	3	凹	内縁岩(?)
20	"	(6.8)	402	3	凹	安山岩
21	9 住	10.7	620	2	磨・凹	"
22	"	(7.4)	278			"
23	"	18.3	1284	3	磨	"
24	"	13.3	926	3	磨	"
25	"	11.2	732	4	磨・凹	"
26	10 住	9.1	358	2	凹	"
27	"	5.1	220	1	凹	変質安山岩
28	"	16.2	1578	3及び先端	磨	安山岩
29	11 住	12.4	685	5	磨・凹	"
30	"	9.4	470	2	磨・凹	"
31	"	9.0	542	4	磨・凹	"
32	"	9.6	440	4	磨	"

番号	出土位置	長さ (cm)	重さ (g)	使用面	種別	石材
33	2号竪穴	(7.6)	462	2	凹	安山岩
34	16 住	11.8	513	4	凹	"
35	12 住	13.8	736	3	磨	"
36	70 土	10.0	458	3	凹	"
37	85 土	12.9	640	2	磨	"
38	3号溝	9.0	498	1	磨	"
39	B区A-16 グリッド	(7.6)	306	4	磨・凹	"
40	"	(6.3)	318	4	磨	"
41	表 採	(6.6)	158	2		"

表 8 石皿・多孔石一覧

番号	出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)	使用面	凹の数	石材
1	4 住		(8.5)	410	1		安山岩
2	10 住		(12.6)	1018	1		"
3	11 住		(9.7)	450	1		"
4	5 住	30.4	21.2		1	2	"
5	9 住	14.6	19.0	1678	1	8	デイサイト
6	9 住	24.4	22.1	3676	2	表8・裏10	安山岩
7	9 住	26.8	17.2	4477	1	3	デイサイト
8	10 住	15.0	11.2	1632	3	裏11・裏4 側3	安山岩
9	表 採	19.8	14.0	4002	2	表9・裏13	"

第Ⅳ章 各 説

第1節 上野原遺跡の火山灰層

1. はじめに

本遺跡の位置する曾根丘陵には、左右の疊層（藤本、1975）の上位に Pm-1（小林ほか1967）を挟む褐色風化火山灰層（いわゆるローム層）が広く分布している。これらの火山灰層の研究は、宮沢（1964）、甲府盆地第四紀研究グループ（1969）、藤本（1975）らによつて從来からなされている。町田・新井（1976）の始良Tn 火山灰（AT）発見以来、ATは先土器時代の重要な鍵層として注目され、全国各地での分布が多く報告されている。しかし、甲府盆地周辺での報告例は今までほとんどない。今回は本遺跡におけるAT層準を見出すことを目的として重・軽鉱物分析を行なった。

2. 試料と方法

分析試料は本遺跡B区西端で採取されたPm-1よりも上位の風化火山灰試料24点である。ただしPm-1との層位関係は不明である。試料採取位置・岩質は第120図に示す。

分析方法は、適量の試料を0.063mmの分析篩（#250）で受けながら流水中で水洗し泥分を除去した。必要に応じて超音波装置で泥分の分散を計った。分析篩（#60）を用い、0.25～0.063mm粒径砂分を抽出し、秤量後テトプロモエタン（比重約2.96）を用いて重鉱物と軽鉱物とを比重分離し秤量した。分離した重・軽鉱物をリゴラックに封じ、偏光顕微鏡下で検鏡した。

対象砂分中の重鉱物と軽鉱物の割合は、砂分に対する分離後の重鉱物量（重量%）で代用した。重鉱物組成は重鉱物総数を基数とし、軽鉱物組成は風化粒子等を除いた火山ガラス・石英・長石・黒雲母の総数を基数として算出し粒数%で表示した。なお火山ガラスの形態は、遠藤・鈴木（1980）に従って分類した。

3. 分析結果と考察

分析結果は第120図に示す。

砂分構成では、上方に向って重鉱物量の漸減と軽鉱物量の漸増傾向がみられる。

N～II層では、A・A'型（いわゆるバブルウォール型）の無色火山ガラスが合わせて30～50%台の出現率を示す。ガラスの形態的特徴からこれらは2.1～2.2万年前に降灰したATに由来するガラスと考えられる。出現傾向からみてATの降灰層準はIV層最上部からIII層下部付近と推定される。

重鉱物組成ではカンラン石が優占する。カンラン石は、VI～IV層において60%台の高率を示し、III層最下部を境に上方に向って漸減し40～50%台となる。このカンラン石の変化曲線は、砂分中の重鉱物量変化と類似性がみられる。曾根丘陵地域の從来の重鉱物分析結果ではカンラン石が極めてまれにしか報告されていない。今回の分析で曾根丘陵の火山層中にカンラン石が

優占することから、地表下約1.2mの火山灰層は、カンラン石を含む玄武岩質テフラで特徴づけられ、富士火山に由来する可能性が極めて強い。これは風化火山灰層中に黒色・褐色スコリア片が含まれることとも一致する。なお、斜方輝石・单斜輝石・斜長石等の一部も富士火山起源の鉱物である可能性が強い。

A T層準、カンラン石の変化傾向、および暗色帶の存在は、富士火山東方の武藏野台地立川ローム層中の分析結果と極めて高い類似性を示している（遠藤・鈴木、1980；多聞寺前遺跡調査会、1982；東京天文台構内遺跡調査団、1983）。従って曾根丘陵で広く追跡できる暗色帶（本遺跡Ⅳ層）は、立川ローム層第2暗色帶（B B II）に対比されると考えられる。

V層は、転鉱物風化粒子やイディングス石化したカンラン石がやや多く出現していることから他に比してやや風化が進んでいる可能性がある。

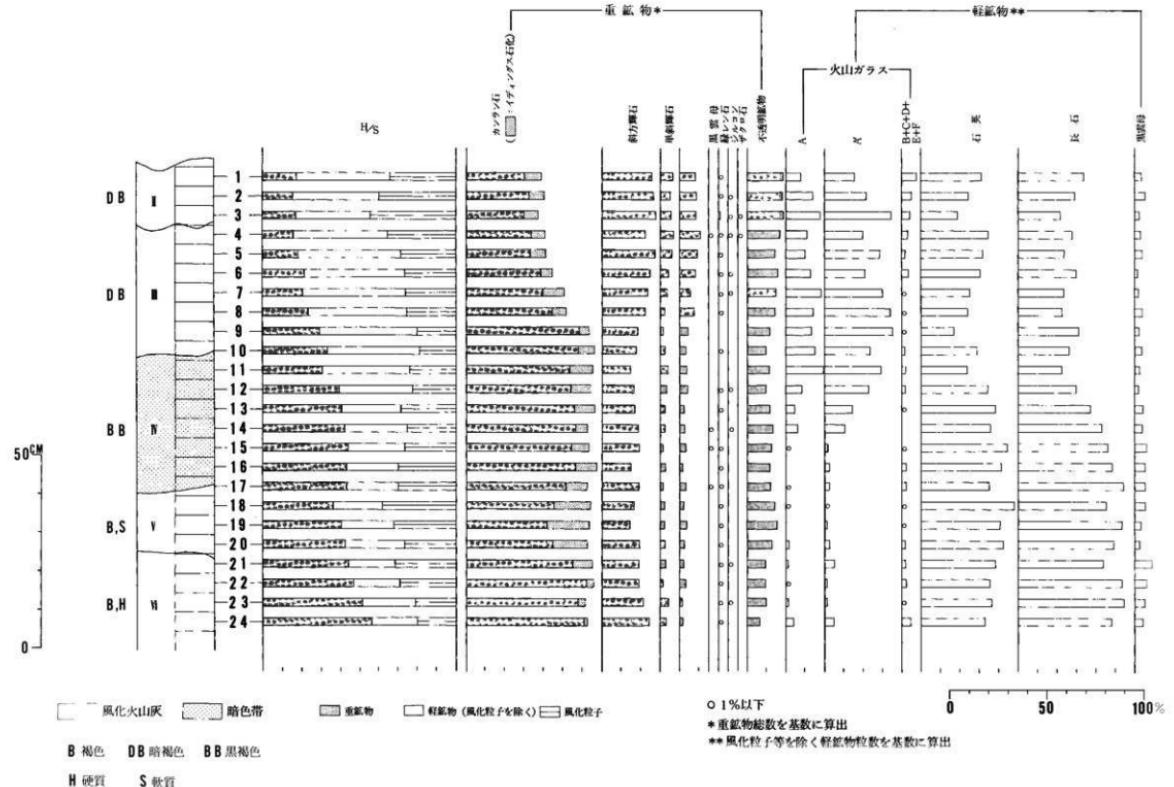
石英・角閃石・黒雲母等の一部は、後背地から運搬されてきた二次的堆積物に由来する鉱物と考えられる。またⅢ層上部～Ⅱ層に含まれるA・B型ガラスも、二次堆積あるいは上下方向の攪乱作用等によってもたらされた可能性が考えられる。

なお、藤本丑雄氏には貴重な御意見をいただき、資料等でもお世話になった。

（河西 学）

引用文獻

- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）「立川・武藏野ローム層中の火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』13, P.19-30
- 藤本丑雄（1975）「地質」『中道町史』
- 小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦（1967）「御嶽火山第一浮石層—御嶽火山第一浮石層の研究その1—」『地質学雑誌』73, P.291-308
- 甲府盆地第四紀研究グループ（1969）「甲府盆地の第四系」『地図研専報』15, P.254-258
- 町田洋・新井房夫（1986）「広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—」『科学』46, P.339-347
- 宮沢忠治（1964）「曾根丘陵の第四系」『山梨地学』6.
- 多聞寺前遺跡調査会（1982）『多聞寺前遺跡』
- 東京天文台構内遺跡調査団（1983）『東京天文台構内遺跡』



第120図 上野原遺跡、B地区試料1/4 ~ 1/16 mm粒砂中の重鉱物量 (H/S) 重・軽鉱物組成

第2節 繩文時代の集落の展開とその問題点

本遺跡は1971年に甲府・精進湖有料道路建設工事に伴って発掘調査がなされ、繩文時代前期末～中期を中心とした集落址の一部が確認された。その遺構は住居址22軒の他、多数の土塙、配石遺構、埋甕を伴うもので、繩文集落の全貌を推定できる本県でははじめての遺跡として注目を集めた。この調査の成果は、上野晴朗氏によって『中道町史』に概要が記されている。⁽¹⁾

今回の調査区域の中でもB区は、1971年時の調査区から10m程南側に並行して走っており、当初から同一集落を構成する遺構の存在が予測されていた。第Ⅱ章すでに記述してきたが、繩文時代の遺構はB区及びC区東端に集中し、東西約180mに及ぶ集落規模であることが明らかとなった。南北の範囲は1971年時の調査とE区の配石遺構の存在から約150mと推定される。集落形態は、住居址が環状または馬蹄形に巡るものと考えられ、住居址東端の更に東側に土塙、単独埋甕、集石等の墓域と推定される空間が存在する可能性が高い。配石遺構が集落の南端から検出されている事実を考慮すれば、あるいは住居址群の外側にそのようなゾーンが設定されていたのかも知れない。

今回の調査で発見された遺構は、住居址16軒、土塙95基、単独埋甕5基、集石遺構1基、配石遺構1基、竪穴状遺構2基、溝状遺構4本である。これらの遺構について時期別に分類し、集落の展開を明らかにしてみたい。遺構に伴う出土土器は、繩文時代前期前葉の土器が最も古く、諸磯式期、新道式期、藤内式期、井戸尻式期、曾利式期と続く。各遺構の帰属時期は以下のようになる。

I期：木島式並行期……………1号竪穴状遺構

II期：諸磯b式～c式期………2号住居址、10号土塙

III期：新道式期……………13号住居址、33号土塙、84号土塙

IV期：藤内式期……………5号住居址、12号住居址、18号土塙、19号土塙、35号土塙、41号土塙、50号土塙、58号土塙、

V期：井戸尻式期……………1号住居址、3号住居址、4号住居址、6号住居址、7号住居址、8号住居址、14号住居址、3号土塙、21号土塙、22号土塙、31号土塙、36号土塙、37号土塙、44号土塙、72号土塙、82号土塙、83号土塙、3号単独埋甕、4号単独埋甕、2号竪穴状遺構



第121図 1971年調査時遺構配置図（上野1975）



第122図 縄文時代中期集落の推定範囲 (1/5000)

VI期：曾利式期……………9号住居址、10号住居址、11号住居址、16号住居址、30号土塙、39号土塙、40号土塙、85号土塙、93号土塙、1号配石遺構、1号単独埋甕、2号単独埋甕、5号単独埋甕

以上で示したものの他に1971年時の調査では更に前期末の十三菩提式期の住居址が確認されているが、今調査では発見されていない。

(2) 縄文時代の遺構の中で最も古い前期初頭の遺構は、C区東端で確認された1号竪穴のみで、確認部分も僅かであるため果たしてこれが住居であったか否かは判断することができない。県内では一宮町から勝沼町に展開する积迦堂遺跡群や大月市原平遺跡、同じ曾根丘陵上では立石遺跡で該期の集落跡が発見されており、本遺跡の場合も数軒で構成された集落が存在した可能性は否定できない。II期とした諸磯b式～c式及び十三菩提式期の前期後葉の住居は、極めて散在的で2号住居址などは中期の集落から150m程はなれた位置に存在している。

これに対し中期になるとB区からC区東端にある程度継続的な集落が営まれてくるものと考えられる。遺構として確認されている時期では新道式期から藤内式期、井戸尻式期、曾利式期へと続く、中期中葉以降と言うことになる。該期になると住居址が密集し、住居址間の重複関

係が極めて著しくなるが、その密集地域は3号住居址・4号住居址・6号住居址と5号住居址・7号住居址・8号住居址・9号住居址、さらに10号住居址・11号住居址・13号住居址・15号住居址の3つのブロックに大きく分けられる。3号、4号、6号住から出土した土器はいずれも井戸尻式とされるもので覆土中の土器から新旧関係を明らかにすることはできないが、切り合ひ関係から6号→4号→3号の順に建てられたと推定される。5号、7号・9号住の間では、5号→7号・8号→9号の順序で築造されているが、7号と8号の新旧関係については判断しがたい。10号、11号、13号、15号住の間では、13号→15号→10号→11号住の順序となろう。

住居址以外の遺構では、土塙が藤内期以降急増してくる。また、井戸尻式期以降住居址東側に単独の埋甕が埋設されてくることも1つの特徴といえる。土塙の形態では平面形が椭円形を呈するものが最も多く土塙全体の45%を占め、つぎに円形プランが続く。断面形は皿状または円筒形を呈するものが大半を占め、袋状やフラスコ状を示すものは全く認められなかった。土塙内の遺物出土状況は、土器片を数点覆土中に混入するものが最も多いが、完形深鉢を逆位に埋設する例（18号土塙）や土塙底部に完形土器を横たえて埋設する例（35号土塙）など極めて特異な出土状況を示すものも存在する。このように一口に土塙と言われる遺構でもその機能は様々なものがあったのであろうが、土塙の形態的特徴と遺物の出土状況からそれを類推できるものは極めて限定されてしまうのが現状である。今後塙内に残る人為的遺物ばかりではなく、炭化物や炭化材などの自然遺物の検出により重点をおいた調査によって、土塙の機能別分類をそれぞれの遺跡で明確にしていく必要があろう。

以上、調査のなかで知りえた縄文集落の内部構造について記述してきたが、より広域的な交流関係を示す資料として一般的に言われる黒曜石などのほかに熔岩の存在が注目される。熔岩は、石皿などの材料として選択される例はあるが、本遺跡の場合石器の製品としてではなく親指大から拳大の塊として遺構内外から出土している。

18点の熔岩塊は、3号住で1点、5号住で3点、7号住で2点、8号住で1点、9号住で2点、11号住で1点、13号住で2点、14号住で1点、他はグリッドまたは表土出土のものである。これらの熔岩は、気泡痕や有鉱物などによって視覚的に4種類に分類されるが、同一火山の噴出物であっても流出時の条件によってその組成が異なるため自然科学的方法による産地同定は極めて困難である。しかし、本遺跡をのせる曾根丘陵から峠を1つ隔てた南側に位置する上九一色村などでは、家の周囲に配する石垣に熔岩を多用する例が現在でも知られており、地理的条件からも本遺跡出土の熔岩も富士山の起源である可能性は高い。富士山北麓に位置する郡内地方では富士火山と縄文時代の遺跡の増減が関連することが、奈良泰史氏によって論究されているが^⑤、甲府盆地で出土する熔岩の資料はこの火山地域との交流を示す物的証拠として重要な意義を持つものと考えられる。また、これらの熔岩が製品として存在する以上に、熔岩塊として出土する例が多いことからも、単なる石器加工の素材とは別な存在意味があったものと考えられる。今後、自然科学的な方法によって産地同定を確定していく必要があろう。

註

(1) 上野晴朗「上野原遺跡」『中道町史』上 pp 263 ~ 350 1975

- (2) 1971年調査の第4号住居址
- (3) 奈良泰史 「山梨県東部（桂川流域）縄文時代遺跡の研究－富士山の火山活動と遺跡－」
『山梨考古』第14号 pp14～24 1984 山梨県考古学協会

図 版



上野原遺跡全景航空写真

A 区全 景



B 区作業風 景



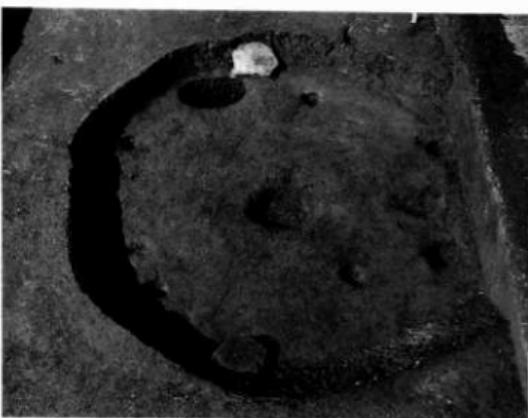
C 区全 景



1号住居址と同址炉岡



2号住居址と同址板状礫出土状況



3号・4号・6号住居址と3号住炉址





5号・7号～9号住居址



7号住居址



8号住居址と同址炉址



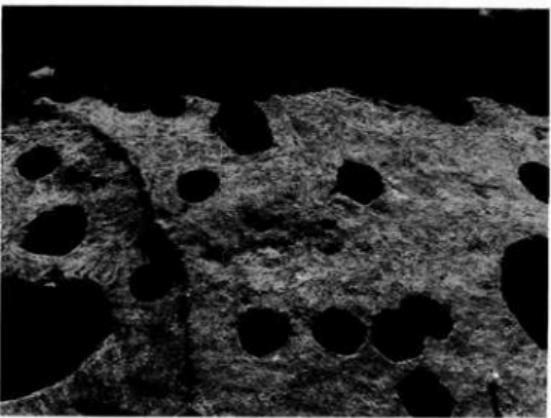
9号住居址と同址炉址



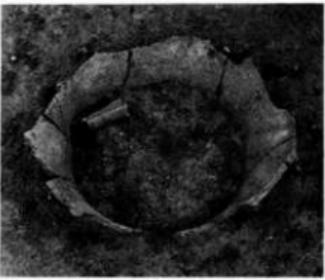
11号住居址と同址炉址

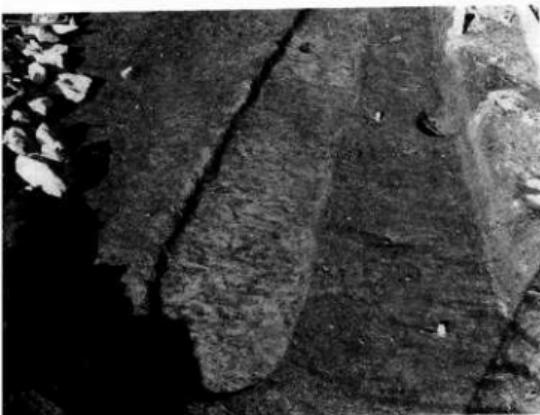


12号住居址と同址炉址



13号、15号、16号住居址と13号住炉址

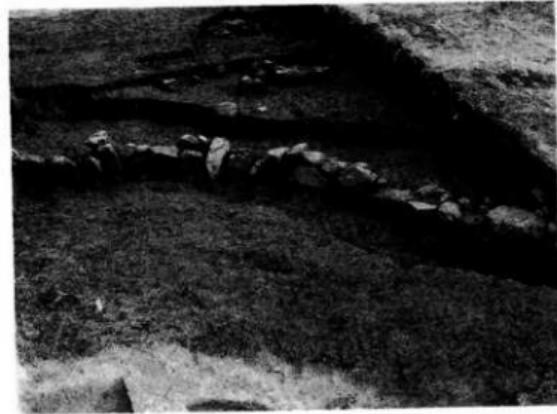




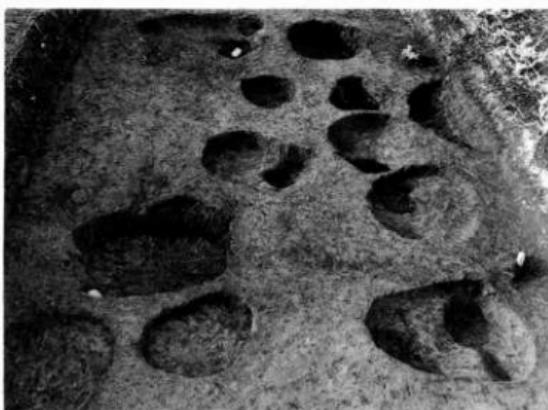
1号沟



2号沟



3号沟





36号・37号土塙



40号土塙



39号土塙



5号埋石



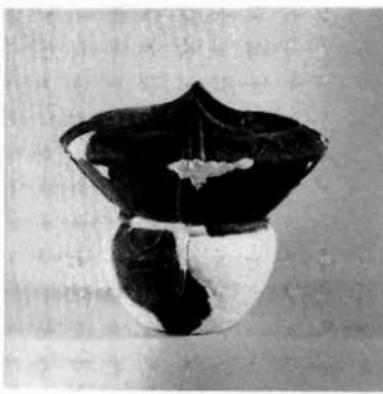
1号集石



1号配石



4号住居址出土土器



5号住居址出土土器



5号住居址出土土器



6号住居址出土土器



7号住居址出土土器



8号住居址出土土器



11号住居址出土土器



13号住居址埋甕炉土器



18号土塚出土土器



19号土塚出土土器



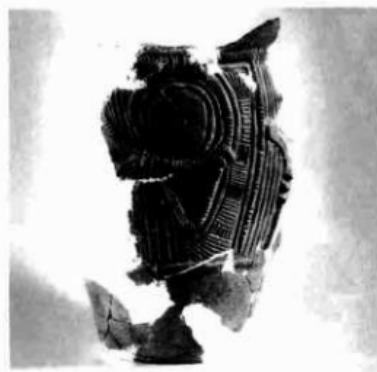
23号土塚出土土器



30号土塚出土土器



35号土坡出土土器



36号土坡出土土器



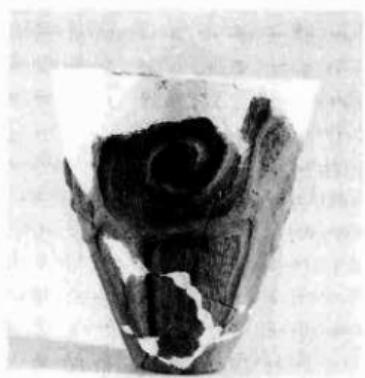
37号土坡出土土器



39号土坡出土土器



40号土坡出土土器



85号土坯出土土器



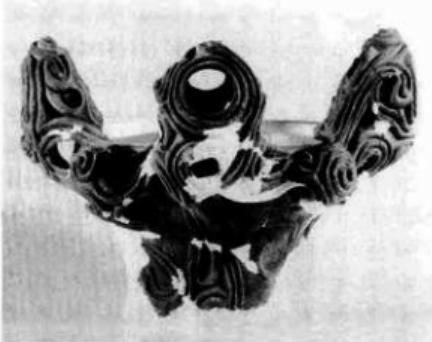
1号单独埋甕土器



3号单独埋甕土器



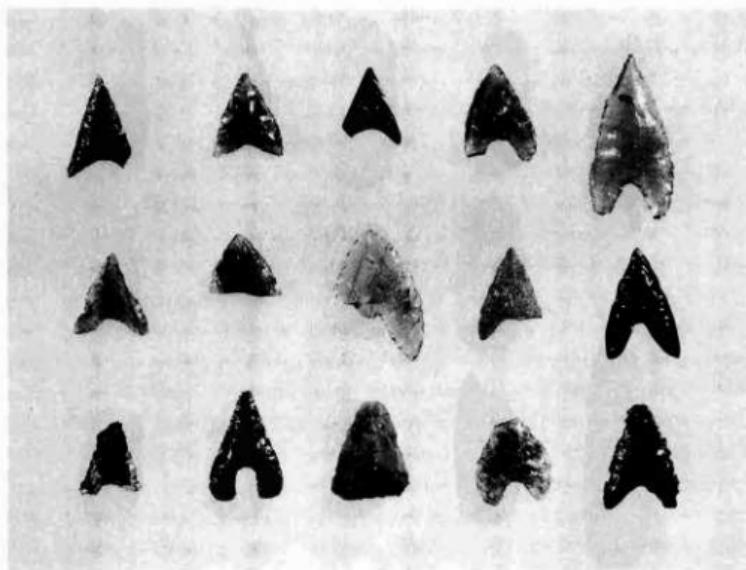
4号单独埋甕土器



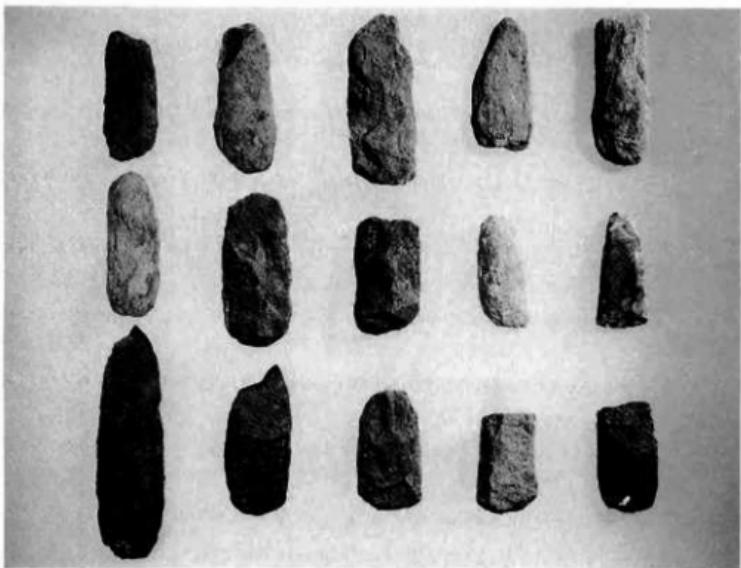
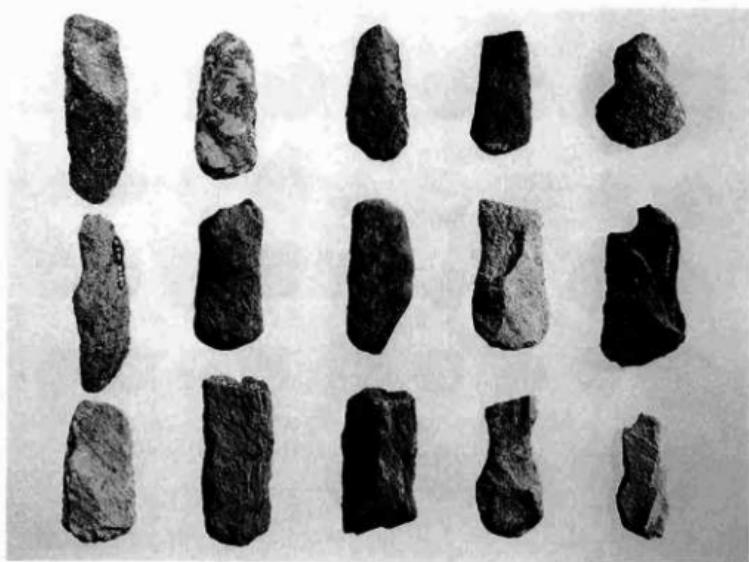
5号单独埋甕土器



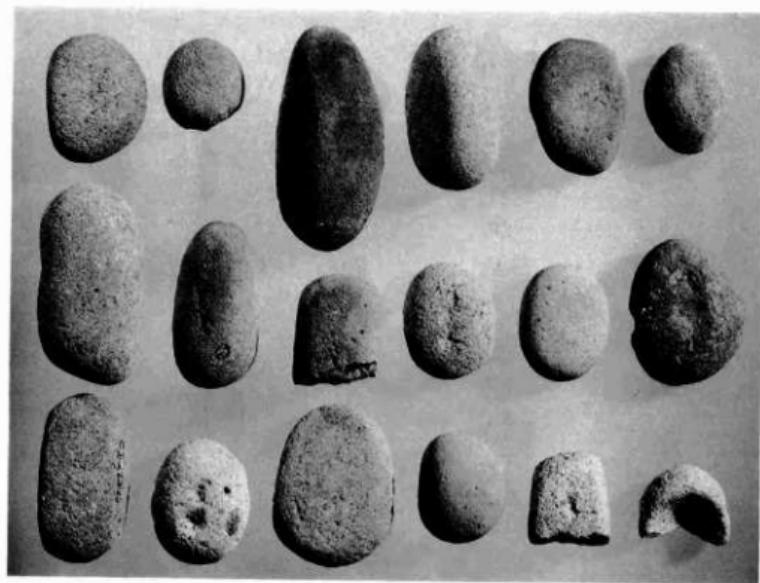
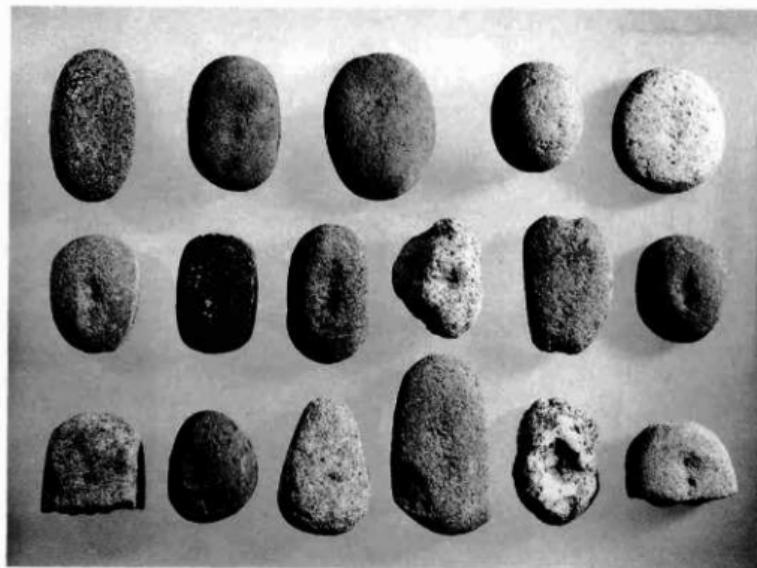
土 製 円 簡



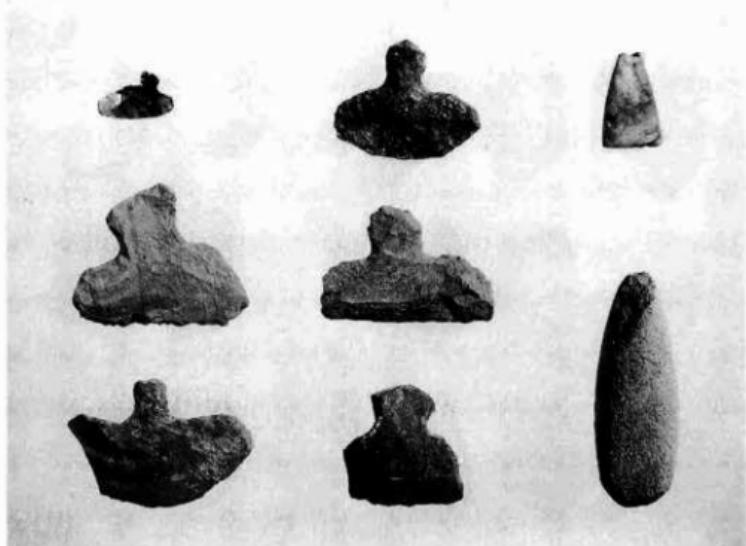
石 鏃



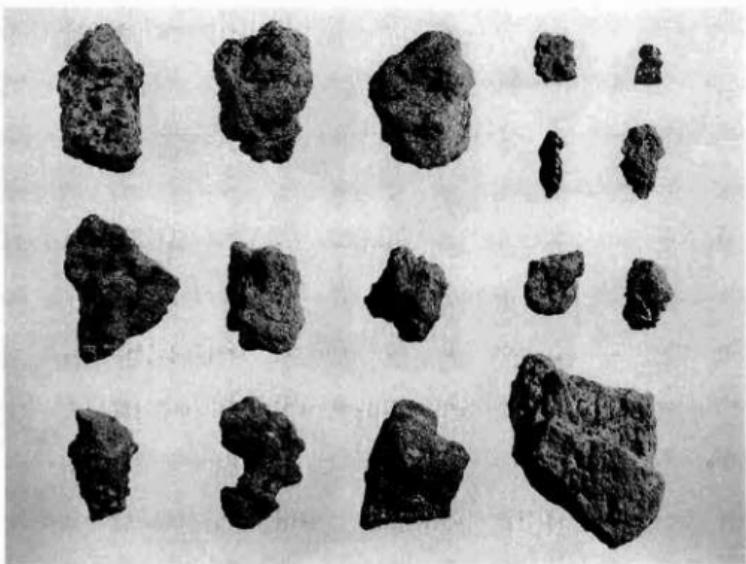
打 製 石 斧



磨石・凹石



磨製石斧·石匙



砾 岩



18号土城出土土器展開写真



35号土城出土土器展開写真

ち こ う じ
智 光 寺 遺 跡
きつ つけ け 遺 跡

目 次

例 言

智光寺遺跡、切附遺跡について	103
----------------	-----

智光寺遺跡目次

1. 調査の経過	104
2. 遺跡の位置とその環境	106
3. 遺構と遺物	108
滝河原2号墳 (イ) 墳丘 (ロ) 石室 (ハ) 遺物	
4. おわりに	112

切附遺跡目次

1. 調査の経過	116
2. 遺跡位置とその状況	116
3. 遺物	117

例 言

1. 遺跡名は地元の慣例に従って、智光寺=ちこうじ 切附=きっつけ と呼称する。
2. 切附遺跡の位置とその環境等共通した内容については智光寺遺跡の項を参照されたい。
3. 発掘調査及び整理参加者は以下のとおりである。（あいうえお順、敬称略）
伊原寿美 岩沢白 北野みつる 橋田満子 橋田保雄 河野雄二 小林佐津恵 斎藤さ
つき 佐野孝枝 田中春美 千野とよじ 中柄喜代子 中村あつ子 七沢五枝 三神昇
宮川知 宮川すみ子 宮川好子 渡辺征子 渡辺上 高野俊彦
4. 鉄器の保存処理は当埋蔵文化財センターで文化財主事保坂康夫が行った。
5. 発掘担当、筆執、編集は文化財主事森和敏があたった。

智光寺遺跡 切附遺跡について

東八代郡境川村藤岱字智光寺、切附、滝河原で施行される笛吹川農業水利事業は、幅約7m、深さ約5mを掘削し、国営管水路副幹線を埋設する工事である。埋設溝の片側には幅約5mの工事用道路を仮設するが、発掘対象地域には入らない。

藤岱地内の上部にある智光寺遺跡と切附遺跡はわずかに離れているだけであるが、遺跡の時期は後述するように違っている。工事予定路線内の発掘事前調査段階においては次のようにであった。

智光寺遺跡A区（県道鶴宿一中道線に沿って西側）では土師器及び土師質土器と須恵器が若干散布しており、B区（滝河原2号墳）は発掘予定区域に入っていたが、発掘中に破壊された古墳の一部が残っている可能性があることがわかったので、農林省関東農政局笛吹川農業水利事業所と県教育庁文化課と協議したうえで、試掘に至ったものである。

切附遺跡では中期縄文式土器と須恵器が若干散布しており、また30m北には破壊された古墳があり、そこに有頭石棒や凹石などの石器が多量に集められていて、縄文時代中期の遺跡があることが、ほぼ確実にあると考えられた。このような状況であったので、1パーティで同時に発掘を行うこととし、文化課に発掘通知を提出し、10月15日に笛吹川農業水利事業所と最終協議を現地で行い17日に試掘を開始した。

智光寺遺跡と切附遺跡の概要は次のとおりである。

智光寺遺跡A区では小さい2基の配石遺構と思われるものがあつただけで、遺物も少なかつた。B区では破壊された後期古墳の石室の側壁と墳丘の一部が検出された。

切附遺跡では遺構が検出されなかつたが、鉄斧及び鉄鎌と管玉が出土したので、後期古墳が破壊された後地であったと推定出来たのである。

発掘後、昭和60年12月25日に遺物発見通知を石和警察署長宛て、文化課に提出した。整理は60年度内に済ませた。なお遺物は埋蔵文化財センターで研究、教育のために保管、管理している。

智光寺遺跡

1. 調査の経過

発掘調査期間は昭和60年10月17から同年12月11日までである。

発掘面積はA区880m²の予定であったが、発掘途中で、B区（滻河原2号墳）の420m²を追加したので合計1,300m²となった。B区を発掘するに至った経過及び滻河原2号墳を破壊した当時の状況等聴取したことを次に記しておく。

10月23日に2号墳のあった藤袋字滻河原410番地の1の畑を所有している田中英三氏からこの畑で耕作中に垂飾品等を拾ったことや以前古墳があったが破壊したこと、その際後述する遺物が出土したことなど聞き取った。また2号墳の西約15mの位置にも1基あったらしいこと、この2基を親子塚またはふたご塚と呼称したこと等も話していただいた。ただし西側にあった古墳が破壊された時期は不明である。

この滻河原2号墳のある場所は管水路埋設予定地外であるが、土地所有者が施工者に削平させることを条件としたため、2号墳が破壊されることになったので、発掘調査を行うことになったものである。

次に発掘調査の経過を記す。

A区：17日に管水路埋設路線に対して直角に巾1mのトレンチを約15mおきに8本掘り、表土の深さを調べてから表土だけをバックホーで除去した。その後人力によって掘り下げ、大小の礫まじりの氾濫層からローリングして磨耗した平安時代後期の国分寺の土器片や若干の須恵器片、中期繩文土器片が出土し、10月下旬に配石遺構と考えられるものを疊るやや少ない層で検出した。トレンチを更に掘り下げ、深さ1mに達したが氾濫層が続いており、遺構の包含層はなかったので、11月12日に発掘を終了した。

B区（滻河原2号墳）：切附遺跡の発掘を一部で続けながら、11月12日に開始した。滻河原2号墳の命名は、これが所在する小字の「滻河原」を冠頭に付し、「2分」は既に山梨県遺跡地名表（昭和54年 山梨県教育委員会）と境川村誌（昭和53年 境川村）で報告されている滻川原古墳があるので、これを2分とした。

5本のトレンチで試掘を始めたところ、2日目に集石列と石室の東側壁の上部を、続いて墳丘を形成する積石を検出した。集石列は石室の南側で合計10列検出し、いずれも方向は北東～南西に向く。長さは1m～4m、巾は30cm前後、高さは20cm前後で、拳大の石を主に使って、乱雑に積み上げて、墳丘を形成する積石の上に構築されている。

11月下旬に石室内の土を除去し、石室の側壁や天井石が石室内に落されていたのでバックホーで外へ搬出し、また石室の南側で石を埋めた範囲を検出した。これらの作業と同時に墳丘の積石を露出させまた墳丘にトレンチを掘り、墳端や墳丘の構築状況を確認した。石室の調査がほぼ終了し、石室の入口西側から延びる2本の列石と墳丘の積石全体を検出した時点（12月8日）で空中写真撮影を行った。最後に石室や墳丘の一部を取り除いて、その下層を調査して発

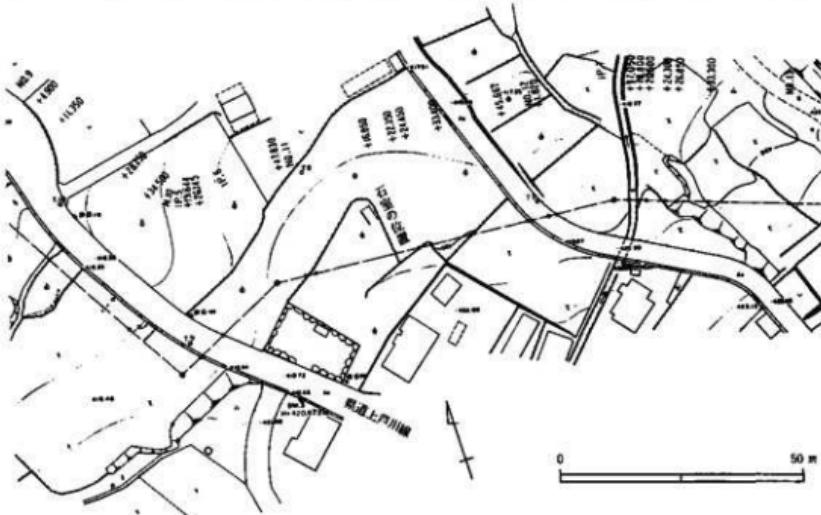


掘調査を終了した。

2. 遺跡の位置とその環境

所在地は東八代郡境川村藤岱地内の字智光寺 335 番地とその付近（A 区）、及び滝河原 410 番地の 1（B 区＝滝河原 2 号墳）である。遺跡は集落の上方に位置し、県道鶴宿一中道線の A 区は西側に、B 区は東側にある。その 50 m 東を境川が西流し、境川は笛吹川に入り、さらに下流で釜無川と合流して、富士川となり太平洋に注いでいる。遺跡からは甲府盆地を越えて西に赤石山脈が、北に八ヶ岳と駒ヶ岳を眺望することが出来る。この地形は甲府盆地の南東側に連なる曾根丘陵の奥まったやや北側に傾斜する境川の氾濫原で、すぐ上流は御坂山脈の峡谷となる。地質は 1 m くらいの L1 石を包含する砂礫層が深さ数メートル堆積する（水管埋設工事の状況）。しかし西に隣接する切附遺跡付近から南西はローム層となるなど付近は起伏のある複雑な地形である。

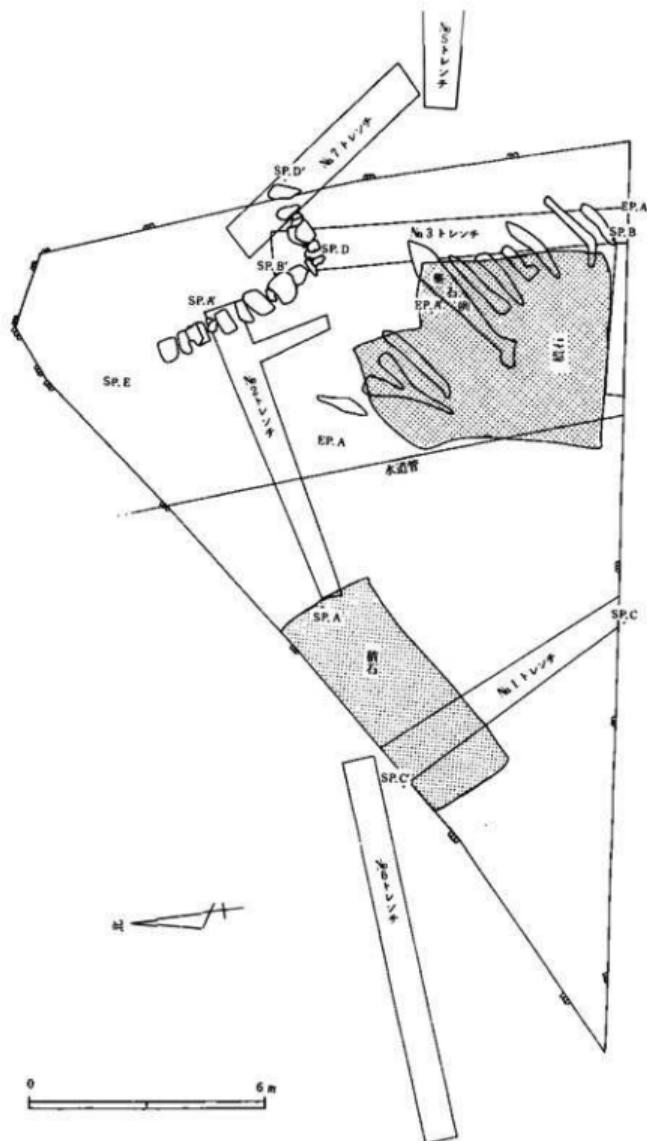
滝河原 2 号墳は 6 世紀後半から 7 世紀初頭に比定される後期後半に築造されたと考えられる横穴式石室をもつ円墳であるが、付近には同様な後期円墳が確実なものだけでも 4 基知られている（第 1 図）。滝河原 2 号墳の 30 m 南には完全に破壊されてしまった無名墳が、100 m 北東には横穴式石室だけが残っている滝河原塚古墳が、北西 130 m 切附遺跡の北には昭和 50 年頃完全に破壊された子の神古墳（天井石と思われる巨石が 1 個残存。馬具、土器等が出土したという）が、東 200 m には墳丘も石室も残っている毘沙門塚古墳がある。なお滝河原 2 号墳から数メートル離れた場所に高さ 2 ~ 3 m、直径 5 ~ 6 m の古墳が 2 ~ 3 基あったと言うが、今回



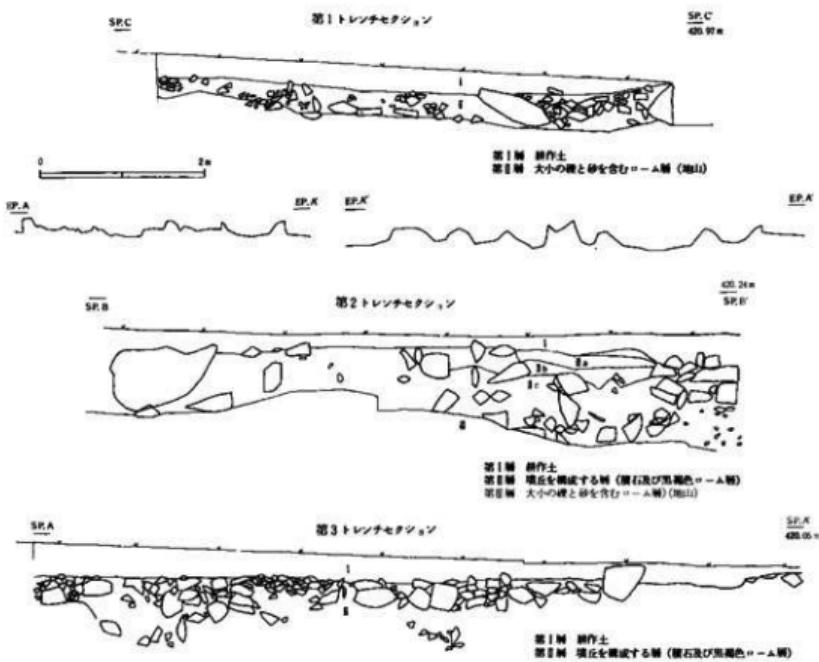
第 2 図 智光寺遺跡付近図

の発掘ではその痕跡は確認出来なかった。またこの畑で表面採集された遺物については後述するとおりである。

古墳時代後期の文化圏の中心は、盆地南西部から北東部へ移動したと考えられてはいるが、後期の古墳群は境川村内でも、小山、小黒坂地内や蛇山などに確認されている。しかしこの時期の境川村の集落遺跡は発掘調査された手古松遺跡³²、薊在家遺跡³³や小山の遺物散布地はあるがあまり多くは知られていない。本古墳の付近で最も近い薊在家遺跡でも約1,000m離れているが、分布調査が未だ充分なされていない藤岱の集落内には該期の遺跡がある可能性はある。



第3図 智光寺遺跡籠河原2号墳遺構図



第4図 智光寺遺跡瀧河原2号墳トレンチセクション図、エレベーション図

- 註1. 瀧河原古墳、子の神古墳、毘沙門塚古墳については「境川村誌」等に報告されている。瀧河原古墳の平面プランは右側に袖があり、側壁はやや崩れぎみである。
- 註2. 「妻神遺跡・真福寺遺跡・手古松遺跡・市川北遺跡・勝沼氏遺跡・藤塙遺跡」山梨県教育委員会、関東農政局笛吹川農業水利事業所 1985.3による。
- 註3. 「辻遺跡と薗在家遺跡」 山梨県教育委員会 山梨県遺跡調査団 1974.3による。

3. 遺構と遺物

A区には小さい配石と思われるものが二基、B区には瀧河原2号墳が検出された。前者は配石か否か疑問があるので、主に後者について記述する。

瀧河原2号墳

付近は段々畑になっていて、この古墳を検出した場所も北と東に石垣のある果樹園で、墳丘状の地形は全くむられない平坦地であり、平な畑にするために埋められた墳丘の一部分と、削平する際に破壊をまぬがれた石室の右側壁の下部及び閉塞石の下部だけが残存していた。

④ 墳丘

古墳は畑にするために、明治時代末か大正時代初めに破壊された。当時墳丘は高さが2~3m、直径が5~6mあり、上には40cmくらいの石がゴロゴロしていたという。



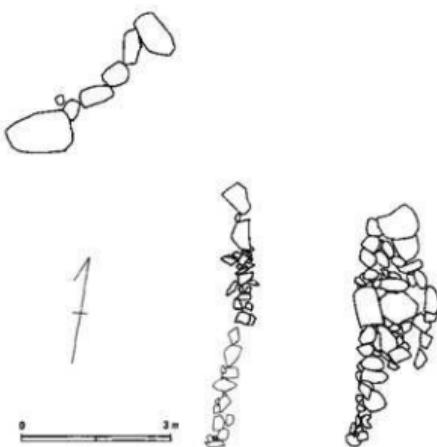
第5图 智光寺遗址龙河原2号填全体图

石室の西から南にかけて、4.5 mから2.5 mの範囲に、礫層（積石）と土層で構築された墳丘基底部層が1.2～0.3 mの深さで検出された。第2トレンチでは石室の根石より60cm下まで掘り込まれており、地固めされた上に10cm～20cmの石が敷かれて、その上に石室の根石が置かれている。石室から離れる程地山層は上り、4 m離れると根石と同じ高さになる。

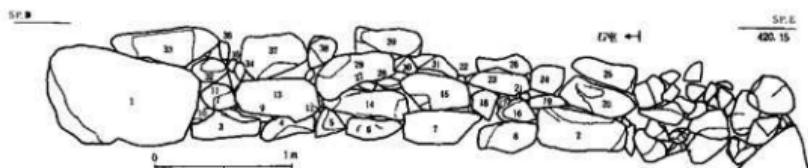
（第4図）

石室の西側と北側では、小角礫から40cmくらいの大きい角礫までがローム腐食土中に入っている、その上に30cm～40cmの石が積まれている。さらに南へ2 m～9 mの範囲には不整形な方形に、また西へ7 m～13 mの範囲に長方形に30cm～40cmの大きさの石が埋められて（積石）いる所がある。積石の下は固められたロームの黒褐色腐食土があり、その下に地山が続いている。この状況から考えると、ローム黒褐色腐食土との互層になっていたようである。これらの積石が離れすぎている所もあって、これらが全て墳丘を構成しているとは思えないがその他の施設の一部であることも確かであろう。積石を清掃して表面を観察すると、乱雑に投げ入れてあるようであるが、3～4個所に直径1～2 mの円形に並べられている所がある。石室の西側には人頭大の石が多い部分、人頭大の石の平の面を上にして敷いてある部分、拳大の小礫の部分などがある。またその南側では表面とその下部（黒褐色腐食土層との境）は離れる程やや下に傾斜している。また第6図のように積石の下には石室に向って2列の列石があり、その間は約2 m離れていて、固められた黒褐色腐食土層になっている。この列石は石室を積む石を運び上げる施設であったのかもしれない。

墳丘の直径は積石とセクションの状況から推定すると18 m前後であろうか。高さは全く推定出来ない。



第6図 智光寺遺跡淹河原2号墳列石図



第7図 智光寺遺跡淹河原2号墳石室側壁図（数字は積んだ推定順序）



第8図 智光寺遺跡瀧河原2号墳
閉塞石セクション図

(口) 石室

側壁から推定すると長さが3.8mであるが、巾や高さ、平面形状を推定する資料は検出出来なかった。耕作土を約20cm除去したところで西側壁の一部が露出した。側壁は高さ約1m前後2~3段が残存、閉塞石は高さ約80cmくらいが埋没してい

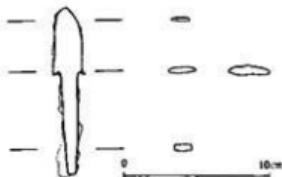
たが、他に壁や底の床面は全く残っていなかった。石室内は側壁の最下部より10cm~20cm深く乱掘されていたので発見された遺物はわずかである。石室の中に落された石は、天井石が2個（長さ170cm×巾70cm×厚さ40cmと160cm×80cm×40cm）と奥壁石1個（110cm×120cm）、側壁石多数（50cm×40cm~100cm×50cm）である。側壁を積んだ順序を観察し、崩した手順によつて付したもののが第6図である。先ず入口と最奥の根石を据えて石室の長さを決め、その間に根石を入口方向から奥に向つて並べ、2段目も入口方向から奥へ、3段目は奥方向から入口方向へと積み、裏込の石を入れている。基本的にはいわゆる重箱積みで、上下の石の面を合せて安定した置き方をしているが、中には小石を咬ませて支えているところもある。側壁の下は土を突き固め、その下には礫を敷き、さらにその下約50cmは小礫を混入した土でよく地固めがなされていて堅固である。

閉塞石は内側に面を揃え、やや乱雑に積んでいる。この下と前庭部は非常に踏み固められている。

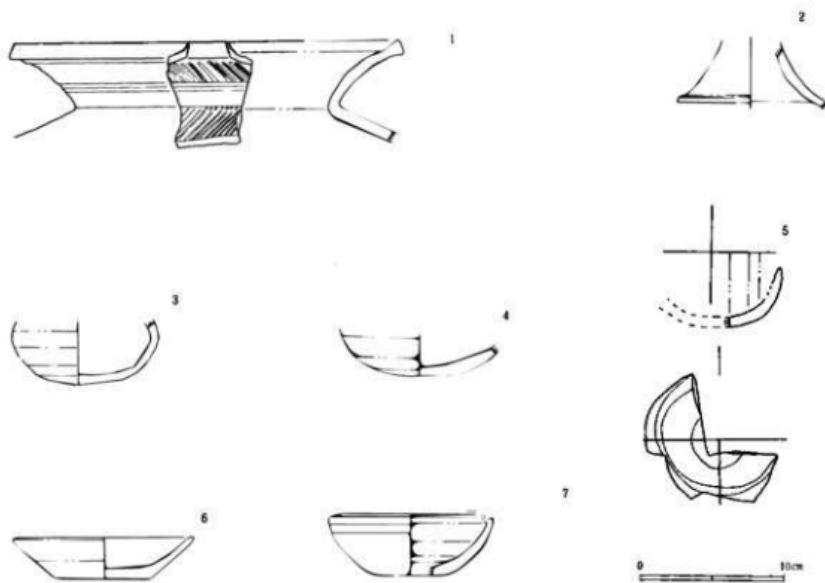
(ハ) 遺物

鉄鎌1、灰釉陶器小片1、須恵器片12が出土しただけである。他に瀧河原2号墳のある畠で垂飾品が表面採集されている。

鉄鎌と灰釉陶器小片は石室の推定床面より15cm~20cm下層から出土した。攪乱によって混入したものと考えられ、この古墳の時期決定が出来る唯一の遺物である。鉄鎌は6世紀末から7世紀初頭に比定される。須恵器は閉塞石の中や墳丘中から出土したが実測可能なものがなく、時期決定も困難である。垂飾品は地主の田中英三氏が昭和50年頃古墳のあった西側で耕作中拾ったもので、瑪瑙製と思われる勾玉5、碧玉製管玉1、水晶製切子玉1である（同氏保管）。また石室を破壊した際に、刀約10振、くつわ（青銅があり金箔だったという）、勾玉約30個や土器片が出土したというが現在その所在は不明である。



第9図 瀧河原2号墳出土鐵器



第10図 智光寺遺跡出土遺物 ($S = \frac{1}{4}$)

4. おわりに

工事によって完全に破壊される古墳であったので、こわしながら遺構の構造や構築方法をも調査したのであるが、前述のように全壌に近いものであったので、全体像は把握出来なかった。しかし一部ではあるが、石室や埴丘構造が明らかになり、構築のためにつくられたとみられる施設などが検出できたことは幸であった。これらは今後類例が発掘されなければ確定する域に達しないが、今まで比較的報告例が少ない構築方法などの例になるかもしれない。今後古墳の発掘調査の課題であろうと思われる。また滝河原2号墳の発見を契機に付近にも数基の古墳があったことがわかり、一つの古墳群であったことも確認出来た。本県には未だ知られていない後期古墳群があることも示唆するものであった。



遠 景



灘河原 2 号墳



灘河原 2 号墳

國版 1 智光寺遺跡



澇河原 2 号墳石室側壁図



澇河原 2 号墳 列 石



澇河原 2 号墳 石 室



澇河原 2 号墳 開 塞 石



澇河原 2 号墳 円形石積

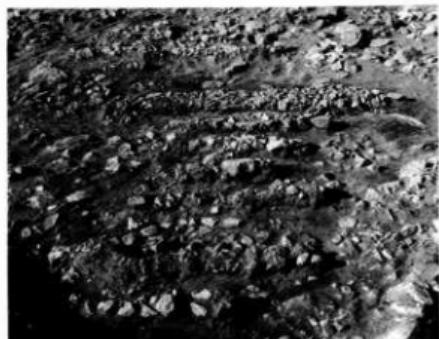


澇河原 2 号墳 円形石積



澇河原 2 号墳 円形石積

図版 2 智光寺遺跡



集石列 (B区)



鐵錐
(瀧河原2号墳)



1号配石遺構 (A区)



垂飾品
(B区表面採集)



発掘参加者



土師質土器 (A区)

図版3 智光寺遺跡

切附遺跡

1. 調査の経過

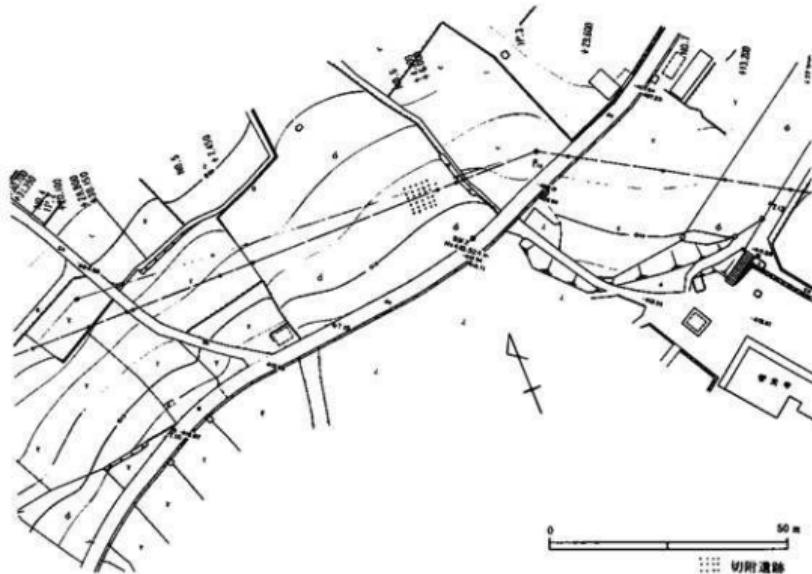
発掘調査期間は昭和60年10月18日から同年11月22日までである。

18日に造構の包含層を把握するためにトレッセを掘り、バックホーで表土を除去しておき、本格的な発掘は11月11日から始めた。発掘区の東側寄りの狭い場所において、表土下約30cmから60cmの間で、中期縄文式土器片や鉄器、須恵器片、灰釉陶器片、管玉等が雑多に黒褐色腐食土（2次堆積ローム）から出土した。この間には10cm～30cmの円礫や角礫も不規則に混入しており、土質は非常にふかふかとして軟弱で、造構は全く検出出来なかった。さらにこの下も同じ地層が続いたが、遺物が出土しなくなつたので発掘を終了した。

2. 遺跡の位置とその状況

所在地は東八代郡境川村藤岱字切附273番地他3筆である。ここは集落の上方で、県道鶴宿一中道線から西へ約50mに入った松尾山智光寺の北に位置し、智光寺遺跡から南西50mにある。

ここは北に傾斜するフラットな所で、2次堆積ロームに覆われている。南は農道を隔ててハードロームの厚い山である。発掘場所と北側一帯には縄文時代中期後半を主とする土器片や石器が散布しており、北30mには横穴式石室をもつての神古墳があったが、昭和50年頃破壊したという。現在は天井石か奥壁と考えられる巨石が1個畠の中に残されており、その上に祠が安



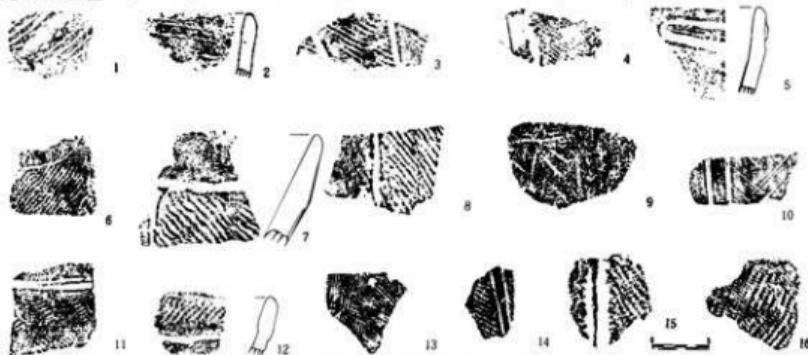
第1図 切附遺跡付近図

置され、石棒や凹石が多数集められている(図版)。しかし古墳らしい痕跡は全く見当らない。
なお位置や環境については智光寺遺跡の項を参照されたい。

以上のように、この発掘場所からは縄文時代や古墳時代の遺物が出土したが、遺構は全く確認されなかつたことや、地層の状況などから判断すると、少なくとも管水路埋設地には遺跡はなかったと考えられる。出土した古墳時代の遺物は、子の神古墳を破壊して、削平した際に紛れ込んだものかと考えられる。

3. 遺 物

縄文式土器 (第2図) 中期前葉五領ヶ台式と思われる2点(1、2)以外は中期後葉の曾



第2図 切附遺跡出土縄文式土器

利式後半期のものであろう。

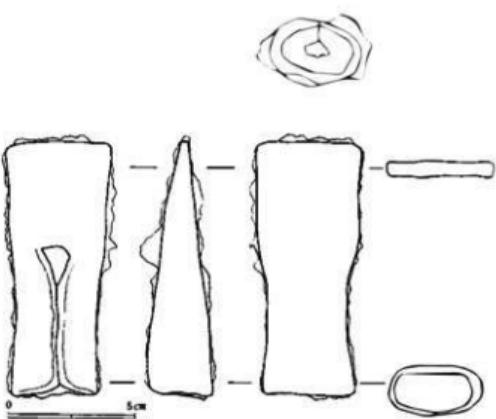
ただし16はやや逆るかも知れ
ない。

鉄 器 (第3・4図)

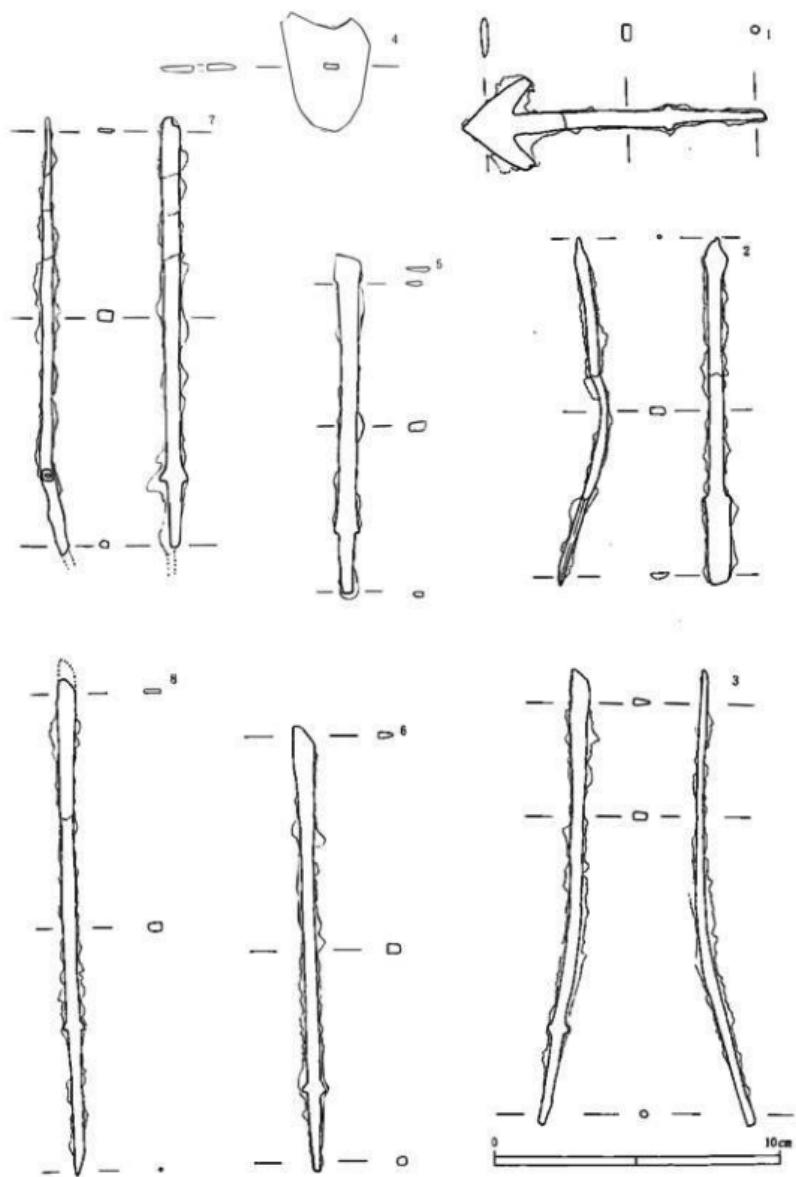
古墳時代後期6世紀末から
7世紀初頭の鉄鎌と鉄斧である。鉄鎌の1と4は平根式であるが他は尖根式である。現状の長さは1が10.7cm、2が12.1cm、3が16.1cm、4が4cm、5が11.9cm、6が15.7cm、7が15cm、8が17.4cmである。鉄斧は有袋式で長さ10cm、最大巾4.1cmである。

須恵器 灰釉陶器 (第5図)

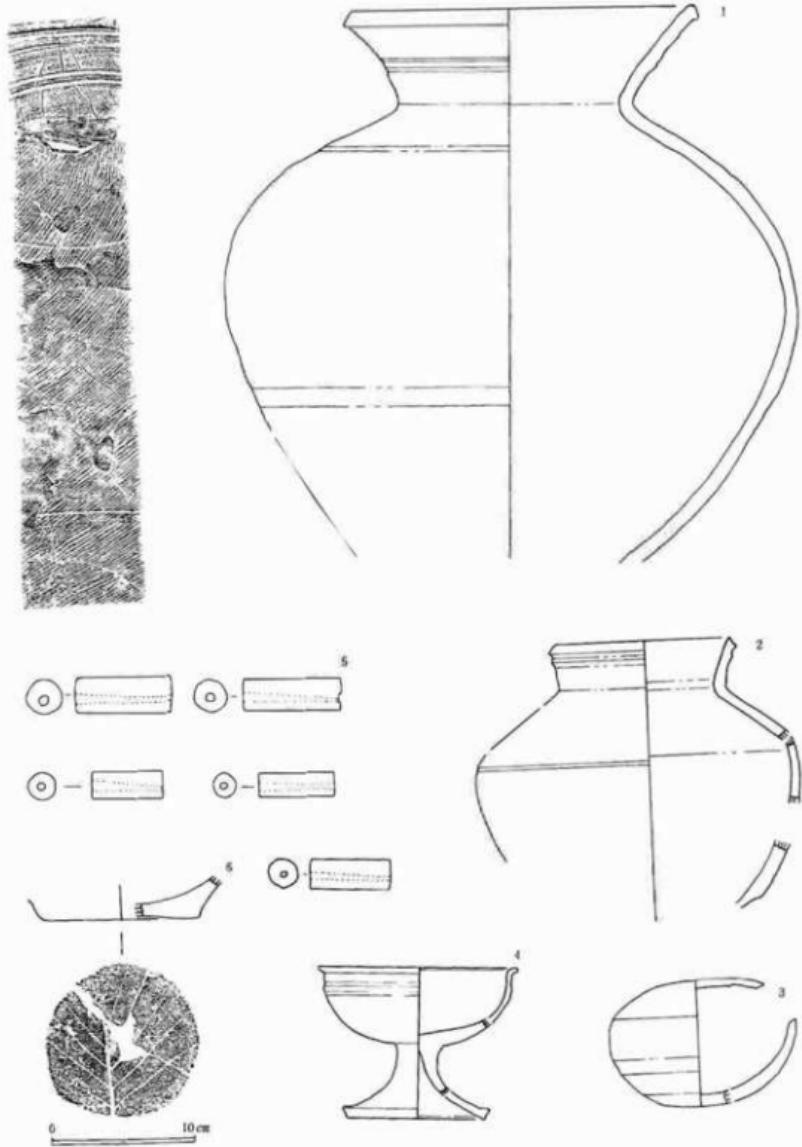
鉄器とほぼ同時期のもので



第3図 切附遺跡出土鉄斧



第4図 切附遺跡出土鐵鎌

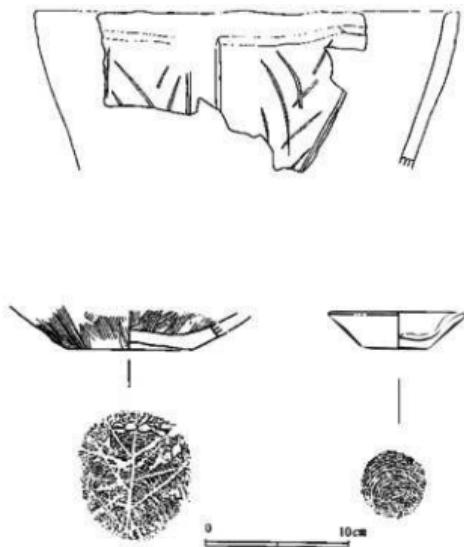


第5圖 切附遺跡出土遺物

あろう。1、3、4が須恵器、2が灰釉陶器である。1は胴部の1部と底部が欠損していて現状の高さ39.5cm（推定高さ42cm）、胴部の最大径40.1cm、口径23.7cmである。内側には焼き目がない。3は平瓶で注口部と胴部の大半が欠損していて、高さ8.9cm、胴の最大径13.2cmである。4は环部と脚部の大半が欠損していて、高さ10.7cm、口径14.3cm、底径9.8cmである。2は口縁部から下に施釉があり、口径12.4cm、推定胴部の最大径が22.8cmである。

管 玉（第5図） 緑色の碧玉製で、それぞれ長さと直径は6.8cm、2.6cmと7cm、2.2cmと5cm、1.9cmと5.3cm、1.7cmと5.7cm、2.1cmである。穿孔は全て片側からで、不整円形を呈し、直径は約4.1mm～0.5mmである。

以上縄文時代と古墳時代の遺物が出土したのであるが、造構は全く検出されなかった。その包含層は搅乱層と考えられ、発掘した狭い範囲だけでは遺物が何故混入したのか把握出来なかった。



第6図 切附遺跡出土遺物

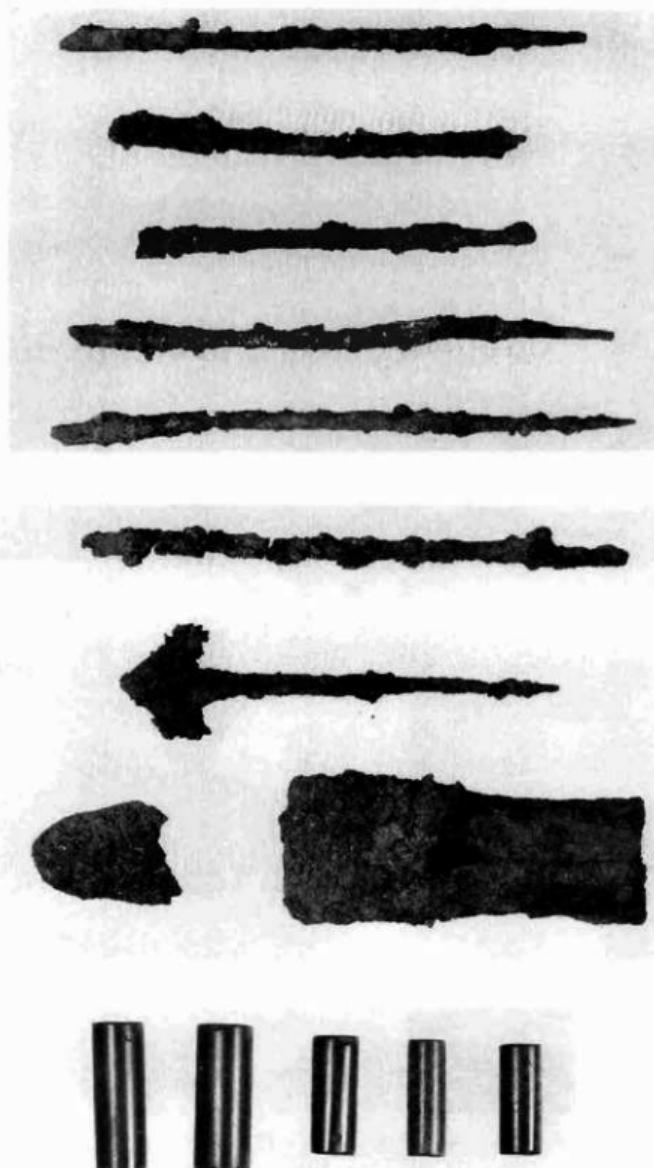


遺 跡 近 景

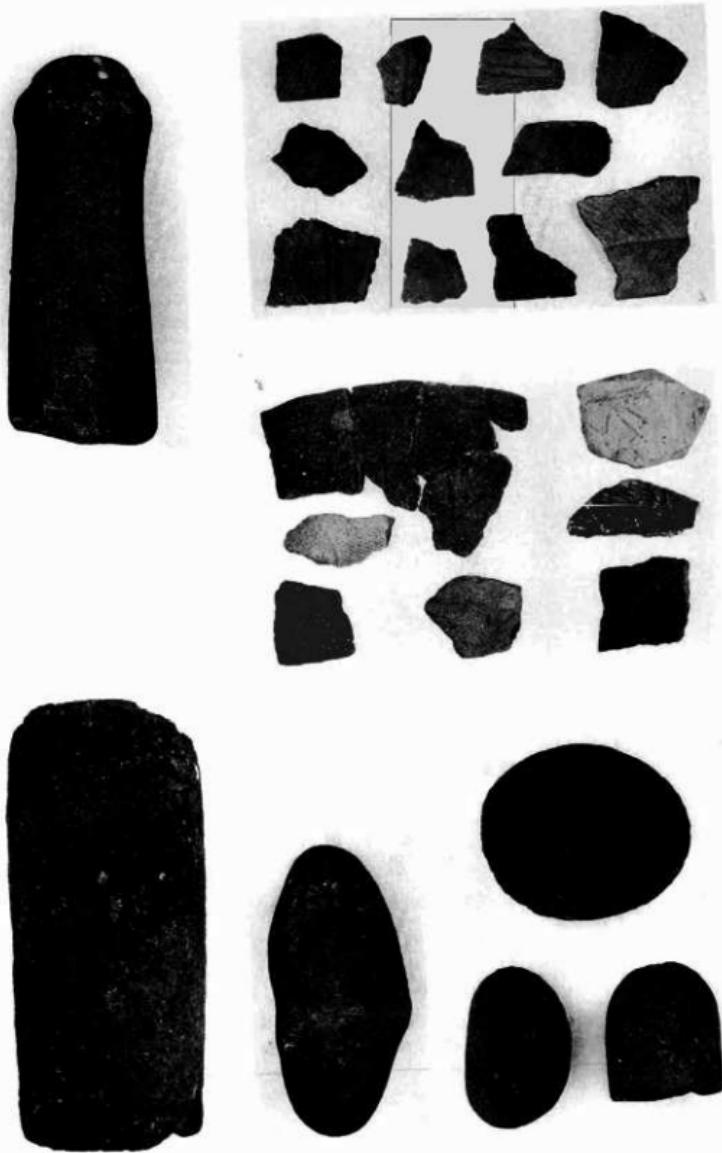


須 惠 器

國 版 1 切 附 遺 跡



図版 2 切附遺跡出土遺物



圖版 3 切附遺跡出土遺物

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第19集

上野原遺跡

智光寺遺跡

切附遺跡

笛吹川農業水利事業に伴う発掘調査報告書

印刷日 昭和 62 年 3 月 10 日

発行日 昭和 62 年 3 月 15 日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 鳴峠南堂印刷所

